ISSN 1880 − 5035

平成25年度国際子ども図書館

児童文学連続講座講義録

英米児童文学をめぐる時代と環境

2014年10月
国立国会図書館　国際子ども図書館

『第九軍団のワシ』
ローズマリ・サトクリフ 作　猪熊葉子 訳
岩波書店　2007
＜請求記号 Y7-N07-H83＞
p. 17参照

『ボグ・チャイルド』
シヴォーン・ダウド 作　千葉茂樹 訳
ゴブリン書房　2011
＜請求記号 Y9-N11-J185＞
p. 41参照

『タンタンタンゴはパパふたり』
ジャスティン・リチャードソン、ピーター・
パーネル 文　ヘンリー・コール 絵
尾辻かな子、前田和男 訳　ポット出版　2008
＜請求記号 Y18-N08-J199＞
p. 64参照

『小公子』
フランシス・ホジソン・バーネット 作
脇明子 訳　岩波書店　2011
＜当館請求記号 Y7-N12-J28＞
p. 75参照

『平成25年度児童文学連続講座講義録』の刊行に際して

国際子ども図書館では、児童サービスに従事している図書館員等の方々を対象に、国内外の児童書・児童文学に関する幅広い知識の涵養を目的として、平成16年度から毎年、「児童文学連続講座」を開講し、平成25年度までに10回の連続講座を行ってまいりました。初回テーマ「ファンタジーの誕生と発展」を始めとして、「日本児童文学の流れ」、「絵本の愉しみ」、「日本の昔話」ほか、児童文学に関わる多様なテーマを取り上げております。これまでの児童文学連続講座の概要及び講義録については、次の URL を御参照ください（http://www.kodomo.go.jp/study/chair/outline/index.html）。

平成25年度の児童文学連続講座は平成25年11月11日、12日に国際子ども図書館において開講し、「英米児童文学をめぐる時代と環境」と題して、「時代」あるいは「環境」を浮き彫りにする特徴的な題材を取り上げて、各講師からお話しいただきました。開講に当たっては、前年度に続き日本女子大学教授で当館客員調査員の川端有子先生に監修をお願いいたしました。

各講座のタイトルには、「歴史物語」、「風土」のほかに、「セクシュアル・マイノリティ」といった言葉も登場し、監修者の川端先生自らがおっしゃっているように、ややもすると、ばらばらな印象を読者の皆様に与えるかもしれません。しかし、例えば、イギリスの児童文学において歴史物語がどのような時代背景の下で、どのように著されているのか、あるいは、「セクシュアル・マイノリティ」というデリケートなテーマがアメリカ児童文学においていち早く取り上げられた背景は何かなど、各講座における問題設定と考察に触れると、それぞれが時代や環境を象徴するにふさわしい題材を取り上げているということが見えてくることと思います。

また、今回当館からは、西尾初紀が、「少年少女 SF 小説全集の興亡」と題して、日本国内で1950年代後半以降に刊行された児童向け SF 小説資料を紹介いたしました。

本書は、各講師の語り口をそのままに記録した講義録です。各講義録冒頭に講義で使用したレジュメを付し、また、末尾に講義で紹介された資料のリストを収録し、当館所蔵資料には請求記号を付しました。様々な御事情から受講することができなかった方、受講した内容を再確認して研究を深めたい方など、多くの方々に本講義録を御参照いただければ幸いです。

末尾ながら、監修及び講師をお引き受けくださった川端先生、そして講師をお引き受けくださった本間裕子先生、内藤貴子先生、水間千恵先生に厚く御礼申し上げます。

平成26年10月

国立国会図書館国際子ども図書館長
佐　藤　　毅　彦

平成25年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「英米児童文学をめぐる時代と環境」

目　　次

【口絵】

『平成25年度児童文学連続講座講義録』の刊行に際して　佐藤　毅彦　……　1

【講座概要】　……　3

【凡例】　……　4

はじめに　川端　有子　……　5

イギリスの歴史物語の流れ　本間　裕子　……　8

児童文学が描くイギリスの風土と子ども　内藤　貴子　……　23

児童文学におけるセクシュアル・マイノリティ　水間　千恵　……　50

歴史とジェンダーをめぐって
――バーネットの『小公子』、『小公女』、マロの『家なき子』、『家なき娘』の場合
川端　有子　……　71

資料紹介「少年少女 SF 小説全集の興亡」　西尾　初紀　……　91

結び　川端　有子　……　105

【講師略歴】　……　107

平成25年度国際子ども図書館児童文学連続講座―国際子ども図書館所蔵資料を使って

総合テーマ「英米児童文学をめぐる時代と環境」
講座概要

○総合監修　川端　有子（日本女子大学家政学部児童学科教授、国立国会図書館客員調査員）

○講義日程　平成25年11月11日（月）～12日（火）

	時　　間	内　　容	講　　師
11月11日	9時30分～10時10分	館内見学	
	10時10分～15分	開講、諸注意	
	10時15分～30分	はじめに	川端　有子
	10時30分～12時10分	イギリスの歴史物語の流れ	本間　裕子 （青山学院大学非常勤講師）
	13時10分～14時50分	児童文学が描くイギリスの風土と子ども	内藤　貴子 （昭和女子大学・東京女子大学・和洋女子大学ほか非常勤講師）
	15時00分～16時40分	児童文学におけるセクシュアル・マイノリティ	水間　千恵 （川口短期大学こども学科専任講師）
	16時40分～17時	グループ討議オリエンテーション	
11月12日	10時～11時40分	歴史とジェンダーをめぐって ――バーネットの『小公子』、『小公女』、マロの『家なき子』、『家なき娘』の場合	川端　有子
	12時50分～13時30分	資料紹介「少年少女 SF 小説全集の興亡」	西尾　初紀 （国際子ども図書館資料情報課長）
	13時30分～45分	結び	川端　有子
	13時55分～14時55分	グループ討議	
	15時05分～55分	グループ討議（発表・講評）	
	15時55分～16時	修了証書授与、閉講	

凡例

○　本書は、平成25年11月11日及び12日に国際子ども図書館で開催した「平成25年度国際子ども図書館児童文学連続講座―国際子ども図書館所蔵資料を使って」(総合テーマ：英米児童文学をめぐる時代と環境）を基に編集した講義録です。

○　各講師の「レジュメ」、「紹介資料リスト」も併せて掲載しました。「レジュメ」は講義本文の前に、「紹介資料リスト」は講義本文の末尾に掲載しています。それぞれ刊行に際し、必要に応じて改訂を行っていますので、講義当日に配布したものとは異なる場合があります。

○　「紹介資料リスト」は、講義の中で紹介された資料のリストです。原則として国立国会図書館の所蔵資料の書誌情報を掲載しています。国立国会図書館に所蔵のない資料については、国立国会図書館サーチ等の書誌情報を参照しました。

○　「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、国際子ども図書館の請求記号を記載しました。国際子ども図書館に所蔵がない場合は、国立国会図書館東京本館の請求記号を記載し、請求記号欄に（本館）と付記しました（所蔵状況：平成26年７月現在)。

○　講師の肩書きは講座実施当時のものです。

レジュメ

総合テーマ「英米児童文学をめぐる時代と環境」
はじめに

川端　有子

社会文化的環境の中での児童文学

歴史
社会
文化
地域性

などとの関わりで考える。
作者の過去、対象の現在、理想の未来
作品の中の時代、時代の中の作品

1）歴史小説
2）風土
3）人間の在り方／セクシュアリティ
4）人間の在り方／ジェンダー・地理・歴史

どう伝えるか、どう語るか、物語の在り方、時代による変遷

はじめに

川端　有子

社会文化的環境の中での児童文学

御紹介にあずかりました川端と申します。よろしくお願いいたします。

今回この講座の総合テーマを「英米児童文学をめぐる時代と環境」といたしました。全く当たり前のことではあるのですが、児童文学に子どもが関わっているのは、子どもが想定された読者であるという、その部分だけである、ということは、意外と意識されていない点です。書くのも、出版に値すると考えるのも、出版するのも、評価するのも、研究するのも、大人です。読むのは子どもであっても、それを選ぶのは大人ですし、貸したり売ったり買うのも大人、推薦したり読み聞かせしたりするのも大人です。現代という時代背景の中では当たり前のことなのでほとんど意識されていませんが、これほどに大人の思惑と関わった上で子どもの所に届くものなのですから、当然、児童文学はそれが書かれた社会文化的環境の中で培われたものに他ならないわけです。児童文学に関わる大人としては、その本の歴史的・文化的・社会的・地域的な側面を考えてみる必要があると思います。

確かに子ども読者は物語をそのようには読みません。例えば「フランバーズ屋敷の人びと」を、時代背景ということをそれほど考えて読む子どもはいないと思うのです。自分自身の経験でも、その物語がいつ書かれたのか、どこのものであるのか、作者がどういう人なのか、そのようなことは読書の面白さとは全く関係がなかった、というのが子ども時代の読書でした。けれども、読書する子どもたちの周囲にいる大人がそれを知らなくていい、ということにはならない、いや、むしろ知っていなければならないと思います。

それを読書する子どもたちに教える必要はないかもしれません。けれども読書をめぐって子どもと対話したり質問されたり薦めたり、そういった活動の中で、状況を知っている大人が関わるということは大変大事なことではないでしょうか。そういう周囲の大人の一言が子どもの読書を深めたり、目を見開かせたり、また、より高次の理解に導くことができるのではないかと思います。

例えば『クマのプーさん』（*Winnie-the-Pooh*, 1926）を書いたミルン（A.A. Milne, 1882–1956）を例にとってみますと、この本はおおよそどんな社会的背景も裏の意味も思惑もないというように思われていますし、永遠に続く子ども時代を礼賛するものと思われていて、大人にも子どもにも癒し系の物語と言われているのは、書かれた当時も今も変わっていません。けれども大人が詳しくこの物語の背景や作者を検証してみますと、ここで礼賛している子ども時代というのが、イギリスの中流家庭で育った作者の過去、作者が物語を語って聞かせた、自分自身の息子のクリストファー・ロビンの現在、そしてクリストファー・ロビンが大人になってしまった未来における子ども時代の意味、といったようなものの合成であるということが明らかになります。つまりミルンの場合、第一次世界大戦前の牧歌的な古き良き英国、大戦から帰還した元通信大尉としての作者が安らぎを求めた、田舎の別荘を背景とした子ども時代の癒し、目の前の息子が大人になってしまっても、その魔法の場所で永遠に遊んでいるクリストファー・ロビンとクマのプーさん、という永遠の理想の子ども時代、といった作者にとっての過去・現在・未来があの「百ちょ森」というところに融合されているわけです。そのことが実際の息子のクリストファー・ロビンを苦しめ、ミルンとクリストファー・ロビンの親子の断絶の悲劇を生んだということは、ここでは語るのはやめておきますが、このように、どんな児童文学でも作品の書かれた時代を考え、時代の中での作品を考えること抜きには、本当の大人の理解には到達できないのではないでしょうか。

なぜ『クマのプーさん』には大人が出てこないのだろう。ぬいぐるみの中に女の子がいないのは

なぜだろう―お母さん役のカンガを除くと、この世界は女性不在です―。「百ちょ森」という理想的な自然環境がぬいぐるみの動物たちの住み家であるのはなぜなのだろう。なぜクリストファー・ロビンは学校に行き始めると「百ちょ森」には来なくなるのだろう。それでも、魔法の場所に永遠に男の子とクマが遊んでいる、というのはどうしてなのだろう。こうした問いはこの物語が書かれた時代、作者の属していた社会的階級、ロンドン郊外の田舎の農場の別荘、といったような当時の時代、自然環境、社会環境を抜きにしては考えられません。

本講座について

そのようなわけで、今回の連続講座では「英米児童文学をめぐる時代と環境」ということをテーマに四つの講義を組んでみました。一つ目は歴史時代を扱う歴史小説です。歴史小説自体にも、時代的な変遷や書き方のバラエティがあります。どんなヒーローをクローズ・アップするか、どういう体制側から書くのか、どんな大きな歴史を書くのか、どんな小さな歴史を書くのか、女性が書くのか、男性が書くのか、大人の目で見るのか、そして作中では女性の目で見るのか、男性の目で見るのか、子どもの目で見るのか。同時代に身を置いて見るのか、現在の目で見るのか、また、それは本当に歴史の物語なのか、時代を変えることで現代の問題を仮託して語っているのではないか。イギリス人は歴史小説や伝記が大好きですし、「ヒストリー」（history）は「ストーリー」（story）という意味も持っていました。しかし例えば『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures in Wonderland,* 1865）の中では歴史ほど無味乾燥なものはないということになってしまっています。歴代の王様と年代を丸暗記するだけの科目と捉えられているわけです。では、何がこの無味乾燥な歴史を豊かなストーリーに変えているのでしょうか。

次に社会文化的環境を含む風土の考察という講義が続きます。人々の物語を生む土壌としての「環境」は、歴史と文化を吸収した自然の風景です。物語の舞台となった場所を訪れると、おのずから物語が生まれた理由が体感できるという瞬間があります。それが著者の描写力を通じて、普遍的に通用する物語となることができるのは、読者自身の体験や、読者の周りの人々との関わりから生じた共感、あるいは共感と信じたもののお陰であるのかもしれません。これにもまた風土について、環境についての、私たちの認識の歴史的推移によって、扱われ方や主題が変遷してきた、そんな歴史があります。

また、児童文学では比較的新しく、また取り扱いが微妙なテーマにセクシュアリティというものがあります。人間の様々な、そして根源的な在り方を扱う問題としてセクシュアル・マイノリティというのは極めて重要なことなのですが、同時に非常にプライベートなものであり、語りにくいものでもありました。アメリカでいち早く話題となり、今や当たり前に語られるようになった物語も、日本における受容や、実際に幼い読者に届けるときの問題については、やや棚上げ状態にあるように思われます。これもまた社会の在り方や家族、個人の問題としてどのように変化しているのか、始まったばかりの歴史ですが、きちんと認識しておきたいと思います。

最後に、本年度の講座の締めくくりとして、ある時代のある地域の社会的・歴史的環境におけるジェンダーの交錯をめぐって、四つの物語の比較を試みようというのが、私の講義の主題です。

ばらばらなように見えるかもしれないのですけれども、この四つの講義は現在の児童文学研究の動向を体現したものでもあります。それを読書の現場に反映させていくために、皆さんで考えながら聞いていただければありがたいと思います。こういった本をどう伝えるか、どう語るか、物語の在り方、時代による評価の変遷はどうなのか、そのようなことを一緒に考えてみたいと思っております。

（かわばた　ありこ　日本女子大学家政学部
児童学科教授、国立国会図書館客員調査員）

レジュメ

イギリスの歴史物語の流れ

本間　裕子

◇歴史物語の起源
ウォルター・スコット（Walter Scott，1771–1832）
『ウェイヴァリー』*Waverley*（1814）
『アイヴァンホー』*Ivanhoe*（1820）
『ロブ・ロイ』*Rob Roy*（1817）

◇初期の歴史物語
ロバート・ルイス・スティーブンソン（Robert Louis Stevenson，1850–1894）
『宝島』*Treasure Island*（1883）
『ジキル博士とハイド氏』*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*（1886）
『さらわれたデービッド』*Kidnapped*（1886）

◇帝国主義者の歴史物語
G. A. ヘンティ（G. A. Henty, 1832–1902）
『インドのクライブ』*With Clive in India*（1884）
『ブリトン人ベリック』*Beric the Briton*（1893）

ラドヤード・キプリング（Rudyard Kipling，1865–1936）
『ジャングル・ブック』*The Jungle Book*（1894）
『プークが丘の妖精パック』*Puck of Pook's Hill*（1906）

◇主流から外れた視点の歴史
ナオミ・ミッチソン（Naomi Mitchison，1897–1999）
『征服された者』*The Conquered*（1923）
『雲の上のカッコウの国』*Cloud Cuckoo Land*（1925）
『女性宇宙飛行士の回想』*Memoirs of a Spacewoman*（1962）

◇20世紀の歴史物語
ジョフリー・トリーズ（Geoffrey Trease，1909–1998）
『反逆のきっかけ』*Cue for Treason*（1940）
『この湖にボート禁止』*No Boats on Bannermere*（1949）

◇ローマン・ブリテンからアーサー王へ
ローズマリ・サトクリフ（Rosemary Sutcliff，1920–1992）

『第九軍団のワシ』*The Eagle of the Ninth*（1954）
『ともしびをかかげて』*The Lantern Bearers*（1959）
『落日の剣』*Sword at Sunset*（1963）
『太陽の戦士』*Warrior Scarlet*（1958）

◇その他の歴史物語
ヘンリー・トリース（Henry Treece，1911–1966）
「ヴァイキング 3 部作」*Viking Trilogy: Viking's Dawn*（1955）, *The Road to Miklagard*（1957）, *Viking's Sunset*（1960）
シンシア・ハーネット（Cynthia Harnett，1893–1981）
『ユニコーン印の荷物』*The Load of Unicorn*（1959）

◇他の時代を扱った物語など
K. M. ペイトン（K. M. Peyton, 1929– ）「フランバーズ屋敷の人びと」（『愛の旅だち』、『雲のはて』、『めぐりくる夏』、『愛ふたたび』）*Flambards*（1967）, *The Edge of the Cloud*（1969）, *Flambards in Summer*（1969）, *Flambards Divided*（1981）
ジャミラ・ガヴィン（Jamila Gavin, 1941– ）『その歌声は天にあふれる』*Coram Boy*（2000）
スーザン・クーパー（Susan Cooper, 1935– ）『影の王』*King of Shadows*（1999）

◇第二次世界大戦の物語
ニーナ・ボーデン（Nina Bawden, 1925–2012）『帰ってきたキャリー』*Carrie's War*（1973）
ロバート・ウェストール（Robert Westall, 1929–1993）『"機関銃要塞"の少年たち』*The Machine Gunners*（1975）
ミシェル・マゴリアン（Michelle Magorian, 1947– ）『おやすみなさいトムさん』*Goodnight Mister Tom*（1981）

イギリスの歴史物語の流れ

本間　裕子

歴史物語の起源

今日はイギリス児童文学の中の歴史物語の流れについていくつかテーマを絞って御紹介したいと思います。まず、初めにイギリス児童文学の歴史物語に入る前に、大人向けの歴史小説の起源について簡単に説明していきます。

イギリスの小説自体は18世紀のダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660–1731）の『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*) などから始まったと一般に考えられています。これら初期の小説は主にリアリズム小説と言われ、同時代を舞台にしたフィクションが日記や書簡体などいろいろな形で書かれていました。

それに対して19世紀になり、1814年から著作を出版し始めたウォルター・スコット（Sir Walter Scott, 1771–1832）は歴史、つまり過去を舞台にした小説を書いており、彼が歴史小説の始祖と言われています。

ウォルター・スコットはスコットランドのエディンバラ出身の作家で、ロマン派に属する詩人、作家でした。過去を舞台にしたロマンチックな冒険を描いた小説がヨーロッパ中に大変な人気を博し、特に『ウェイヴァリー』(*Waverley*, 1814) から始まるシリーズが有名ですが、その中でも一番早く日本語に翻訳され、知名度も一番高いと思われる『アイヴァンホー』(*Ivanhoe*, 1820) や『ロブ・ロイ』(*Rob Roy*, 1817) が代表作です。かなり改訂が加えられましたが、『ロブ・ロイ』は1995年に映画化され、その原作となっています。それから『ラマムーアの花嫁』(*The Bride of Lammermoor*, 1825) は彼の代表作の中には入らないとは思うのですが、これはドニゼッティのオペラの原作となっています。ほかにもオペラの原作に多数取り入れられていて、いかにヨーロッパで人気がある作家だったかが分かると思います。なお、この『ラマムーアの花嫁』を取り上げたのは、これ自体がとても有名なオペラだからです。話とはあまり関係がないのですが、とても美しい曲が入っています。

スコットの小説はロマンチック、ロマン派であることだけが特徴ではなく、その出生地がスコットランドということも、彼が歴史小説を書いた背景として非常に大きく影響していました。もともとイギリスが統一される前、スコットランド、イングランド、ウェールズ、そしてアイルランドは別々の国でした。イングランドとウェールズの実質的な併合は13世紀と比較的早かったのですが、スコットランドとの統合は18世紀初めのことでした。ようやく一つの国として統合されても、政治権力、経済的繁栄、どれもスコットランドはイングランドに劣っていました。宗教の面でもアングリカン・チャーチというのがイギリスの国教会だったのですが、これはイングランドから発祥した宗教で、主にイングランド中心に信じられ、スコットランドには別の宗派も多くありました。このほかにもいろいろな点で違いがありました。また、スコットランドはいまだにイングランドにライバル意識を燃やしており、例えばサッカーでも違うチームとして活躍している、それくらいに独自のアイデンティティを持っています。

そのスコットランド統合からおよそ数十年が経った18世紀半ば以降、ようやく産業革命とともに経済、文化が活気を見せたのがスコットランド啓蒙（The Scottish Enlightenment）と呼ばれる時代です。この時代の文学面、文化を代表すると目される作家がウォルター・スコットです。この時

代背景と出身地、それからロマン派ということの三つが、これから比べていきたい要素になっていきます。

彼の作品『アイヴァンホー』を紹介します。主筋の姫と恋に落ちたため勘当された騎士が、アイヴァンホーと名乗り、馬上槍試合で勝つというエピソードから展開する、ロマンあふれる冒険物語になっています。舞台はフランスのノルマン民族がイギリスを征服し、初めて統一した、と言われるノルマン・コンクエスト（The Norman Conquest of England）の時代から数十年後のイギリスです。まだイギリスを征服したノルマン人と元々住んでいたサクソン人との対立も激しく、さらに獅子心王リチャード１世が十字軍遠征に向かったときに各国との政治的軋轢から陥れられ、人質にされてしまうなど、複雑な政治状況が作品の時代背景となっています。イギリス史を全く知らないとちょっと読みにくいところがあるために、歴史小説が好きな日本人でもなかなかこの『アイヴァンホー』以降に出版された歴史小説をどんどん読みたいという気持ちにはならず、そのため彼の多くの作品が訳されてこなかったのだと思われます。

ここで日本の歴史小説とイギリスの歴史小説の大きな違いを確認しておきますと、日本の歴史小説では豊臣秀吉とか徳川家康とか、歴史上の主要人物を主人公又は中心に据えて物語、小説を描くことが多いのに対し、イギリスではこの『アイヴァンホー』を見ても分かるとおり、それが時代背景にはなっていても、例えばリチャード１世は騎士の仕える主君として少しだけ顔を出すのですが、とはいっても彼の政治的状況を主眼にした物語ではなく、彼の周辺にいるような人たちが主要人物として活躍する形が主流でした。その形が一番よく表れているのがアレクサンドル・デュマ（Alexandre Dumas，1802–1870）の『三銃士』（*Les Trois Mousquetaires*, 1844）ですね。これも『アイヴァンホー』と同じ歴史小説の系統にあると思うのですが、デュマも大体スコットと同じ時代に活動した作家です。

このようにイギリスの歴史冒険物語は歴史上の主要人物の周辺を描き、日本の歴史小説などでは歴史上の主要人物を中心に書く、というところが大きく違うわけです。現在ではイギリスでも、エリザベス女王、ヴィクトリア女王などを中心とした小説がいろいろ出ているようですが、最初に書かれた、ヨーロッパで多分一番初めと言われる歴史小説を書いたスコットがこのようなスタイルを確立して非常に人気があったために、このような歴史小説のスタイルが20世紀初めまで続きました。

初期の児童文学における歴史物語

さて、ここからが児童文学の話になります。レジュメに「初期の歴史物語」と書いておきましたが、初期児童文学の歴史物語の作家の一番最初が誰であったのか、私の知る限りでは定かではありませんが、確実にその一人なのはロバート・ルイス・スティーブンソン（Robert Louis Stevenson, 1850–1894）です。もちろん『宝島』（*Treasure Island*, 1883）、『ジキル博士とハイド氏』（*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, 1886）などで日本でも非常に有名な作家ですが、この人が児童文学作品として『さらわれたデービッド』（*Kidnapped*, 1886）という歴史物語を書いています。この作家がどのくらい有名かというと、ユネスコが運営する、世界約150か国が参加し、1,100もの言語による200万データを有するデータベース「世界翻訳書目録」（Index Translationum）の統計で、最も翻訳が多い作家の26位に挙げられています。ちなみに１位はアガサ・クリスティだということで、非常に興味深いリストです。

話を元に戻しまして、スティーブンソンはウォルター・スコットと同じくスコットランド、エディンバラの出身の作家です。この『さらわれたデービッド』はスコットランドの伝統を踏襲した冒険物語になっています。あらすじを説明しますと、両親を亡くした主人公の若者デービッドが、今まで存在も知らなかった伯父がいると聞いて訪ねて行ったところ、明らかに怪しげで陰気な人でした。結局この伯父に騙されて、タイトルにあるとおり、さらわれてしまったのです。初めは、故郷から遠く離れたアメリカへ向けて船で連れ去られますが、航海中にほかの小舟と衝突して座礁し、そのときに溺れかけていた謎の戦士アランを助けて船

に乗せたことから新たな冒険が始まります。彼を助けた縁で、デービッドはすったもんだの末、結局船から降りてアランの故郷へ向かうことになりますが、その際、史実にある殺人事件に出くわします。犯人に間違えられた上に、事件にまつわる政治的背景に巻き込まれ、スコットランドの更に北部のハイランド地方を逃げ回る旅を続けることになります。最終的にデービッドは伯父と折り合いをつけ、無事にアランをフランスへ帰すことができ、めでたく結末を迎える、という物語です。

この物語の背景には、1688年の名誉革命で王座を追われたジェームス２世を正統な王と仰ぐ、現王権の反対派であるジャコバイト党の反対運動によりアッピン（Appin）という場所で起きた殺人事件があります。アランは虚構の存在ですが、アランの故郷としたアッピンで事件が起こったのは本当のことなのです。名誉革命は1688年のことですが、この殺人事件はそれより半世紀以上後の1752年に起きたことで、このような大人にもなかなか難しい、細かく複雑な事情が時代背景となっているので、子どもには理解しにくいだろうところが残念ですが、冒険物語としてはそれが分からなくても十分楽しめるようになっています。大人向けの小説ではないので、ウォルター・スコットの小説のような恋愛とかロマンとかの要素がない分、『宝島』と同じスリル満点の物語になっています。ジャコバイトの反乱を扱っているとはいえ、自分の故郷を舞台にしているのは、スコットランドに対する誇りや思いの表われかもしれません。この作家の出身地と作品の舞台が同じであるということも、これから歴史物語を読み比べていくときの一つのポイントになります。

このような史実をめぐる冒険物語といったウォルター・スコット張りの歴史物語の伝統は、現代に至るまで途切れることなく続きます。これは児童文学ならではの楽しみかもしれません。

現代のイギリスの大人向けの歴史小説はアカデミックで、専門的で、マニアックな、非常に細かく丁寧に史実を追っていったものか、反対に恋愛小説の歴史ものというのが大きな分野としてあるのですが、確立したジャンルとしての正統派歴史物語というのはなかなか見つけにくい現状があるようで、『ガーディアン』紙では正統な歴史小説を楽しみたいなら、大人向けよりも子ども向けを読んだ方がいい、という記事が最近も書かれていました。おそらく子ども向けのものには教育的要素が求められるため、歴史的事実は間違いがなく、際どかったり、マニアックになり過ぎたりしないように抑えが効いている、そのため正統的歴史小説の醍醐味が児童文学でこそ味わえるという結果になっているようです。

帝国主義者の歴史物語

これが初期イギリス児童文学における歴史冒険物語でしたが、次は、『さらわれたデービッド』と同じ時代に主流だった歴史物語というものを紹介したいと思います。この『さらわれたデービッド』が出版されたのは19世紀イギリスのヴィクトリア朝時代、児童文学では黄金時代と言われた時代です。ルイス・キャロル（Lewis Caroll, 1832–1898）の『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures in Wonderland*）は1865年、バーネット（Frances Eliza Hodgson Burnett, 1849–1924）の『小公子』（*Little Lord Fauntleroy*）は1886年、ポター（Beatrix Potter, 1866–1943）の『ピーターラビットのおはなし』（*The Tale of Peter Rabbit*）はヴィクトリア朝をちょっと超えた1902年、エドワード朝に入って１、２年目で、これらが次々に出版された時代です。児童文学の読書人口が大きく増えたという状況の下で、良い作品が現れるようになったのです。児童文学の読書人口が増えたというのは、子どもへの教育が浸透してきた、そして国が豊かで子どもに本を買えるような状況になった、という時代背景が大きく影響しています。これら現代でも有名な傑作のほかにも、当時、今では名前を知られていない本や雑誌などが子ども向けに数多く出版されました。

その中で少年向けの歴史物語作家として人気があったのが、今回レジュメに載せているジョージ・アルフレッド・ヘンティ（George A. Henty, 1832–1902）です。この人もそれほど名が知られていない作家ではないのですが、先ほどのルイス・キャロルなどに比べると、19世紀という時代をよく反映した作品で評価された作家だったゆえ

に、かえって時代の枠を超えられず、現代にその作品が生き残っていないのかもしれません。彼が体現していた時代、当時のイギリスは大英帝国でした。そして彼が時代をよく反映した作家であるということはすなわち、彼は有名な帝国主義者の一人だったということです。彼の代表作は、『インドのクライブ』(*With Clive in India*, 1884)、そしてこれから紹介する『ブリトン人ベリック』(*Beric the Briton*, 1893) という物語なのですが、これらが書かれた19世紀末は大英帝国絶頂期であり、世界の陸地の4分の1を植民地として有し、日の沈むことない＝必ず太陽が植民地のどこかを照らす＝世界中に植民地を持っていることを誇っていた時代でした。その世界各地、植民地各地でいろいろな時代に活躍する歴史上の人物たちと共に英雄的に活躍する勇敢な少年たちを描き、そしてそれらを読むことによって、帝国主義に燃える少年たちを育てていくことが、ヘンティの作品の大きなテーマでした。日本でも第二次世界大戦中に、そのような教育方針で児童文学が書かれた時代がありました。

彼の作品は非常に数が多いのですが、一般に、どれも時代と場所が変わっているだけで中身は同じという印象を持たれてしまっています。そうはいっても、比較すると、この後の作品と非常によく似た要素、キーワードが含まれていることから、今回はこの『ブリトン人ベリック』という物語を見ていきたいと思います。

これはローマ帝国がイギリスを征服していた西暦60年頃が舞台となった物語です。この時代はイギリスには主にケルト人が住んでいて、そこをローマ帝国が征服したのですが、ケルト民族の中にイケニ族という部族があり、ブーディカ女王という人が有名な「ブーディカの乱」を引き起こしたのです。ローマの歴史を記した歴史家タキトゥスが書いた史書にも記されているのですが、ローマの暴政に反対して決起し、ローマ人が建設したロンディニウム、現在のロンドンを襲撃し、ローマ人など約7万人を虐殺して大勝利を収める、という非常に大がかりな反乱を起こしました。しかし、結集した力は間もなく分裂してしまい、ローマ帝国の軍事力、組織力の前に大敗を喫し、女王を始めとする一族は毒を飲んで死んでいきました。この女王の身辺にいた侍女を母親とする若者が、この物語の主人公ベリックです。彼はこの戦いを生き延びた後奴隷となり、ローマに連れて行かれた末、グラディエイター＝剣闘士として、肉体の力を誇り生き残ります。更には当時の皇帝ネロに認められ、彼の下で働くうちにローマ文化の優れた点を学び取り、その末に自由を勝ち取ってローマ人の妻まで娶り、イギリスに最終的に戻ることになります。そして彼はローマの統治官の一人となってイギリスでその後暮らしていくという、ありそうもないほど大胆な成功物語でした。

ヘンティは帝国主義者ですから、勝者で帝国主義者であったローマ人の立場から物語を描いた方が自然というか、負けて奴隷となった人を書くのは英国人の名折れではないか、と私は最初思ったのですが、それは現在の歴史的解釈で、当時の考え方ではそうではなかったのですね。ヘンティが特にそうだったのかもしれませんが、イギリスはローマの植民地になったことによってローマの文化、組織力を取り入れることができ、文明化し、法制化された国になれた、植民地は良い影響を及ぼしたのだと考えていました。また、もとからイギリス人は誰にも負けない強さを持っていたのですが、それに賢さを合わせ持つ優れた国民をこの出来事が育てたのだ、という解釈が当時かなり広まっていました。そしてヘンティはその解釈を体現し、ローマに一度は負けるがその強さを学び取り、イギリスでそれを広める人になる、という主人公を描いたわけです。

ローマ帝国と大英帝国を比べるのは当時のイギリスの普通の見方の一つでした。「パクスロマーナ」、ローマの平和という言葉がありますが、それになぞらえて「パクスブリタニカ」、大英帝国の平和を世界に広めているのだ、というのが当時の帝国主義者の正義の論理で、ローマの衰退から学んで、大英帝国はいつまでもこの繁栄を続けようというのが彼らの歴史の見方でした。これをそのまま体現したのがこの『ブリトン人ベリック』という小説なのです。

さて、この物語をスティーブンソンの『さらわれたデービッド』と比べてみましょう。スティーブンソン

は、もともとは別の国であったスコットランドの出身で、さらに物語は王家に対する反乱分子、ジャコバイト党を描いており、彼らに対してある程度、全面的に支持していないまでも同情的な視点も表しています。それに対してヘンティは主流派であるイングランド、ケンブリッジ出身で、当時主流だった考え方をそのまま体現した物語を著しました。歴史物語は過去の歴史を語る物語ですが、実際は、作家の生きる時代と、その作家の立ち位置や価値観が一番大きく表れやすい作品であるということが、この二つを比べるとよく分かると思います。さらに、作品中、物語性に重きを置いたか、またそれによって主流派以外にも受け入れられたかというところが、ヘンティのような時代を超えられない作家となるか、スティーブンソンのような時代を超えて読まれる作家になるかの分かれ目となったのかもしれません。

次はラドヤード・キプリング（Rudyard Kipling, 1865–1936）に行きます。帝国主義者といえば代表的なのがキプリングと言われています。彼は、現在日本では『ジャングル・ブック』（*The Jungle Book*, 1894）など児童文学でよく知られている作家ですが、大人向けの小説や詩の知名度はあまり高くないようです。しかし、当時のイギリスでは大人向けの作家として非常に評価され、皆に尊敬されていました。その証拠にイギリスの、その時代を代表するたった一人の詩人に与えられる「桂冠詩人」という称号を受けないかと打診されたのですが、彼はそういう称号などを受けるのは好きでなくて辞退したということです。キプリングはインドのムンバイ（ボンベイ）出身でエキゾチックな作風が人気の要素の一つではあるのですが、時代の主流中の主流という存在でした。彼は歴史物語を書いていませんが、『プークが丘の妖精パック』（*Puck of Pook's Hill*, 1906）いうタイムファンタジーのような短編集を著しています。これをなぜ歴史物語の流れの中に組み込むかというと、この前の時代とこの後の時代をつなぐキーというかチェーンというか、非常に大きなポイントになっていると思われるからです。

物語はダンとユーナという二人の兄弟が「妖精の輪」と呼ぶ、牧草地のきのこが輪になって生えている場所で、偶然妖精パックを呼び出してしまった、という場面から始まります。妖精パックはもちろんシェークスピアの『真夏の世の夢』のいたずら好きの妖精のことですが、なぜかこの物語ではこの地、イングランドのケント州にまつわる妖精で、この地の歴史的人物を呼び出して子どもたちに歴史の薫陶を授けるというか、過去とのつながりを教えるという教育的な立場の妖精になっています。ですから、この物語の内側は過去の歴史的人物が語る10の短編歴史物語から構成され、外側から見ると一つのファンタジーという仕立てになっています。

過去の人物にはファンタジー的な神話上の人物や妖精も出てきます。その他には1066年のノルマン・コンクエストの時代のサクソン人とノルマン人との友情の物語、４世紀のローマ帝国支配下末期の友情の物語、そして最後の1215年のマグナカルタが起草されるまでの物語などというように、歴史を行ったり来たりして、古い方から順に並べているのではない構成になっています。しかし最初の方にあるノルマン・コンクエストの話からマグナカルタの物語までのつながりが後から分かる仕掛けになっていて、よく考えられた構成なのです。キプリングがヘンティの歴史物語と同じようにローマン・ブリテンと呼ばれるローマ人の支配下のイギリスと、ノルマン・コンクエストという、イギリスが征服された二つの時代をあえて取り上げているのは決して偶然ではありません。征服する側のローマ人パルメシウスと征服される側のケルト民族のパルティナクスの友情、ノルマン・コンクエストの話ではノルマン人リチャード卿とサクソン人ヒューの友情が描かれ、敵対する立場を乗り越えて友情の方を重んじ、主人公たちは力を合わせてイギリスの危機を救う、といったようなエピソードが繰り返し語られます。その結果、最終的に征服者であるノルマンディのリチャード卿が「私はウィリアム公に従い／イングランドに来た、そう、征服するために／だが、いつしかそれは逆になってしまった／イングランドは私を征服したのだ！」と、この『プークが丘の妖精パック』中で歌うのですが、この詩から分かるとおり、イ

ングランドは征服されるどころか、かえって征服者たちを取り込んでしまい、自分たちが生き残ったのだと主張されています。このファンタジーはイギリスの強さ、正当なる歴史、一度も征服されていないとまでは言えないまでも、征服者をも巻き込んで生き残ってきた歴史というものを証明する物語となっているわけです。これが、キプリングが時代を代表する帝国主義者たるゆえんでしょう。このように帝国主義の正当性を伝えるという、イデオロギー、主義主張がはっきりした物語ですが、ヘンティの物語のように時代に捕らわれることなく、いまだ現代にまで残る物語を書き著すことができたのです。

キプリングの大人向け作品が残っていないのは、帝国主義の代表的存在であったことが反動を引き起こし、後の時代に批判され顧みられなくなったせいでした。しかし現在では、彼の作品は時代を検証する材料として再評価され、新しく読み直される動きが盛んになってきています。そのような大人向けの作品に比べて『プークが丘の妖精パック』はシンプルかつ率直に大英帝国礼賛が込められた作品ではありますが、ヘンティの作品一つ一つで断片的に語っていたビジョンのかけらを短編の中で提示し、それらを大きく一つのファンタジーにまとめてくるスケールの大きさや、ヘンティの作品のように明からさまにイデオロギーを前面に出すのではなく、ファンタジーとしても楽しめる作品となっているところが大きく異なる点です。様々な歴史を寄せ集めたファンタジー仕立てになっているからこそ、彼のこの作品はヘンティやスティーブンソンの作品に比べて、歴史の基礎知識を必要とせず純粋に楽しめる作品として現在にも残っているのでしょう。

主流から外れた視点の歴史

さて、時代も20世紀を更に下ります。ここからは抑圧された、又は弱者の視点から歴史を描いた作品を紹介します。

スコットランド・ルネサンスというのが20世紀初頭から、文芸復興、文学の面での復興の活動としてあったのですが、その中で活躍した一人として認められているのがナオミ・ミッチソン（Naomi Mitchison, 1897–1999）という作家です。彼女は非常に変わった経歴の持ち主で、両親が科学者、そして夫が政治家で、彼女は独占欲、嫉妬心もなく、結婚相手以外の愛人を認め合うオープン・マリッジを20世紀初めに公言し、さらに中絶運動に賛成を唱え、冷戦時代にはソ連にも何度か足を運ぶという非常に急進的な活動家の側面を持っています。生まれたのが1897年、102歳で亡くなったのが1999年と、最近まで生きていた長寿な人で、活動も多岐にわたり非常に多作でした。彼女の最初の作品が『征服された者』(*The Conquered*, 1923）という、日本語訳がない作品です。これはヘンティの作品と筋は非常によく似ていますが舞台設定は少し違っていて、紀元50年代のフランス・ガリアとシーザーが戦った時代が背景になっています。シーザーが書いた『ガリア戦記』は今でも出版されていますが、その戦争のことです。ガリアは英語でゴール地方なのですが、この地方にいたのはやはりケルト民族で、そこの一氏族長の息子が主人公のメロミック、「征服された者」です。彼は一族がローマ人にほとんど皆殺されてしまった後、ローマに連れて行かれ、ローマ人の奴隷となります。ここがヘンティの作品と同じ仕組みになっているところです。ローマの軍人タイタスの奴隷となったために、メロミックは自分の故郷に遠征として赴きます。そしてシーザーのブリタニア侵攻の際に、メロミックは自分の氏族が殺されたときに支援してくれなかったイングランドのケルト族へ復讐を果たします。その後も彼は、事件が起こると主人を置いてガリアの同胞を助けに行ってしまい、いろいろ逸脱した行動を繰り返します。それでも結局は、タイタスとの間に結んだ忠誠心を忘れず、同胞の救出後はケルト人の住むガリアではなく、ローマ人の主人の下に帰って来るのですが、最終的にはケルト民族を殺してしまったシーザーを許せない気持ちが勝って、タイタスの下を去って行きます。奴隷契約を解除して逃げていくそのときに、彼は彼のトーテムであるオオカミになったという、ちょっとファンタジー的な結末になっている物語です。

ヘンティの作品ほどシンプルではないのですが設定は全く同じです。若者がローマ帝国に襲われ

た結果、奴隷にされながらも、ローマの長所も認める、というところまではそっくりなのですが、その後は主人公がどんどん止まることのない出世街道を進むヘンティの作品とは違って、こちらの物語の主人公はいつまでも逡巡を繰り返し、自分の立場をどちらにも定めることができません。これは子ども向けとは言い切れない物語なのですが、まさしくヘンティの物語を20世紀になって読み替えたもの、と解釈することができると考えられています。女性の立場や征服された者の立場、そのほかいろいろな弱者の立場から見たら帝国主義というのはそんなに甘いものではなく、単純に描かれていた時代からは状況が変わっていっているのだと表現しています。

ヴィクトリア朝でも女権運動、フェミニズム運動というのはいろいろな人たちが行っていましたが、20世紀になるとその在り様は深刻さを増し、規模も大きくなっています。ミッチソンは中絶に賛成したこともあり、フェミニズム運動活動家の一人として数えられ、その立場から今までの歴史の読み替えに挑戦した意欲的な作品をいくつか著した作家なのです。

20世紀の歴史物語

もう少し時代を下って、20世紀を代表する児童文学の作家の一人がジョフリー・トリーズ（Geoffrey Trease，1909–1998）です。『反逆のきっかけ』（*Cue for Treason*，1940）は翻訳されていないのですが、『この湖にボート禁止』（*No Boats on Bannermere*，1949）という方は翻訳されています。こちらは現代を舞台にした少年たちの冒険物語です。これと全く同じような調子で、歴史を舞台に描かれたのが『反逆のきっかけ』という物語で、非常に評価が高い作品です。この物語のあらすじは16世紀末のエリザベス朝の頃、領主フィリップ・モートン卿による搾取に対する不満が高まり、14歳の少年ピーターが領主への抗議運動に参加したところ、顔を見られてしまったために自分の村から追われ、逃げることになりました。そして当時盛んだった旅芸人の一座に入り、そしてシェークスピアの下にまでたどり着き、助けられます。その旅の途中で、領主モートン卿がエリザベス女王に対する反逆を企てていたことが分かり、それを女王の側近に伝えようとしたり、この企てを食い止める活躍をする、という物語になっています。

彼は非常に多作な作家で、歴史的にも正しい知識に基づいて荒唐無稽ではない物語を作りましたが、彼の作品はスティーブンソンなどの19世紀の歴史物語、冒険物語と大きく違い、歴史の知識をはっきり持っていなくても十分楽しめる児童文学になっている点、それでいながら歴史の正しい知識を生かした舞台背景を作り、それを古めかしいとか、時代の枠を超えられないと感じさせることなく、充分に歴史のロマンや一体感を感じさせる物語設定になっている点、その二つで非常に優れていました。また、ナオミ・ミッチソンもその一人ですが、それまでは中産階級以上の家庭の物語が扱われていたのに対して、トリーズは一般の貧しい少年などを主人公にして、階級に捕らわれない新しい枠組みの中で物語を書きました。彼は最初の頃に社会主義に非常に強く傾倒して、そういう物語を書いていた時期もあります。しかし、そこから離れたことによって、より自然に、階級の枠に捕らわれず、イデオロギーなしではっきり伝わるような設定で物語を書けるようになったため、さらに人気が高まったと考えられます。もっともっと翻訳されてもいい、今でも十分に楽しむことができる物語をたくさん著した作家でした。

ローマン・ブリテンからアーサー王へ

さて、ここでローマン・ブリテン３部作を書いたローズマリ・サトクリフ（Rosemary Sutcliff, 1920–1992）の作品を取り上げたいと思います。ジョフリー・トリーズ、ローズマリ・サトクリフはともにイングランド出身の作家です。しかし、立場的にキプリングなど帝国主義に基づく歴史物語の主流派と違うところがあるとすれば、トリーズは体制派ではない社会主義を強く信じていた点、サトクリフは幼少の頃、ポリオにかかって障害を持っており、そのために普通の学校教育を受けずに母親の独特な教育を受け、余計に古めかしい物語が大好きだったということがあります。それぞれ主流派というよりは少数派的な一面を持つ作家でした。つまりあまり体制的イデオロギーを

大きく持ち出すような作家ではなかったということです。

サトクリフはキプリングが大好きで影響を受けたと何回も折に触れて述べています。実は、先ほど『プークが丘の妖精パック』を登場させた理由は、明らかに彼女はこの作品が大好きで、その中のエピソードをそのままローマン・ブリテン3部作のほか、いろいろな作品の中で生かしているからです。影響を受けていることを隠そうとするような作家ではありませんでしたので、例えば『第九軍団のワシ』(*The Eagle of the Ninth*, 1954)という物語の設定自体が、『プークが丘の妖精パック』の中で出てくるローマ帝国人とケルト民族出身の部下の友情という話になぞらえた設定になっています。さらに、別のスコットランドの種族から奇襲をかけられるというエピソードも全く同じように『第九軍団のワシ』で描かれます。このように影響を受けてはいますが、キプリングの作品から50年以上が経っていますので、帝国主義思想がそのまま反映されているはずもなく、サトクリフの物語はとても似た筋立てなのに、結果的に全く違う視点から描かれています。

両作品を比べてはっきりとその立場の違いが分かるのは次の点です。『第九軍団のワシ』の設定は、『プークが丘の妖精パック』と全く同じ、ハドリアヌスの壁と呼ばれる辺境の地でローマ帝国がスコットランドのケルト氏族と戦った時代で―これも『プークが丘の妖精パック』に出てくる上官の名前を借りたようですが―アクイラという主人公が負傷し、最初奴隷にしていたケルト人エスカを自由民にして従者とし、父が不名誉な行方不明を遂げた謎を共に探るべく冒険の旅に出かけるという、サトクリフの作品の中では珍しく、非常にはっきりした冒険物語になっています。

彼女はこの作品から始まり、歴史性、つながりというものをはっきり見せる物語を続けて書いていきました。ローマン・ブリテン3部作と言われる、ローマ帝国下のイギリスを舞台にした物語が『第九軍団のワシ』、レジュメには載せていないですが『銀の枝』(*The Silver Branch*, 1957)、それから『ともしびをかかげて』(*The Lantern Bearers*, 1959)の3作品があります。そして、ここに載せている『落日の剣』(*Sword at Sunset*, 1963)は大人向けのアーサー王伝説の小説化になっており、ここまでを含めて4部作という感じで話がかなりつながっています。『ともしびをかかげて』と『落日の剣』は同じ登場人物が出てくる連続した物語になっていますが、『ともしびをかかげて』ははっきり児童文学として書かれたものであり、それに対して『落日の剣』のアーサー王物語は大人向けになっています。ローマン・ブリテン、すなわちローマ帝国に支配されていた時期のイギリスにアーサー王が勝利し、ローマ人が去った後の暗闇にともしびを掲げた王となった、けれども最終的に落日になってしまった、というのがこの二つのタイトルの表すところです。こういう流れを書くことで、キプリングとは既に立場が違っているわけですが、サトクリフはまた独自の歴史観というものをこの中で表そうとしたのです。特に第一次世界大戦、第二次世界大戦の大きな戦争を二つ終えた後に生まれた作品ですから、非常に深い戦争の傷、影が見られます。イギリスは戦勝国ですが、他の敗戦国の復興を手伝ったために、例えば食糧配給制がその後何年も続いたりしましたし、フランスなどに劣らず、復興に時間がかかりました。さらにソ連との冷戦が始まり、二つの大戦後の、先行きが読み解けなくなったときに、もう一度好きな歴史を読み直そうとしたのが、この4部作であり、彼女なりの歴史観の表れだと言えるのです。そこに最後に大人向きのアーサー王の物語をつなげた歴史を自分で書き表すことによって、彼女は「正統なるイギリス」を、キプリングとは違った形で示そうとしたわけです。

キプリングはノルマン人とかローマ人とか、征服した者の立場から物語を書いていました。ヘンティやミッチソンは征服された者の立場から物語を書いていますが、反対の結末で終わるということになりました。ナオミ・ミッチソンと同じように、サトクリフも、物語の中で登場人物たちが完全に征服された立場を乗り越えられたとは描いていません。両大戦中に作品を著したミッチソンほど直接的ではありませんが、サトクリフの作品の中にも敗北とか、大きな戦争の痛みとかいうものが大きく表れており、どうしても拭いきれない影

が残っています。それは『落日の剣』、すなわち「沈みゆく剣」とアーサー王物語を表現したことにもよく表れています。彼女は、アーサー王は戦争をした王ではあるけれども、現実に軍人として非常に優れた者だったと考えており、それを自分なりに解釈して歴史の中の人物として書いたのがこの小説です。しかし、結局は負けて死んでいき、戦争に勝っても空しさが残る物語となっています。またアーサー王の伝説としては当然のことですが、もともと彼は、母親がユーサー王という父親の魔法に騙されて生まれた不義の子であり、更に自分も不義の子モードレッドをもうけることになり、そのモードレッドが自分を殺す運命にあるという悲劇の物語なわけですね。だから子ども向けではないのですが。これをそのまま、イギリスの正統なる歴史の最後に位置付け、当時の非常に難しい状況、複雑な様相、そういう面を作品に反映しました。しかし、アーサー王や歴史的人物を扱っていたり、長い戦闘や年月の末に家族愛に目覚める物語から、暗いだけの物語ではない醍醐味を読み取れるところが、彼女の物語が現代でも評価される理由となっているのだと思われます。

最後に『太陽の戦士』(*Warrior Scarlet*, 1958) という物語を挙げてあるのは、一つは翻訳がある本だからということと、後もう一つの理由は次にお話しします。

その他の歴史物語

さて、その次の作家、ヘンリー・トリース (Henry Treece, 1911–1966) です。ヘンリー・トリースはそもそも大人向けの小説を書き、それから詩人としても有名な人で、むしろそちらの方が評価も高いかもしれません。子ども向けの物語もありますが、日本ではほとんど翻訳されていないですし、現代での生き残り度もサトクリフには遠く及ばないようです。

その中で『夜明けの人びと』(*The Dream-Time*, 1967) という歴史物語が翻訳されています。その作品とサトクリフの『太陽の戦士』はどちらも先史時代を舞台にしているのでレジュメに書いておきました。この『太陽の戦士』も記録された歴史のない紀元前の若者が成人になる儀式を描いたものなのですが、このヘンリー・トリースは『夜明けの人びと』で人類発祥の頃の人々を書いたということで、やはりイギリスというか自分たちのルーツを模索しているように思います。ヴァイキング 3 部作 (*Viking Trilogy*, 1955–1960) が彼の最も有名な歴史物語なのですが、これもかつてイギリスにやって来たヴァイキングたちが最終的にはアメリカに行くという形で、自分の生き方、在り方、生きる場所を求めて冒険するという筋立てとなっているのですが、サトクリフなどより、こちらのヴァイキング 3 部作の方がさらに暗いかもしれません。とにかく、こういう物語が非常に人気でした。サトクリフほどは作品が生き残っていないところが残念ですが、彼は人気のある歴史物語の作家でした。これはやはり戦後社会の在り様を見て、もう一度自分たちの血筋、自分たちの歴史観とアイデンティティを確かめてみようという姿勢の表われではなかったかと思われます。

もう一人、同じ頃に歴史物語を書いたシンシア・ハーネット (Cynthia Harnett, 1893–1981) を紹介しましょう。『ユニコーン印の荷物』(*The Load of Unicorn*, 1959)、それから『ウール・パック』(*The Wool-Pack*, 1951)、こちらも「羊毛の荷物」という意味ですが、有名な中世のできごとを背景にした歴史物語をたくさん著した作家でした。この人は子ども向けの物語作家であり、史実に基づきながらも、純粋に楽しめる歴史冒険物語の書き手として、ジョフリー・トリーズの系統に連なる作家であると言えると思います。

『ユニコーン印の荷物』という作品は、イギリスで初めて印刷業を始めた実在の印刷工ウィリアム・カクストンが、トーマス・マロリーの『アーサー王物語』を印刷して、それが非常に人気になって売れ、広まりますが、それを印刷するまでの間に当時のいろいろな商業状況がからみ、様々な陰謀が渦巻いて、印刷工の弟子となった主人公の少年が冒険に巻き込まれてしまうという内容です。イギリスの中では、これまでに述べた中でも最も有名な史実の一つ、あるいは文学史上の重要事の一つに挙げられていることを舞台としてうまく利用しながらも、史実の細かい事柄を気にせず楽しめる歴史冒険物語となっています。

もう一つの大きな特徴は、ハーネットはイラストレーターでして、印刷工の印刷の道具、タイピングの道具とか、そういうものを全て絵に描いて、本の中にイラストで残しているのです。そのために非常に分かりやすく、当時の状況がまざまざと思い浮かべられるような作品になっており、少々古めかしいところはありますが今でも楽しめる物語になっています。

他の時代を扱った物語など

時代を追って、スコット、キプリング、サトクリフなど大きな歴史の流れを見る作家たちと、それからスティーブンソン、トリーズ、ハーネットら冒険物語を見る作家たちという二つの流れを対比しながら紹介してきました。これに対して、最後は、その他の歴史物語として、評価の高い作品の中からいくつか選んで並べました。どうしてこのようになったかといいますと、私が見る限り、この後の時代に大きな歴史観というものを直接捉え直そうとしたものはあまり出てきていないような気がするからなのです。その中でペイトン（K. M. Peyton 本名 Kathleen Wendy Peyton，1929–）の『愛の旅だち：フランバーズ屋敷の人びと１』（*Flambards*，1967）に始まる一連の物語には、歴史観がよく表れているかもしれません。ただ、ちょっと近い歴史でして、20世紀初めの女性とその家族、それから馬、自動車、飛行機や戦争などを描いている物語です。

ペイトン自身はそんなに新しい作家ではなく、サトクリフとほぼ同じくらいの時代に作品を出している作家です。どちらかというと、このような近い歴史を読み直すという物語は続々と出てきているのですが、大きな歴史を物語として読み直そうという作品は少なくなります。そうした大きな流れとして、今は歴史を捉えられない時代なのではないか、そして今の歴史物語の在り方はそれを映し出しているのではないかと思われます。

第二次世界大戦の物語

レジュメに挙げた最後の三つの作品は、第二次世界大戦を描いた物語で、他にも多くありますが、「近い歴史」を書いた物語です。1973年に書かれたのが『帰ってきたキャリー』（*Carrie's War*）、『機関銃要塞の少年たち』（*The Machine Gunners*）は1975年です。これらの作品のように戦争から30年が経ったところで、戦争を体験した人たちが突然、自分たちの少年のころを回想したり、そういうものをモチーフとなったフィクションを書いたりし始めたのです。マゴリアン（Michelle Magorian，1947–）はボーデン（Nina Bawden，1925–2012）、ウェストール（Robert Atkinson Westall，1929–1993）よりもう少し後の作家で、また戦争ものを多く書いている点でも少し立場が違うかもしれませんが、そのように近い歴史を振り返るという形の歴史物語がかなり盛んに出版されている、というのが現在の状況です。

その他、リストに挙げた二つの作品について説明します。一つは、イギリス出身で、今はアメリカに住んでいる作家スーザン・クーパー（Susan Cooper，1935–）の『影の王』（*King of Shadows*，1999）で、シェークスピアが出てくる非常に面白い冒険物語になっています。ジャミラ・ガヴィン（Jamila Gavin，1941–）の『その歌声は天にあふれる』（*Coram Boy*，2000）というのは18世紀を舞台にし、実際する人物などを題材にした物語になっているのですが、私から解釈するとどちらかというと時代小説、その時代を背景に使ったロマンス小説のようなところがかなりあるように思います。非常に面白いのですが、歴史物語というよりは時代小説的な感じがします。

まとめ

今日、紹介したい作品はここまでなのですが、紹介資料リストを見ながらお話しした内容の流れをもう一度確かめていきます。複数の児童文学作品で同じ歴史的テーマを何回か繰り返して扱ったということを先ほど述べましたが、征服者と征服された者という二者の立場が、特にローマ帝国とノルマン・コンクエスト、この二つの時代をテーマに何度か扱われています。私が知る限りでは、最近ではあまり見かけませんが、この二つの時代を扱った物語というのは、やはり、作家の時代の歴史観や作家なりのもう一つの歴史観、更に言えば作家自らのアイデンティティ、価値観を表す

ツールとしての歴史観を表すものとして、今のところ、明らかにはっきりとした証拠が残っているわけではないのですが、先人たちの作品を意識して読み替えていった物語なのではないかというのが、私の結論です。

そしてそれは、そもそも19世紀ヴィクトリア朝で、ローマ帝国に大英帝国をなぞらえていた当時の歴史観を反映した視点から描いた歴史物語作家から始まったと思われます。そして、国家と自分たちの運命について考えさせられざるを得なかった時代の作品には、このローマ帝国とノルマン・コンクエストの時代が題材によく取り上げられていろいろな作家の立場で書かれ、それぞれの物語の中で自分の運命に翻弄される登場人物たちが描かれました。そしてそれが歴史物語としてその面白さを表すと同時に、作品の書かれた時代背景と彼らの作品、作家の在り方を最もよく表すツールとして、読み解くのに良い素材と言えるのではないかと思います。

本日のお話はここまでといたします。ありがとうございました。

（ほんま　ひろこ　青山学院大学非常勤講師）

「イギリスの歴史物語の流れ」紹介資料リスト

(本館) →国立国会図書館東京本館で所蔵
※→国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	プークが丘の妖精パック	キプリング 著 金原瑞人，三辺律子 訳	光文社 2007. 1	KS162-H162 (本館)
2	第九軍団のワシ	ローズマリ・サトクリフ 作 猪熊葉子 訳	岩波書店 2007. 4	Y7-N07-H83
3	ともしびをかかげて．上	ローズマリ・サトクリフ 作 猪熊葉子 訳	岩波書店 2008. 4	Y7-N08-J103
	ともしびをかかげて．下	ローズマリ・サトクリフ 作 猪熊葉子 訳	岩波書店 2008. 4	Y7-N08-J104
4	夜明けの人びと	ヘンリー・トリース 作 猪熊葉子 訳	岩波書店 1997. 12	Y7-M98-41
5	アイヴァンホー : 愛と冒険の騎士物語．上	サー・ウォルター・スコット 作 岡本浜江 訳 依光隆 絵	講談社 1997. 3	Y9-3462
	アイヴァンホー : 愛と冒険の騎士物語．下	サー・ウォルター・スコット 作 岡本浜江 訳 依光隆 絵	講談社 1997. 3	Y9-3462
6	エリザベス女王のお針子 : 裏切りの麗しきマント	ケイト・ペニントン 作 柳井薫 訳	徳間書店 2011. 8	Y9-N11-J284
7	さらわれたデービッド	R. L. スティーブンソン 作 坂井晴彦 訳 寺島竜一 画	福音館書店 1972	Y7-3053
8	この湖にボート禁止	ジェフリー・トリーズ 作 多賀京子 訳	福音館書店 2006. 6	Y7-N06-H143
9	落日の剣 : 真実のアーサー王の物語．上	ローズマリ・サトクリフ 著 山本史郎，山本泰子 訳	原書房 2002. 12	KS171-H31 ※
	落日の剣 : 真実のアーサー王の物語．下	ローズマリ・サトクリフ 著 山本史郎，山本泰子 訳	原書房 2002. 12	KS171-H29 ※
10	太陽の戦士	ローズマリ・サトクリフ 作 猪熊葉子 訳	岩波書店 2005. 6	Y7-N05-H112
11	愛の旅だち : フランバーズ屋敷の人びと 1	K. M. ペイトン 作 掛川恭子 訳	岩波書店 2009. 9	Y7-N09-J247
12	雲のはて : フランバーズ屋敷の人びと 2	K. M. ペイトン 作 掛川恭子 訳	岩波書店 2009. 10	Y7-N09-J272
13	めぐりくる夏 : フランバーズ屋敷の人びと 3	K. M. ペイトン 作 掛川恭子 訳	岩波書店 2009. 11	Y7-N10-J6

14	愛ふたたび : フランバーズ屋敷の人びと 4. 上	K. M. ペイトン 作 掛川恭子 訳	岩波書店 2009. 12	Y7-N10-J37
	愛ふたたび : フランバーズ屋敷の人びと 5. 下	K. M. ペイトン 作 掛川恭子 訳	岩波書店 2009. 12	Y7-N10-J38
15	その歌声は天にあふれる	ジャミラ・ガヴィン 作 野の水生 訳	徳間書店 2005. 12	Y9-N06-H31
16	影の王	スーザン・クーパー 作 井辻朱美 訳 小西英子 画	偕成社 2002. 3	Y9-N02-71
17	帰ってきたキャリー	ニーナ・ボーデン 作 松本亨子 訳	評論社 1977. 11	Y7-7707
18	"機関銃要塞"の少年たち	ロバート・ウェストール 作 越智道雄 訳	評論社 1980. 12	Y7-8557
19	おやすみなさいトムさん	ミシェル・マゴリアン 作 中村妙子 訳	評論社 1991. 8	Y8-8526
20	Beric the Briton : a story of the Roman invasion	G. A. Henty	Blackie and Son [189-?]	VZ1-526
21	The conquered	Naomi Mitchison	J. Cape [1923]	所蔵なし
22	Cue for treason	Geoffrey Trease	Goodchild 1986	Y8-B1759
23	Viking's dawn	Henry Treece	Criterion books [1956]	所蔵なし
24	The road to Miklagard	Henry Treece	Criterion Books [1957]	所蔵なし
25	Viking's sunset	Henry Treece	Criterion Books [1961]	所蔵なし
26	The load of unicorn	Cynthia Harnett	Methuen [1959]	所蔵なし

レジュメ

児童文学が描くイギリスの風土と子ども

内藤　貴子

はじめに：風土とは
・中国後漢書、（古）風土記
・climate 原義：傾斜（赤道から両極への傾き具合によって気温・天候に変化が生じることから）
　①ある土地の年間を通じての気候
　②（ある地域・社会・時代などの）風土、環境、情勢、知的・精神的風土、風潮、気風
・ゲニウス・ロキ genius loci
・風土＝人間の自己了解の仕方。住居、料理、文芸、美術、宗教、風習等＝一つの民族の永い間の風土的自己了解の表現。(和辻哲郎『風土：人間学的考察』岩波書店　1979　pp. 16–17)
・主観的な感覚と制度化された社会的な要因によって人為的に「構築され」、そして同時に「自然に」構成された物理的な環境（ローレンス・ビュエル『環境批評の未来――環境危機と文学的想像力』伊藤詔子・横田由理・吉田美津・三浦笙子・塩田弘訳　音羽書房鶴見書店　2007　p. 95）
・子どもが風土と築く精神的・身体的・歴史的関係
・風土に結び付いている妖精たち

Ⅰ．児童文学に描かれたイギリスの風土
作品例：(　) 内は原著刊行年
①　エリザベス・グージ『まぼろしの白馬』(1946)
②　ロザリー・K・フライ『フィオナの海』(1959)
③　スーザン・クーパー『海と島のマイリ』(1986)
④　ディック・キングスミス『おふろのなかからモンスター』(1992) [映画『ウォーター・ホース』2007　米]
⑤　エリナー・ファージョン『ヒナギク野のマーティン・ピピン』(1937)
⑥　ローズマリ・サトクリフ『ケルトの白馬』(1977)、『闇の女王にささげる歌』(1978)
⑦　ジェラルディン・マコーリアン『ジャッコ・グリーンの伝説』(1999)
⑧　アラン・ガーナー『ふくろう模様の皿』(1967)、*Red Shift* (1973)
⑨　ビアトリクス・ポター『リスのナトキンのおはなし』(ピーターラビットの絵本10) (1903)、『のねずみチュウチュウおくさんのおはなし』(ピーターラビットの絵本8) (1910) ほか
⑩　ケネス・グレアム『たのしい川べ』(1908)
⑪　A・A・ミルン『クマのプーさん』(1926)
⑫　フィリパ・ピアス『ハヤ号セイ川をゆく』(1955)
⑬　デイヴィッド・アーモンド『闇の底のシルキー』(1999)
⑭　ジョーン・ロビンソン『思い出のマーニー』(1967)
⑮　ティム・ボウラー『川の少年』(1997)
⑯　ポール・ギャリコ、アンジェラ・バレット絵『スノーグース』(2008)
⑰　リチャード・アダムス『ウォーターシップダウンのうさぎたち』(1972)
⑱　フィリパ・ピアス『川べのちいさなモグラ紳士』(2004)

⑲　メルヴィン・バージェス『オオカミは歌う』(1990)
⑳　アリソン・アトリー『西風のくれた鍵』(1944)、『氷の花たば』(1948)、『農場にくらして』(1931)、『時の旅人』(1939)、〈グレイラビット〉絵本（1929–1973)、『チムラビットのぼうけん』(1941)

II．ルーシー・ボストンの児童文学作品に見られる環境意識
Lucy Maria Boston（1892–1990)『グリーン・ノウの子どもたち』(グリーン・ノウ物語；1)（1954)、『グリーン・ノウの川』(グリーン・ノウ物語；3)（1959)、『グリーン・ノウのお客さま』(グリーン・ノウ物語；4)（1961)、『グリーン・ノウの石』(グリーン・ノウ物語；6)（1976），『海のたまご』(1967)
・マナーハウス The Manor（Hemingford Grey Huntingdon Cambridgeshire）
[http://www. greenknowe. co. uk]

III．デイヴィッド・アーモンド『ヘヴンアイズ』
David Almond（1951– ）*Heaven Eyes*, London: Hodder Children's Books, 2000.
・タイン川 the Tyne
・“Bobby Shaftoe's gone to sea,/ With silver buckles at his knee;/ He'll come home and marry me,/Bonny Bobby Shaftoe.” (John Bell, Rhymes of Northern Bards, Newcastle: The Press of M. Angus and Son, 1812. p. 283)
・ブラック・ミドゥン Black Middens：“a hell of a river”, “a feature of people's minds”
・Ouseburn Valley：seven stories National Centre for Children's Books
[http://www.sevenstories.org.uk/]

IV．シヴォーン・ダウド『ボグ・チャイルド』
Siobhan Dowd（1960–2007）*Bog Child*, Oxford: David Fickling, 2008.
・アルスター地方 Ulster
・ボグ bog、泥炭 peat ／ turf、湿地遺体 bog bodies ／ bog people
epigraph：Peter Vilhelm Glob, *The Bog People: Iron-Age Man Preserved*, Cornell UP, 1969
・北アイルランド紛争 the Troubles、メイズ刑務所（ロングケッシュ Long Kesh、H ブロック)、[映画 Hunger]
・Coghlan, Valerie, and Keith O'Sullivan, ed: *Irish Children's Literature and Culture: New Perspectives on Contemporary Writing*, NY: Routledge, 2011
・シェイマス・ヒーニー Seamus Heaney（1939–2013)『さ迷えるスウィーニー』薬師川虹一他訳、国文社、2012

おわりに
・「震災文学」、「原発文学」、「エコサイド文学」
マイケル・モーパーゴ『発電所のねむるまち』(2006)、ロバート・スウィンデルズ『弟を地に埋めて』(1984)
グードルン・パウゼヴァング『みえない雲』(ドイツ1987)、セバスチャン・プフルークバイル『セバスチャンおじさんから子どもたちへ』(日本2013)、長谷川集平『およぐひと』(日本2013)、川上弘美『神様 2011』(日本2011)

児童文学が描く
イギリスの風土と子ども

内藤　貴子

はじめに：風土とは

今日は「児童文学が描くイギリスの風土と子ども」というテーマでお話しします。イギリスの児童文学作品を中心に、風土に深く根差している物語を（時間内に扱えるのはほんの一部の作品になりますが）概観した上で、子どもの本に描かれた登場人物たちが、風土とどのような身体的関係、精神的関係、ひいては歴史文化的関係を築いているのだろうか、という点について考えていきます。

はじめに、「風土」とは何か、ということを確認しておきます。日本語の「風土」という語は、中国の後漢書を経由して（古）風土記へと入ってきた語で、土地によって異なる気候や地勢などの在り様という意味です。英語では climate という語が一番近いでしょうか。climate は、ある土地の、年間を通じての気候のことです。語源であるギリシア語の原義は「傾き、傾斜」で、赤道から両極へと至る緯度の傾き具合によって地域ごとの気温や天候に変化が生じることから、地域に特有の風土という意味になりました。

「風土」と聞けば、「ゲニウス・ロキ」(genius loci) という語を思い起こされるかもしれません。これはラテン語で、もとは古代ローマの信仰の対象としての「地霊」、土地の守護精霊のことでした。円錐形の山羊の角や、お神酒を神に捧げるための器、あるいは時に蛇の姿で描かれる図像として知られてきましたが、「地霊」の意味から派生して、「土地柄」や「風土」を意味するようになりました。例えば『東京の地霊』（鈴木博之 著　筑摩書房 1990）では「地霊」にルビをふって「ゲニウス・ロキ」と読ませていますし、他にも風土の歩き方、土地柄を探索するといった意味で、この語を使っている地誌的書物が散見されます。

和辻哲郎の『風土：人間学的考察』（岩波書店 1979）は、風土を巡る議論の発端となったことでも知られていますが、ここでは文学を風土から読み解くに当たって援用できる要点のみ見ておきます。和辻によれば、風土は「人間の自己了解の仕方」であり、住居、料理、文芸、美術、宗教、風習などは、そこに住む人間の「風土的な自己了解の表現」です。また、ローレンス・ビュエル（Lawrence Buell）の『環境批評の未来―環境危機と文学的想像力』（伊藤詔子、横田由理、吉田美津、三浦笙子、塩田弘 訳　音羽書房・鶴見書店　2007）では、風土、あるいは人間を取り巻いている環境とは、「主観的な感覚と制度化された社会的な要因によって人為的に『構築され』、そして同時に『自然に』構成された物理的な環境」である、と定義されています。

「風土」を辞書で引くと、特定の地域の気候や地形など物理的な環境、という第一義に加えて、知的風土、精神的風土、気風、風潮、情勢、という第二義もあります。「風土」と言うとき、この外的な意味と内的な意味、つまり物理的な環境と、必ずしも目には見えない内的な、あるいは歴史文化的な環境の両側面をはらんでいるのだ、という理解を共有した上で今日の話を進めていきたいと思います。

―風土に結び付いている妖精たち

風土と児童文学作品との関係について見ていく前に、時間の関係上紹介できるのはほんの一部になりますが、分かりやすい例として、イギリス各地の風土そのものの表象としての妖精、あるいは風土と人間との長い期間に及ぶやり取りの中で形象化されてきた、風土と人間との関係性の表象と

しての妖精についてお話しします。妖精の性質や習性については、主に井村君江、キャサリン・ブリッグズ、キャロル・ローズ各氏の妖精学の知見、起源についてはキャロル・シルバーがまとめた過去の妖精学研究の成果からの紹介が中心となりますが、ここでは妖精を風土の表象としてより深く考察する視点を掘り下げて、児童文学作品に描かれた人物分析へと、思考の道筋をつなげていきたいと思います。

イギリス全土に伝わる「緑の歯のジェニー」(Jenny Greenteeth) は、洗濯女の姿で水辺に現れ、人を水に引き込む精霊として知られています。スコットランド北部のハイランド地方からヘブリディーズ諸島では、スコットランド・ゲール語で洗濯女 (washer woman) を意味するベン・ニーア (Bean Nighe)、イングランド北東部、特にティーズ川流域ではペグ・パウラー (Peg Powler) など名前が変わったりしますが、風貌はおおよそ、緑色の肌と髪をもち、足には赤い水かきがあり、鋭く尖った歯をしています。戦いの勃発や病気などを予言し、死ぬ運命にある人の衣服を洗っているところを本人が目撃するという、怖い妖精です。

しかし、この妖精は、水辺の事故が起きないようにという注意喚起のために、人間が作り出した側面を持っていますので、怖い必要もあります。肌や長い髪が緑色なのは、水面と陸地との境目を見えにくくさせる浮草や、落水後に四肢などに絡まり水へ引き込む水草の緑色が、妖精の身体的特徴として体現化されたとも考えられます。また一方で、水に恵みを求め、水の災厄を除けるために、古代社会で人身御供として水辺に捧げられた犠牲者だという説もあります。いずれにせよ、人が生きる上での水との関わりや、水辺の危険そのものが、妖精の姿として可視化されているのです。

「黒妖犬」(Black dog) の言い伝えもイギリス全土に分布していますが、ヨークシャーやコーンウォールに広がる岩原野＝ムーア (moor) や、スコットランドとイングランドの国境地帯などに出没する妖犬として有名です。〈ハリー・ポッター〉シリーズで、シリウス・ブラックが姿を変えてハリーを見守ったイメージでも出てきました。起源は、伝説上あるいは歴史上の英雄たちが狩猟団となって黒い猟犬を従え、空中や地上を疾走していくという、ゲルマン伝承にある狩猟団の渡り (Wild Hunt) にあります。この伝承が成立した背景に気象現象を見る視点から、ハロウィンの頃から十二夜[1]の頃までに吹き荒れる雪嵐や、風の強い冬の夜に戸外を駆け抜けていく疾風が体現化されたものとしても考えられてきました。黒妖犬の目が炎のように光るのは、文化的には地獄の火とも関連がありますが、自然表象としては暴風雨に伴う雷のイメージでもあります。

気象や気候そのものの表象は、フィンランドの〈ムーミントロール〉シリーズを思い起こせば、より分かりやすいかもしれません。トーベ・ヤンソンが描いた「モラン」(Moran) という妖婆も、冨原真弓氏が指摘しているように、やはり北欧の暗く凍てつくような冬の表象です。灰色の大きな塊であるモランが近寄ると、土は凍土となり、ランプの灯やあたたかいものは皆消えてしまいます。

ムーアによく出没する「ピクシー」(pixie) は、イングランド南西部で妖精一般のことを指します。ピクシーレッド (pixie led) の led は導かれるという意味で、ピクシーにぐるぐると導かれているうちにムーアの只中で迷ってしまう、といった惑わしを人間に与えます。現実的には方向感覚を失いムーアで遭難するという現象として説明できそうなピクシーレッドの原因を、ここでもやはりフェアリーテイル成立の背景にある現実の風土に探れば、低木しか生えない荒涼とした岩原が広がり目印のつけにくい風景であること、時折予測できないところに足を取られる沼地が潜んでいること、レイライン[2]が横断していたり、ストーンサークルやドルメン、メンヒルなどと呼ばれる奇岩遺跡が集まっていたり、地下にも鉱物資源を多く擁しているため、磁場に影響のある場所の多いことなど、この地域の物理的特性が見えてきます。

また地質学的特徴としては、イングランドの肥沃な黒土に対して、この地域には酸化鉄により赤く見える赤土や鉄鉱石の土壌が広がっています。

1　12月25日のクリスマスから12日目にあたる１月６日の顕現日の夜のこと。
2　特定の祭日などに太陽が通る道。古代遺跡や聖地、教会などが一直線上に並ぶとされ、地磁気も通常より強い。

崖から海へと赤土が崖崩れを起こした時には海水が赤く染まるなど、異世界的な様相を人々の想像力に与えてきた原因を、地質に探ることもできるのです。また温暖な気候により、他の地域では育たない亜熱帯植物も見られるため、異界性は高まります。ウェストカントリーと呼ばれるイングランド南西部が、他の地域と差異化され「ピクシーランド」(妖精の国) とも呼ばれてきたのには、妖精伝説の背後にある自然風土が分かち難く関係しているのです。

歴史文化的風土もまた、看過できません。今は全て廃坑になってしまいましたが、地下資源が豊富だったコーンウォール州やデボン州では、紀元前2300年頃の青銅器時代から錫を中心に鉄、銅、鉛、銀、金などの採鉱と交易のため、多様な民族が渡来していました。「ノッカー」(Knocker) という鉱山妖精は、後に述べるように苛酷な労働で早逝した少年鉱夫たちの表象とも考えられますが、この妖精には、海岸で海藻を採る習性もあることから、9世紀後半までにコーンウォール州とデボン州に、採鉱と貿易のため住みついたユダヤ人だと解釈することもできます。

ノッカーのノック (knock) はコンコンと叩くノックのことで、良い鉱脈をノックで教えてくれるのですが、気に食わない鉱夫に対しては、コーニッシュ・パースティというお弁当、一人で食べようとすると食べきれないぐらいの大きさで、ジャガイモや肉、玉ねぎなどを煮て、小麦粉を練った皮で包み焼きしたものをこっそり食べてしまうとか、ランプの灯を吹き消してしまうなどの悪戯をします。鉱夫の仲間内で間違えないようにパースティの皮にイニシャルを焼き込む習慣があったことからも、他人のお弁当を間違えて、あるいは故意に食べてしまうことも少なからずあったと推測できますし、坑道に一酸化炭素が溜まればランプが立ち消えることも当然あったでしょう。人為的・化学的に説明のつく現象が、ここでも妖精の習性として物語化されているのです。

コーニッシュ・パースティは、現地で食べたときに教えてもらったのですが、とてもうまくできていて、餃子のように中身が出ないよう、縁の部分をねじって留めてあります。この部分は食べずに、ノッカーのためにといって肩越しに投げておくと、ノッカーに気に入られて良い鉱脈を教えてもらえるのだそうです。これも現実的に考えてみると、手に付いた鉱毒や、土壌中の砒石に含まれる有毒なヒ素を口にしないための保健衛生的な知恵が、妖精の習性へと結晶し、伝承されてきたものです。

人間の歴史文化的な活動が形づくった風土から生まれた妖精には、ノッカーのほかにも「ブラウニー」(Brownie) がいます。〈ハリー・ポッター〉シリーズで、マルフォイ家に隷従する屋敷しもべ妖精 (house-elf) ドビーの原形となった妖精です。特定の家にある期間住みついて、家人の知らない間に麦打ちや家畜の世話を終わらせてくれたり、衣服の繕いをしてくれたりする家つき妖精で、南イングランドでは牛乳を一杯、スコットランドなど寒い地方ではポリッジ (porridge) と呼ばれる温かいおかゆを一杯、報酬として与えることで家人との良好な関係が続くとされています。しかし、ひとたび衣服を贈られると、侮辱されたと怒って、あるいは満足して、家を出て行ってしまいます。〈ハリー・ポッター〉でも、ルシウス・マルフォイから靴下を受け取ったドビーが隷従から解放される箇所に、この伝承が現れていました。

ブラウニーは麦打ちもしますが、またここで人間の歴史文化的な活動が形づくった風土に思いを馳せれば、収穫時期や飢饉のときにブリテン島まで出稼ぎに来たアイルランドからの季節労働者のイメージもまた、家事手伝い妖精の正体の一面だと考えられます。名前の由来となった茶色の容貌も、日焼けした農耕従事者の肌や、被征服民族や奴隷の褐色や黒色の肌と解釈することもできます。

そこには異民族の興亡も見えてきます。イギリスでは、ケルトは古代ローマやサクソンに、サクソンはノルマンにというように、侵略によって領土を奪われた先住民が、支配民族に隷従することで生きる道を得てきた歴史があります。妖精という架空キャラクター造形のプロセスは当然複雑で、一概には言いきれないものの、例えば北欧から侵入した長身で荒々しいヴァイキングを荒ぶる巨人と見たり、ゲルマン民族と比較すれば低身長

で、髪や肌の色も異なる先住民をリトル・ピープル（妖精の別称）と見たりするのと類似した想像力の働きが、家付き妖精にも表れていると言えます。

自然的風土、歴史文化的風土に密着した妖精は他にもいろいろいるのですが、概して北方や、南方でもムーアや沼地など、人間の住環境としては厳しい地域の妖精と、温暖な南イングランドや、北方でも肥沃な土壌に恵まれた土地の妖精には違いがあります。例えば前者は人間に敵対的で、姿も習性も恐ろしい妖精が、後者は人間に対して友好的な妖精が現れてきます。同じ種族でも気のいいブラウニーやホブが、陰鬱な地方や、家人との関係性が良好でないなどの素因があると、性悪で家人に害を及ぼすボーグルやホブゴブリンに成り下がることがあるのも、自然風土や歴史文化的風土と深く関連しているからなのです。

Ⅰ．児童文学に描かれたイギリスの風土

妖精の姿や習性の背景に自然風土、歴史文化的風土を読み取る視点を得たところで、「児童文学に描かれたイギリスの風土」に進みますが、はじめに、児童文学に描かれた妖精について例を見ていきます。

『まぼろしの白馬』

エリザベス・グージ（Elizabeth Goudge, 1900–1984）の『まぼろしの白馬』（*The Little White Horse*, 1946）は、コーンウォール半島デボン州南岸に伝わる白い海馬伝説に着想を得て、グージがファンタジーを膨らませて書いた作品です。白い海馬伝説とは、満月の夜になると、満潮時に沖から白い波が盛り上がって浜へと押し寄せ、浜で真っ白な波が砕け散った途端に、波しぶきの中から真っ白な海馬が生まれ、丘へ駆け上っていくという、幻想的で大変美しい伝説です。ここでも伝説の背景にある自然現象に思いを馳せれば、白い海馬は、高潮が陸地まで上がってくることの詩的表現でもあり、ここにもまた、人間の物語る性質とでも言うべきものが見えてきます。映画化作品『ムーンプリンセス』（2008　英）でも、水平線から押し寄せる大波と、その波間を海馬が疾走するイメージが印象的に可視化されています。

『フィオナの海』

ロザリー・K・フライ（Rosalie Kingsmill Fry, 1911– ）の『フィオナの海』（*Child of the Western Isles*, 1959）は、スコットランドの北西部、ヘブリディーズ諸島のセルキー伝説（アザラシ女房伝説）を基にした作品です。セルキーというのも妖精の一つで、アザラシの精霊です。アザラシ女房伝説、と言いましたが、伝承には男のセルキーもいれば女のセルキーもおり、フライの小説にも両方出てくるのですが、女のセルキーが人間の男の妻として陸に上がります。同名の映画化作品では、アイルランド沿岸に物語の舞台が移されていますが、アザラシが多く棲む沿岸部であること、風土を詩的に捉え物語化してきたケルトの想像力が優勢な地域であることは、原作と一緒です。

辺境の海岸という地理からすれば、暴風潮で難破した船からの漂着者が、沿岸の小村に身を寄せることもあったでしょうし、侵略から逃れてきた別部族あるいは異民族が、生きるには最小限ながらも海の恵みに隣接した、人里離れた場所に新たな定住先を求めることがあった、と想像することも難くありません。また小さな共同体では、自発的に外界に配偶者を求めることには、近親婚姻を避けるためなどの必然もあったでしょう。セルキーとの間に生まれた子どもや子孫だけ髪の色が違ったり、異なる性質を備えていたりすることも、セルキーを異民族として捉える視点から読み解くことができます。また、フェアリーテイルの異類婚姻譚が、異民族同士の結婚という現実的な物語であるのと同時に、人間と自然の結婚という象徴的な物語でもあるように、この作品における人間とアザラシの異類婚姻も、海という、人間とは異なる自然そのものと、人間の歴史文化との深い繋がりの表象として読み解くこともできるのです。

『海と島のマイリ』

『海と島のマイリ』（*The Selkie Girl*, 1986）も、アザラシ女房伝説を基にした作品で、スーザン・クーパー（Susan Mary Cooper, 1935– ）が再話した昔話絵本です。日本にも三保の松原などに羽衣

伝説がありますが、夫が羽衣を隠してしまい天女を妻にするのと同じように、アザラシが脱いだ皮を男が隠してしまい、海に帰れなくなったアザラシを妻にします。結末も羽衣伝説と似ており、子どもが大きくなって父親が時々皮を手入れしていることを母親に教えると、アザラシ女房はそれを着て海に帰ってしまいます。

人魚の基となるイメージがジュゴンやマナティにあると言われるのと同様に、岩礁に横たわるアザラシのしなやかな姿や好奇心に満ちたつぶらな瞳に、船乗りや漁師たちは半人半魚の面影を見てきたのでしょうか。伝説が発祥した地域や伝播のルートなどを突き止めることは容易ではなく、詳細な裏付けは伝承文学研究の知見に求めなければなりませんが、ブリテン島沿岸に生息しているハイイロアザラシとゼニガタアザラシの生息域地図を重ねてみると、少なくとも『フィオナの海』と『海と島のマイリ』の物語の舞台と重なります。

『おふろのなかからモンスター』

「ネッシー」（Nessie）はスコットランド北西部のネス湖に住む UMA（未確認動物）として日本でも知られていますが、もとはネス川やモラー湖などハイランド地方の水辺に伝わるケルトの伝承で、ケルピー（Kelpie）と呼ばれてきた水棲馬「ウォーター・ホース」(Water Horse)です。ディック・キングスミス（Dick King-Smith, 1922–2011）の『おふろのなかからモンスター』（*The Water Horse*, 1992）では、大嵐が去った後に海辺で拾った「人魚のおまもり」と呼ばれるツノザメの卵に似たものから、小さな恐竜のような生き物が生まれ、浴槽で飼い始めますが、金魚池に移しても手狭になり、牛用トラックでネス湖へ運んで放してやるまでを、家族のやりとりを中心にユーモラスに描いた物語です。1930年３月26日早朝の大嵐に始まるこの話は、後にネッシーと呼ばれるようになる巨大生物のようなものを目撃したという、1933年４月14日の新聞記事で終わっています。

全長37km、最深部が230m と、湖の中に人が並んで立てば全世界人口を収容できるほどの広さと深さを持っていると言われるネス湖は、流れ込んでくる泥炭のために目に見える水深は３m 程度と透明度も低く、ハイランド地方特有の霧や豪雨に水面が煙る時や、夕暮れに藍鋼色に輝く神秘的な湖の様相を見れば、水に住む幻獣を人間が幻視してきたのも頷けます。

ネッシーの目撃数は1930年代にネス湖沿いに国道が通ってから増えたと言われていますが、古くはケルトの伝承です。旅人が大きな湖のほとりで途方に暮れていると水棲馬が顔を出し、背に乗せて行ってやるという風なので疲れ切った旅人が近付くと、水底へと引きずり込まれて食われてしまい、内蔵だけが水面へと浮かび上がってくるのです。ネス湖をはじめネス川周辺の湖の神秘や、水の危険を語ったものであり、北海から遡上してきた大魚などを着想のもとにした、法螺話の側面もあります。

初めて書物に記録されたのは７世紀に書かれたケルト装飾の祈祷写本で、『聖コロンバの生涯』（*Cathach of St. Columba*）です。紀元565年頃、ネス川の川縁で聖コロンバが宣教を行っていたときに、住民を襲ったリバー・モンスターに対し聖コロンバが十字を切って祈りを唱えると、モンスターは退散し、その後住民は皆キリスト教に改宗したという内容です。この頃にはケルトの伝承というよりも、キリスト教の布教を強化する宗教的な物語になっていて、水棲馬もその土地に根差した実体的な様相を失い、退治されるドラゴンと同じく単一的役割へと矮小化されてしまっているのも、興味深い点です。

映画化作品『ウォーター・ホース』（2007　米）では、舞台は第二次世界大戦中に設定されています。平均水深200m のネス湖には、敵国の潜水艦が潜伏していてもおかしくないわけで、ナチスドイツ軍の潜水艦が北海からネス川を遡上してきて、ネス湖沿岸から一気にイギリスに上陸し、地上戦へと発展するのではないかという誤報や戦時下の心理的恐怖が背景に据えられています。原作では弟役のアンガス少年が主人公で、湖岸で拾った水棲馬の卵を作業小屋で孵し、クルーソーと名付けて友情を育みます。

アンガスは高地地方の神秘的な水辺に生まれ育ったのに、というよりむしろ、だからこそ水に畏怖を抱いているのですが、ネス湖に還されたク

ルーソーの背に乗り、水と親しみ、水への恐怖を克服します。また、父が戦場から帰還する日を心待ちにしていたアンガスは、クルーソーとの真の別れを経験した後、父が戦死したことを受け容れます。この二つは原作にはないモチーフですが、この世ならぬものと交流することを通じて、そしてその造形の背後にある環境や風土と精神的・身体的関係を結ぶことによって、子どもが自身の問題を整理し解決していくプロセスが、よく表れています。

『ヒナギク野のマーティン・ピピン』

エリナー・ファージョン（Eleanor Farjeon, 1881–1965）の『ヒナギク野のマーティン・ピピン』（*Martin Pippin in the Daisy Field*, 1937）は、南イングランドのサセックス丘陵の風土に分かち難く根付いた短編集です。きれい好きで真っ白な女性たちと、大きくなることが夢だった煙突掃除の小さな男の子が、どのように「セブンシスターズ」（Seven Sisters）という白亜の崖と、「ウィルミントンの背高男」（Long Man of Wilmington）という大きなヒルフィギュア（hill figure）になったかという起源譚を、創作フェアリーテイルの様式で語ったものです。ヒルフィギュアとは、地面を覆っている芝土を剥がして、白亜層を溝状に削り、その白線で描いた巨大な地上絵のことで、チョークフィギュアとも言います。イングランドに分布しており、巨人や馬の形を描いたものが多く見られます。絵本にもなった『エルシー・ピドック、ゆめでなわとびをする』（*Elsie Piddock Skips in Her Sleep*, 1997）は縄跳び歌をモチーフにしたファンタジーの小品ですが、創作起源譚でもあり、サセックス丘陵ケーバーン山の麓に生まれ育った人物が、自らのアイデンティティを土地がもつアイデンティティに同化させ、伝説的人物となっていく過程を描いた点でユニークです。

この物語の冒頭は、学校が終わると村の娘たちが横丁に集まってきて、伝承の縄跳び唄を歌いながらいろいろな跳び方で縄跳びをする、楽しい場面です。主人公の少女エルシーは、３歳になると縄をねだるのですが、「もう少し大きくなったらね。」と買ってもらえず、父親のズボン吊りを利用して跳ぶ練習を始めます。生まれながらの縄跳び上手と呼ばれたエルシーは、５歳には村のどの子どもも跳び負かすようになり、６歳になると州のどの村にも名が知られるようになります。７歳になるまでには妖精たちにもその名が知れ渡り、アンディ・スパンディという妖精の縄跳び師匠が、エルシーが眠っている間に使いをよこしてケーバーン山まで連れ出し、妖精たちをも跳び負かす才能を見て取ると、人間には決して跳べないような、すばらしい妖精の跳び方を伝授してくれるのです。やがてエルシーがおばあさんになって、縄跳び名人のエルシー・ピドックという名は、実在する人物の名ではなく、フェアリーテイルの登場人物の名なのだと村の人々が認識し始め、月夜の晩にケーバーン山の山頂で縄跳びをするという風習も形骸化し始めた頃、物語は新たな展開を見せます。緑豊かなケーバーン山に開発業者が入るのです。

村中の人たちは、「皆が楽しみにしている、月夜の晩に縄跳びをする場所がなくなってしまうから」と、土地開発に反対して座り込みなど抗議をするものの、施工主は予定通り工事に着手するといって聞きません。そこで村の皆が次々と縄跳びをして、最後の一人が跳び終わるまでは工事を始めないこと、という取引をして、数回も跳べないような幼い子どもから順に跳んでいきます。足腰の弱りきった年寄まで跳ぶものの、力尽きて膝から崩折れて泣き崩れ、皆の希望が失われかけたとき、まだ終わりではないと登場するのが、年を取ってまた小さくなったエルシー・ピドックです。そしてエルシーはなんと、永遠に跳び続けるのです。妖精から習った、人間の力では跳べないような縄跳び技術は、早跳び、おそ跳び、おさめ跳びなど目が覚めるような斬新な跳び方ばかりですが、なかでも雲の上までずっと跳んでいってまた降りてくる「高跳び」などには、嘘と本当の狭間でこそ真実を語り得るような、伝承文学らしさがあります。「今でも跳んでいるんだったら、なぜここにエルシー・ピドックがいないの？」と子どもが聞いたとき、「今は雲の上にいるんじゃない？」と大人が答えられるような、エルシー・ピドック伝説を強化する裏付けとしても、茶目っ気たっぷりに

語られています。

2006年には、本作品の劇がイギリス各地で巡演されましたが、舞台はケーバーン山を模った緑色のトランポリンで、物語の神髄を象徴的に表わしていました。トランポリンでの跳躍を通じて、エルシーや妖精の縄跳び伝説を役者の身体に再び立体化させるのも、演劇大国であるイギリスならではの物語の楽しみ方です。

『ケルトの白馬』

ファージョンが題材にしたウィルミントンの背高男も、有名なヒルフィギュアの一つなのですが、イングランド中部から南部には、青銅器時代末から石器時代初期、つまり今から約3000年前に作られたとされている、ヒルフィギュアが点在しています。

ローズマリ・サトクリフ（Rosemary Sutcliff, 1920–1992）の『ケルトの白馬』（*Sun Horse, Moon Horse*, 1977）は、バークシャーのアフィントン丘陵に描かれた全長111mの馬のヒルフィギュアをモチーフにしています。東イングランドに領土を持っていたケルトのイケニ族の族長の息子が、ガリアから侵入してきたアトレバテース族の侵略から民を救うために、自らを犠牲にして囚われの身となり、丘に馬の絵を描かされた後、処刑されます。白馬のヒルフィギュアが誰によってどうして描かれたのか、サトクリフが歴史文化遺産の光景の中に人間の物語を想像して書いた作品で、ケルト族の興亡を背景に3000年前の若者の生き方を描いています。

同じくサトクリフの『闇の女王にささげる歌』（*Song for a Dark Queen*, 1978）は、『ケルトの白馬』から時代が下り、紀元後、古代ローマが侵略してきた際に、周辺の部族をまとめて反旗を翻したイケニ族の女王ブーディカの人生を、女王付きの吟遊詩人の視点から描いた歴史小説です。Red Fox版の表紙には、娘二人を戦車に乗せて蜂起する女王の姿が描かれていますが、この姿はロンドンのテムズ川に架かるウェストミンスター橋のたもとにある銅像でも有名で、ロンドンオリンピックの際もマラソンランナーたちがこの像の横を走りました。ローマ侵入に対抗するため、ケルト諸部族の長たちがブーディカの旗の下、東イングランドの湿地帯に集う場面で、沼から立ちのぼる鬼火のゆらめく様が、沼地の自然現象でありながら、ケルト世界終焉前夜という歴史的光景の象徴表現でもあり、印象的です。

『ケルトの白馬』と『闇の女王にささげる歌』いずれの作品も、イケニ族の領土が東イングランドの海岸線沿いにあり、大陸のケルト他部族や古代ローマ帝国の侵入が容易であったという地理的条件から生まれた、イケニ族に固有の物語です。

『ジャッコ・グリーンの伝説』

ジェラルディン・マコーリアン（本来の発音ではマコックラン）（Geraldine McCaughrean, 1951–）の『ジャッコ・グリーンの伝説』（*The Stones Are Hatching*, 1999）はウェールズの南部、スウォンジーにあるゴウアーという村の海岸に大きく突き出した、ワームズヘッドと呼ばれる岩岬をモチーフにしています。ごつごつと伸びる岩岬の形に、古代人は竜の姿を見たのでしょう。古くはヴァイキングの侵略者たちが、ドラゴンと言う意味の「ワーム」（wurm）と名付けたところから、ワームズヘッド、つまりドラゴンの頭という地名が今に残っています。切り立った岩肌の内部には、大小の岩窟がいくつも連なっており、強風が吹き抜けるとまるで竜がうなっているような音を響かせるという地形的特徴があります。

洞窟で宝を守っている竜のイメージは、スカンジナビア半島南部の伝承をもとに、10世紀イギリスの古英語写本に残された叙事詩『ベオウルフ』（*Beowulf*）にも見て取れる古いモチーフです。宝が盗まれようとするときに竜が目を覚ます類話も多いですが、この物語では、竜が悠久の眠りから覚め、「生まれ来る者たち」が地上に現れます。ブリテン島、アイルランド島のほかヨーロッパの様々な妖精や、コーンウォールの祭りに登場する「オビー・オース」（Obby Oss）など、いろいろなキャラクターたちが次から次へと出てきて、民俗学的に興味深い面も本作品の特徴ですが、圧巻はやはり主人公のジャッコが、岩岬と見えた竜の身体を登り、腹の中へと入っていく際の、生々しいほどの大地の感覚です。ワームズヘッドは岩岬で

ありながら竜として息づき、人間の小ささをはるかに凌駕して、大地は生きているのだ、という感覚を読者に掴ませます。

『ふくろう模様の皿』

アラン・ガーナー（Alan Garner，1934– ）の『ふくろう模様の皿』（*The Owl Service*，1967）は、13世紀前半から15世紀初頭までにウェールズ語で書かれた、２冊の中世写本から採られた伝説集『マビノギ』（*The Mabinogi*）あるいは『マビノギオン』（*The Mabinogion*）に収められた物語「マソヌウイの息子マース」を基にしたファンタジーです。『マビノギ』は、英訳版としては、19世紀のイギリスの文学者シャーロット・ゲスト（Charlotte Elizabeth Guest，1812–1895）によって一般化しました。

元の伝説では、スェウ、グロヌウという二人の男性と、魔術師が花から作ったプロダイウェズという女性が三角関係になり破滅するのですが、『ふくろう模様の皿』は、この伝説の物語が、現実の人々の身に世代を超えて及び、悲劇が繰り返される様を描きつつも、伝説とは違う、児童文学ならではの展開を、最後の場面で見せています。プロダイウェズに憑依された女の子が、自分をフクロウと捉えるのか、花と捉えるのか、選択するという結末です。私はかぎ爪でひっかいて人を傷つけるようなフクロウではないと言い、数えきれないほどの花弁が空から降ってくる、大変幻想的なシーンで終わります。

またこの伝説は、ウェールズなどにたくさんある、「メン・アン・トール」（Mên-an-Tol）と呼ばれる不思議な奇岩の遺跡の起源譚にもなっています。スェウとグロヌウは槍で殺し合いをするのですが、スェウは、妻と共に自分を殺したグロヌウを、彼が隠れていた岩もろとも貫いて復讐を遂げるのです。穴の空いた奇石に、なぜどのように穴が空いたのかという、いまだ解明されていない謎の背景に物語を読み取る作業、歴史文化的風土が作りだしたランドスケープを、物語を介して内面化しようとする人間の精神活動の一例です。

同じくガーナーの『赤方偏移』（*Red Shift,* 1973）は、物語の一部が神宮輝夫氏訳で雑誌掲載されましたが、書籍の形での全訳はまだ出ていません。この作品の舞台はスタッフォード州にある丘で、「モウ・コップ」（Mow Cop）という13世紀頃の城の廃墟があり、一方で石器時代からの歴史を伝える斧なども出土している古い土地です。この物語でも、土地に根付いた伝説が、世代を超えて常に人間に及ぼす影響について描いていますが、『ふくろう模様の皿』が児童文学であり、子どもたちが自身の生き方を切り開く力によって、伝説の呪縛を解くハッピーエンドであるのに対して、『赤方偏移』はヤングアダルト文学であり、伝説の呪縛から逃れられない苦々しい結末となっています。

『リスのナトキンのおはなし』

ビアトリクス・ポター（Beatrix Potter，1866–1943）の『リスのナトキンのおはなし』（ピーターラビットの絵本10）（*The Tale of Squirrel Nutkin*，1903）も伝説を下敷きにしています。湖水地方北西部にあるダーウェント湖周辺では、湖岸の森に住むリスたちが小枝で筏を組み、しっぽを広げて帆にして、セント・ハーバート島という中島に食物を採りに行くと言い伝えられてきました。ダーウェント湖を訪ねた折に、岸部に広がる森と、リス多数生息の看板が立っていたのを見つけたときは嬉しくなったものです。

『のねずみチュウチュウおくさんのおはなし』（ピーターラビットの絵本８）（*The Tale of Mrs. Tittlemouse*，1910）など小動物の生活に即してはいますが、湖水地方の人々が、自然と調和しながら作り上げ継承してきた歴史文化的風土が、ポターの絵と文に見事に写し取られています。極めて具体的に描くことで普遍を捉える例の一つで、ポターの細密画が捉えた小動物たちの光景には、他所では失われていったイギリスの田舎、田園ならではの暮らしが記録されています。

『たのしい川べ』、『クマのプーさん』

ケネス・グレアム（Kenneth Grahame，1859–1932）の『たのしい川べ』（*The Wind in the Willows*，1908）やA・A・ミルン（Alan Alexander Milne，1882–1956）の『クマのプーさん』（*Winnie-*

the-Pooh, 1926）は、現実の場所をモデルにしながらも、理想化された場所、あるいは象徴的な場所に昇華されている典型例です。

例えば、『たのしい川べ』では、グレアムが子ども時代に親しんだテムズ河上流の風景を原型としながらも、田園の美しさや静けさ、あるいはその中に人間が見てきた自然の崇高さを凝縮したような象徴的空間を、モグラとネズミが夢のような心地で体験するくだりがあります。

『クマのプーさん』の「魔法の森」は、アッシュダウン・フォレストという、ロンドンの南東約56kmにあるハートフィールド村に実在する森がモデルです。ミルンも小学生の頃に遠足で訪れ、のちに妻や息子のクリストファーと共に散策した森で、「プー棒投げ橋」や「ルーの砂地」なども実在していますが、やはりこの魔法の森も象徴的な場所になっています。何を象徴している場所かというと、6歳以前の幼年の世界です。例えば「百ちょ森」（100 aker wood）は原文では、本来acreと綴るところをakerと綴り間違いをすることで言語的に未熟な幼児の世界を象徴しており、石井桃子訳では、「ちょう（町）」という面積を表す言葉が、「ちょ」と言い換えられています。また百ちょ森には、「魔法の場所」（enchanted place）と呼ばれる松林がありますが、この場所の魔法的な性質は、松に一本一本、糸で印を付けて数えてもちゃんと数えることができないという点にあります。やはりこれも幼年ならではの、微笑ましい未熟さを象徴しているわけです。綴り間違いや聞き間違い、言い間違いという言語的な未熟、数え間違いなど経験や知識の面、あるいは身体的、精神的な面でも、その未熟さが特徴的な6歳以前の幼年世界が、百ちょ森に象徴されているのです。

続編の最終章でクリストファー・ロビンが「魔法の森」を去ることは、学齢に達して学校に行くようになり、何もしないでいられた幼年時代を後にすることの比喩でもありますが、同時にミルンは、大人になったクリストファーがいつここに戻ってきても、そこにはプーと小さな男の子が遊んでいるでしょう、と最後に書いています。「魔法の森」は、大人がそうしようと思えばいつでも帰還することのできる、自らの内に生き延びた「子ども性」そのものの表象でもあるのです。

『ハヤ号セイ川をゆく』

フィリパ・ピアス（Philippa Pearce, 1920–2006）の『ハヤ号セイ川をゆく』（*Minnow on the Say*, 1955）のセイ川は、ケンブリッジを流れているケム川がモデルで、ピアスが幼い頃に兄弟たちとボート遊びをした川の情景が反映されています。この物語では、セイ川のほとりにコドリング家の人々が住んでおり、アダムという少年が川下りを通じて自らの家系の秘密を探り、家族の歴史の中で自分の居場所を掴んでいきます。

セイ川のほとりに住むコドリング家の人々は、川の性質をいくらか持っているようだ、と語られます。セイ川は激しい洪水になるときもありますが、普段の流れはいつも静かで穏やかです。一方、コドリング家のスミス氏の欲望の流れは、ことに出会うまではセイ川のように穏やかに流れていますが、それからすさまじい渦と激流になって逆巻いた、というように、川の性質と、川べりに住むコドリング家の家系の人々の性質とが、重ねて語られています。川の探索を通じて、家系の在り様、精神的風土あるいは知的風土の在り様が探られていく辺りが、この物語を川という自然の要素に着目して読むことで見えてくる面白さです。

『闇の底のシルキー』

北東イングランドのニューキャッスル周辺には炭鉱がたくさんありましたが、最後の坑道が1956年に閉鎖しました。自身の先祖も北イングランド、特にニューキャッスルの炭鉱に携わってきた、1951年生まれのデイヴィッド・アーモンド（David Almond, 1951– ）は、『闇の底のシルキー』（*Kit's Wilderness*, 1999）で、土地の人々（local people）の精神的風土を主人公キットの想像力に重ねて探っています。

煙突掃除夫と同様に、身体が小さい子どもは狭い坑道で働くのに有利と考えられ、炭鉱でも酷使されました。彼らは十分な食べものも与えられず、日光の当らない場所で体を不自由に縮めたまま重労働に従事したために、身体的発育が阻害されたことは広く知られています。少年鉱夫（boy

miner）が、この物語ではシルキーという炭鉱妖精として形象化され、キットの前に現れます。キットは廃坑道の暗闇の底で横たわって、かつて坑道内で命を落とした幼い炭鉱夫の想いを追体験する「死のゲーム」に参加したり、祖父と共に古い墓地を訪ね、自分や友人と同姓同名の先祖たちの名が刻まれた石碑を見て、代々炭鉱と深く関わってきた家系に思いを馳せたりしながら、自らペンを執り土地の物語を綴ることによって、先祖が生きてきた土地を、自らのものとして真に理解していきます。

『思い出のマーニー』

ジョーン・ロビンソン（Joan G. Robinson, 1910–1988）の『思い出のマーニー』（*When Marnie Was There*, 1967）は、東イングランドのノーフォークブローズと呼ばれる湖沼地方を舞台にしています。ブローズ（broads）というのは、川が広がって生じた沼あるいは湖で、水が満ちているときにはなみなみとしていますが、引き潮になると、湾曲した水路は細く浅くなり、ついにはぬかるんだ泥の小路と化します。水路をたどっていった主人公のアンナは、水の満ちる線の境目に突然現れた不思議な女の子マーニーとの交流を通じて、また、水路から舟を着けられる「しめっ地やしき」の親しげな面持ちに勇気付けられて、自分と先祖とのつながり、自分と土地とのつながりを探っていきます。それまではいつも人の輪の「外側」にいるとしか感じられず、無表情の仮面を被っていたアンナが、「内側」にいると感じ、声を立てて笑えるようになるまでには、ノーフォークブローズという「周縁」的な土地や、その土地にかつて生きた「外側」にいる人と、身体的・精神的・歴史的に深く交わることが必要だったのです。

『川の少年』

同じように、水辺の想像力を通じて先祖と精神的に交流する話に、ティム・ボウラー（Tim Bowler, 1953– ）の『川の少年』（*River Boy*, 1997）があります。ボウラーは、リー・オン・シーというテムズ河口の村に生まれ、川が海へと注ぐのを見て育ちました。現在はデボン州在住で、ムーアの中の川べりをよく散策したり、プリマス周辺の河口もよく訪れたりすると自ら語っています。物語に描かれた、川が流れる森林地、川が注ぐ河口や海は、どこの川や海と特定できない抽象化された場所なのですが、この作品の中で川の源流や、川が海へと注ぐ河口が果たしている重要なイメージは、ボウラーが川を見て掴んだイメージであり、人間の人生になぞらえた比喩として表現されています。

主人公の少女ジェスは、様々な版の装画が表しているように、川そのものの表象でもあるかのような川の少年との交流を通じて、祖父の少年時代の思い出に初めて接します。少女が、死にゆく祖父の死を受け入れることができたのは、少年時代の祖父でもある川の少年とともに、祖父が少年時代に親しんだ川の源流から河口まで泳ぎ下ることによって、つまり祖父が果たせなかった子どもの頃の夢を代わりに実現することによってでした。ジェスは、川と身体的、精神的な関係性を結んでいくことで、死にゆく祖父との関係性を改めて深く結び直すのです。

『スノーグース』

『スノーグース』（*The Snow Goose*, 2008）は、そもそもはアメリカの作家、ポール・ギャリコ（Paul Gallico, 1897–1976）の短編ですが、2008年にアンジェラ・バレット（Angela Barrett, 1955– ）という、東イングランドに広がる大湿地帯、グレートマーシュがあるエセックス生まれの画家の手によって、風土をよく表したとても美しい絵本に生まれ変わりました。グレートマーシュは渡り鳥の生息地でもあり、傷ついた渡りの水鳥を想起させる主人公の人物造形や、ギャリコの詩的文章だけでも大変に愛されてきた短編小説ですが、バレットの手による絵本になってこそ、グレートマーシュを訪れたことのない読者にも、物語の背景として交換不可能な場所のイメージを堪能できるようになりました。表紙に描かれた大湿地は、鋼色がかったアイスブルーで色づけされており、グレートマーシュの静謐さがよく表れています。

ドーバー海峡に面した土地柄も、物語になくてはならない肝の部分になっています。フランスの

ダンケルクまで海を隔てて50km程度と近い土地柄から、ダンケルクの戦いにも深く関わった歴史があり、この戦いによる悲劇が大湿地帯の荒涼とした風景に重ねて語られています。ダンケルクの戦いは、第二次世界大戦中の逸話としてマイケル・モーパーゴ（Michael Morpurgo，1943–）の『シャングリラをあとにして』（*Escape from Shangri-La*，1998）でも物語の柱になっています。ナチスドイツ軍に追い詰められ背水の陣となったイギリス軍を、ダンケルクの浅瀬から沖合で待つ母艦まで運ぶために、東南イングランドの一般市民がラジオの呼びかけに応えて、手持ちの小舟でドーバー海峡を渡り、命がけで多くの帰還兵を救い出した逸話です。『スノーグース』の主人公はこの航行中に命を落としてしまい、彼が整えたグレートマーシュの住まいもまた、荒涼とした風景に飲み込まれてしまうのですが、歴史のうねりの中で人がひたむきに生き、人間の営みを大いなる自然が包み込んでいく様を、まさに「鳥瞰」する渡り鳥の視点へ移ったところで物語は閉じられます。

『ウォーターシップダウンのうさぎたち』

リチャード・アダムス（Richard Adams，1920–）の『ウォーターシップダウンのうさぎたち』（*Watership Down*，1972）は、開発業者の手によって住み慣れた故郷を追われ、安住の地を求めて移住していくウサギたちの話です。正確には、バークシャー州のサンドルフォードから、ハンプシャー州のウォーターシップダウンまで強制移住の旅を強いられるのですが、ファージョンの『ヒナギク野のマーティン・ピピン』の舞台であるサセックス丘陵と同じ辺りが物語の背景になっています。先に見たように、ファージョンも1937年の時点で既に、丘陵の開発問題に触れていました。美しい丘陵地帯の自然を背景に、人間による環境破壊を鋭く告発している点では同じですが、1972年刊行の本作品に至っては、土地を守護しているエルシー・ピドックのような伝説的人物や妖精たちの姿はどこにもなく、ウサギたちはただ難民となって土地を去るほかない、という時代性を痛感させられます。田園の郊外化と、人間の生活の豊かさや精神活動の質の変化との関係については、後に述べるルーシー・ボストンの作品でも語られています。

『川べのちいさなモグラ紳士』

『川べのちいさなモグラ紳士』（*The Little Gentleman*，2004）は、1702年、時の王ウィリアム３世がハンプトンコート宮殿で乗馬中、馬がモグラの穴に足を踏み入れて落馬し、51歳で死去した実話に着想を得た物語です。当時、ウィリアム３世に敵対していたスコットランドのスチュアート王家支持派であるジャコバイトたちの間で、この穴を掘ったモグラを称賛する歌が大変流行しましたが、この歌に歌われたモグラが主人公になっています。

南イングランド、ハンプトンコート宮殿の庭生まれのモグラは、王の死の立役者として、ジャコバイトたちによってスコットランド北端のカローデンまで連れて行かれます。そこで魔法をかけられ、人間の言葉を会得し、人間の歴史や思惑に翻弄されるのですが、生まれた土地へ戻ろうと南下を続け、やっと南イングランドの故郷に辿りついたとき、人間の言葉を捨てて、ただのモグラになりたい、と言って自然の中に回帰していきます。

人間の主人公の女の子は、はじめ人間の言葉を介して、モグラの経験を聞いていたのですが、モグラの魔法によって、人間の言葉を失い、視力も取り去られ、まるでモグラそのものの身体感覚を得た状態で、真っ暗な土の中の世界を経験します。人間に属する特性を取り去り、モグラの身体感覚を通じて地中の歌を聞いたことによって、モグラの本当の気持ちが理解できた女の子は、モグラと友達でい続けたいという人間中心的な思惑をやっと手放すことができ、モグラの本当の友人である称号を得ます。

擬人化された動物たちは長い間、比喩として人間の姿や生活を語ってきましたが、この作品でピアスは、動物ファンタジーの新たな可能性を示しました。この物語は、ジャコバイトのカローデンの古戦場やハンプトンコート宮殿といった、人間の歴史文化的な場所と分かち難く結び付いており、動物にも一度人間の言語能力を与えていますが、動物に人間の歴史文化的文脈と言語を捨てさ

せ、自然そのものへと回帰させています。この作品には、次に述べる『オオカミは歌う』と時期を同じくして、ディープ・エコロジー[3]以降の人間と環境との関係性を探ろうとする、ごく現代的な視点が見て取れます。

『オオカミは歌う』

たくさんの児童文学作家が、それぞれの環境意識を児童文学作品に書いてきたのですが、人間がその特性を捨てて、自然環境の中に回帰していくというモチーフは、1990年代後半から2000年代にかけて現われてきたように思います。メルヴィン・バージェス（Melvin Burgess，1954– ）の『オオカミは歌う』（*The Cry of the Wolf*，1990）は、スコットランドの北西部ハイランド地方を舞台にしています。イギリスには、「最後のオオカミ伝説」（the last wolf legend）があります。イギリス最後の生き残りのオオカミを、ハンターや王侯貴族が仕留めるという、「ラストウルフもの」とでも呼べる一連の伝説群です。この『オオカミは歌う』という作品は、ラストウルフものの最も現代的な書き換えバージョンです。

実際には諸説ありますが、この作品では、イギリスにおける野生のオオカミはおおよそ500年前に絶滅したという設定で、インドライオンやシロサイといった希少動物の密猟に飽き足りないハンターが、最後のオオカミたちを執拗に追い詰めていきます。金灰色のイングランドオオカミ72頭の狩猟記念物（trophy）が並ぶ部屋でハンターが満足気に笑うといった、戦慄するような場面がある一方で、仲間を思いやったり、虐殺から逃走するためにプライドを捨てて行動したりするオオカミたちに共感しながら、知恵の限りを尽くしてひたむきに生きようとする、命そのものの誇り高さを、読者は感動を持って目の当たりにします。

『川べのちいさなモグラ紳士』と同様、新しい視点は、オオカミを追っていたハンターが、物語の後半で逆に追われるようになり、オオカミとハンターの「狩る」と「狩られる」が逆転するくだり、オオカミに敗北したハンターが、海の藻屑となって自然へと回帰していくくだりで現れています。オオカミに敗北したハンターが、海の藻屑となって自然へと回帰していくのです。自然を支配する人間の勝利を謳い上げてきた、従来のラストウルフものの定型を脱構築している本作品の新しさは、ハンターの猟犬の感情が、自らに課せられた仕事と、オオカミという同族への愛情とのはざまで揺れ動き、最終的にはハンターを裏切る点にも見ることができます。

『農場に暮らして』

アリソン・アトリー（Alison Uttley，1884–1976）の『西風のくれた鍵』（*The Spice Woman's Basket and Other Tales*，1944）や『氷の花たば』（*John Barleycorn*，1948）では、大麦を人格化したジョン・バーリーコーンや、霜をつくる冬の寒さを人格化したジャック・フロストなどイギリス民間伝承の精霊が創作妖精物語の形式で語られ、人間と自然との関わりが立体的に捉え直されています。

自伝的小説『農場に暮らして』（*The Country Child*，1931）では、アトリーが生まれ育ったダービシャーのクロムフォードにある、キャッスルトップ農場とその周辺の森の濃密な「場所の感覚」、田園の暮らしを生きる感覚や、都市や郊外では感じ得ない森への畏怖が、アトリーの子ども時代の視点から微細に再現されています。

同じダービシャーを舞台にしたアトリーのタイムファンタジーに『時の旅人』（*A Traveller in Time*，1939）があります。主人公ペネロピーが滞在するサッカーズ農場も実在するマナーファーム（manor farm[4]）ですが、その近くに、メアリー・スチュワートがエリザベス１世によって19年間幽閉されたウイングフィールド城の廃墟があります。物語では、幽閉されていた城から、処刑が近づくメアリーを救出するために、アンソニー・バビントンが秘密のトンネルを掘るのですが、そのトンネルは農園の裏手に今も残っていて、実際に女王救出に使われたとも、当時、英国国教会から弾圧

3　ノルウェー人の哲学者アルネ・ネスによって1973年に提唱された概念。あくまで人間の利権を念頭に自然保全を構想する「シャロー・エコロジー」に対して、生態系を成す全生物が平等な生存権を持ち、共生関係にあるべきと再構想された、自然中心主義の環境思想。

4　中世封建時代に、荘園領主が保有していた農園。

されていたカトリックの隠れ家だったとも言われています。イングランドとスコットランドの対立、カトリック弾圧といった歴史によって、秘密のトンネルやカトリック教会の廃墟などの歴史文化的ランドスケープが形作られた往時のドラマが、タイムファンタジーという文学的仕掛けによって、立体的に語り直されています。

Ⅱ．ルーシー・ボストンの児童文学作品に見られる環境意識

ルーシー・ボストン（Lucy Maria Boston, 1892–1990）による〈グリーン・ノウ物語〉シリーズでは、中世の荘園領主の館であるマナーハウス（manor house）が物語の中心に据えられています。１冊目の『グリーン・ノウの子どもたち』（*The Children of Green Knowe*, 1954）では、何百年も前にこの館に住んでいた子どもたちと、20世紀の少年トーリーが出会う話で、館の古さを媒介に、時の越境あるいは共有が起こるタイムファンタジーとして知られています。

館があるのは、ケンブリッジ州ヘミングフォードグレイで、ウーズ川の氾濫がある水害の多い低地です。冠水した牧草地ウォーターメドウもこの土地の顔として、初めてやってきたトーリーを迎えます。ルーシーの筆力のみならず、息子ピーター・ボストンが表紙や挿絵に寄せた美しい版画も、東イングランドの水深い風土を印象的に可視化しています。

グリーン・ノウ館の庭の一角には聖クリストファー像が置かれていて、嵐の夜にこの像が歩き出し、トーリーを助けてくれる神秘的な場面があります。聖クリストファーはキリスト教の聖人で、幼少期のイエス・キリストを背負って川を渡ったとき、イエスが後に背負うことになる全人類の罪の重みを、身をもって実感したとされる人物です。この逸話から、旅人や水辺の守護者として信仰され、マナーハウスが建てられた頃の中世には、イギリス中に他のどの聖人よりも多く石像やイコンが置かれていました。グリーン・ノウ館の聖クリストファー像の足元にも、波立つ模様が彫られていますし、「古い浅瀬のそばには必ず像があるもの」と作品中で語られます。川辺に建てられた聖クリストファー像は、東イングランドの人々が中世以降重ねてきた、水との密接な関係性の表象でもあるのです。

同じ南東イングランドの風土では、『クマのプーさん』の「コブタが、ぜんぜん、水にかこまれるお話」でも、大水が出る地方で生きる者たちの小ささが、ユーモラスに語られていることも思い起こされます。

子どもが風土と築く身体的・精神的・歴史的関係という観点から考えるとき、ボストンの作品でとりわけ注目すべきは、東イングランドの風土の中で、子どもたちが自らのエコロジカル・アイデンティティを探っていく過程が描かれている点です。エコロジカル・アイデンティティとは、自らを取り巻く自然環境を探索し、やりとりを重ねることによって、把握され構築される自己概念のことです。子どもたちの既得の自己概念は、自然環境との関わりを通じて、一度解体されたり、再構築されたりもします。

『グリーン・ノウの川』（*The River at Green Knowe*, 1959）では、外国からの孤児と難民２人を含む３人の子どもたちが、馴染みのない土地で、その自然環境や、その土地に蓄積されてきた歴史の古層を探索することを通じて、自己概念を再構築していく過程が描かれています。初めは、３人が夏の間滞在する屋根裏部屋の窓から「まるで地図を見るように」遠く非実体的な姿で見えた川が、ボート遊びを通じて子どもたちが土地に親しんでいくにつれて瞳の中に映り込むようになり、子どもたちを川の一部として受け入れるようになることも象徴的です。ボストンは『海のたまご』（*The Sea Egg*, 1967）でも、２人の少年が、コーンウォールの「地の果て」（Land's End）と名付けられたブリテン島最西端の海岸で、トリトンという海と人とを繋ぐものの表象としても読める妖精と、共にひと夏を過ごすことで海に親しんでいく過程を追っています。先ほど『ウォーター・ホース』で、ネス湖の怪獣と交流することで水と親しんでいく少年の姿を紹介しましたが、『ウォーター・ホース』の原作の冒頭や、映画の冒頭と最後の部分で卵を拾う場面は、『海のたまご』と響き合っています。

『グリーン・ノウのお客さま』（*A Stranger at*

Green Knowe, 1961）では、ゴリラのハンノーが生息できる原生自然は、1960年代の、あるいは現代のイングランドにはもはやないということが突きつけられ、読者も主人公の少年ピンと同じ痛みを共有します。中国人の孤児のピンは、アフリカのジャングルで親を奪われ、イギリスへの強制移住を強いられたハンノーに自らを重ねて再考することにより、自己概念を再構築します。

『グリーン・ノウの石』（*The Stones of Green Knowe*, 1976）の舞台は、グリーン・ノウ館が建設途中の12世紀です。領主の次男である12歳の少年ロジャーが、「お石さま」と呼ばれる、一対の石造りの玉座を草むらで見つけます。お石さまは、キリスト教以前のケルトやゲルマン社会に起源があり、不思議な力を持っていたため、ロジャーが「王様石」に願うと未来へ、「王妃石」に願うと過去へと時間を超えられるようになります。ロジャーは未来に行き、17世紀、19世紀、20世紀の自分の子孫たちとやり取りしたり、過去に行き、自分の先祖のサクソン人がこの地に侵略してきた光景を見たりすることで、歴史の流れの中に自己を位置付け直していくのです。

840年を隔てた20世紀からトーリーが12世紀にやってくる場面では、深い森を絶滅前の狼や熊が闊歩し、手付かずのまま広がっていたウィルダネスの豊饒さが、読者の五感に迫ってきます。一方、ロジャーが12世紀から20世紀を訪ねる場面では、芳しい香りに満ちていた森はなくなっており、かび臭いよどんだ空気が立ちこめています。ノウサギやマルハナバチ、蝶々も見当たらず、ノボロギクの他は野花も全く生えていない、「のっぺらぼう」の舗装路を歩きながら、ロジャーはわびしい気持ちになります。彼は、17世紀の領地を訪れた際にも、12世紀には鬱蒼としていた森が地平線まで後退しているのを見て驚くのですが、古代ローマ時代に始まり、造船のため大航海時代にピークを迎えたイングランドの森林伐採や、娯楽としての狩猟や熊いじめの流行、それに伴う猛獣から昆虫に至るまでの幅広い生態系の消失など、環境破壊の過程が、12世紀の少年の視点から浮き彫りにされます。

ここでも、タイムファンタジーによって、複数の時代における環境の対比が可視化されています。注目すべきは、本来であれば12世紀のロジャーが持てるはずもない20世紀の環境意識を、時を超えることによって、時代による環境意識の限界を超越し、過去へ持ち帰る点です。ロジャーは、自分を成り立たせている場所と自分との関係を改めて捉え直す視点を得て、エコロジカル・アイデンティティを再構築するのです。

Ⅲ．デイヴィッド・アーモンド『ヘヴンアイズ』

デイヴィッド・アーモンドは、ウィリアム・ブレイク（William Blake, 1757–1827）の詩世界を引用した、幻想的な死と再生の物語『肩胛骨は翼のなごり』（*Skellig*, 1998）で一躍脚光を浴びた後、故郷である北東イングランドのニューカッスル・アポン・タインの土地や歴史に深く根差した物語を、ファンタジーの手法を用いて語り始めました。先に触れた２作目『闇の底のシルキー』でも、炭鉱町であった作者自身の故郷の精神風土が、主人公の想像力を通じて探られています。３作目の『ヘヴンアイズ』（*Heaven Eyes*, 2000）では、タイン川流域に暮らす人々の内的世界を形成してきた風土を深く経験し、理解することを通じて、子どもたちが荒廃した児童養護施設の環境と自己を肯定的に捉え直していきます。

一人親の母を病気で亡くした少女エリン・ローを中心に、親との死別や離別、親からの虐待など、それぞれ複雑な家庭環境を背景に持つ「傷を負った子どもたち」（damaged children）が暮らす施設は、初め理想郷とは正反対の暗黒郷＝ディストピア（dystopia）として示されます。施設の運営責任者モーリーンは、何かあるとすぐに氷のように冷たくなる目をしています。愛と憎しみが交じり合った目、子どもたちを取り返しのつかない傷を負った子どもとしてしか見られない目です。しかも子どもたちと視線が合わない。モーリーンの視線は、施設がディストピアであることを表す象徴の一つです。鉄柵に囲まれ、コンクリートで固められた施設の庭もまた、ディストピアとしての環境を象徴する記号の一つに他なりません。

エリンが母の愛情に満たされて暮らした家を回想して語るときの庭は、施設の庭とは対照的にエ

デンの園、楽園のイメージを喚起します。小さいけれども、明るい色の花が咲いていて、グズベリーの実が膨らみかけ、庭のすぐそばを流れる川ではカモメが鳴き声を上げており、母の歌声に満ちている。喜びに満ちた明るい庭です。アーモンドは、土地や精神の荒廃を表すのに、荒れ庭や廃屋といった素材を象徴的に使うことを好む作家です。本作品では、パラダイスとしての庭を提示してから、その喪失の痛みを読者にも突き付けます。

愛情のない閉塞した環境に耐えきれずに、エリンがコンクリートの庭を飛び出し川へ向かう場面があります。

> あたしは川まで走っていって、昔のことをあれこれ思いだしながら、海へ流れていく水を眺めた。しあわせで胸が熱くなった。…（略）…ママとふたりでセント・ガブルエル・エステイトの小さな家に住んでた、あの頃の暮らしが目にみえる。

エリンは、母と暮らし幸せだった過去、今や断絶された過去との関係性を、川のイメージを介して、もう一度掴み直しています。

エリンの親友のジャニュアリー・カーという少年は、川のイメージを通じて、未来への希望をつないでいきます。

> 「筏？」あたしはいった。
> 「そう、筏。川をずっと下っていって、こんな生活とはおさらばさ」…（略）…そのときにはもう、足元を水が流れてさらわれそうな気がしてた。
> 「想像してみろよ」ジャニュアリーがささやく。「おれたち二人だけで筏に乗って、川を下るんだ。自由になるんだ、エリン、自由に」
> 想像してみた。…（略）…指のあいだを川の水が流れていく。…（略）…
> それから何週間も、足元を水が流れていくような感じは消えることがなかった。
> …（略）…あたしはきっと行く、そんな予感がしてた。

エリンとジャニュアリーは、断絶された過去や、先の見えない未来と、今ここにいる自己を結び付けるような連続性や有時間性を、川の流れに感じ取っているのです。

エリンはまた、母親が一人親であることを川のイメージに託しています。

> パパは外国のトロール船に乗ってたろくでなしで、嵐を避けるために川をのぼってきた。ママは海の男の冒険談にひっかかり、口先だけの愛の科白にのぼせあがって、桟橋のそばの安宿でパパと一夜をともにした。翌朝目覚めたとき、パパはもういなかった。窓から外をみると、パパの乗った船が悠々と海に戻っていくのがみえたそうだ。

タイン川は、上げ潮によって河口からかなりの力で遡上し、また河口へと水が流れ下って、海へと流れ出ていきます。この潮流の自然現象が利用されて、古来侵略の経路にもなり、また一方では貿易や輸送に利用されたりと、良くも悪くも外界との接触が容易な開かれた場所、あるいは内陸に容易にアプローチできる経路としての特性を有してきました。エリンは、この川の流れの自然性、そして歴史文化的な特性に即して、父母の出会いと別れを自然なこととして捉えています。

エリンは母の死をも、川の流れの自然性になぞらえて受け容れようとします。病気が進行して、母の命が死へと突き進んでいくとき、「もうどうしようもないの」と母親が言ったときのことを、エリンは「水に流されていくような感じだったのかもしれない。」と回想しています。ジャニュアリーにとって、施設の外を流れる川はディストピアからの脱出路であり、海が自由な未来を象徴する一方、母の死を経験し喪失感に苦しむエリンにとって、川の水の流れにさらわれて行きつく先は死と隣接している、というイメージが繰り返し語られます。

エリンたちはついに、筏を組んで施設を脱走します。筏に乗った子どもたちは、初めはいろいろな方向に流されていきますが、渦を越え、視界を遮るほどの濃い霧をくぐり抜け、下流の暗闇の中

へとまっしぐらに流されて行きます。周りの闇や霧が濃くなればなるほど月が輝きを増し、そうかと思えば真っ暗で何も見えなくなり、突然、筏と、泡立つ水と、霧だけになります。タイン川には、自然の川の現象として、実際にこのような濃霧が発生するのですが、ここで語られている外的な風景は、子どもたちがまたぎ越える精神的な境界域として比喩的に語られた風景でもあります。そして、ブラック・ミドゥン（Black Middens）という、具象的でもありながら象徴化された場所に座礁します。

ブラック・ミドゥンとは、イングランド北東部のタイン川河口で、干潮時に顔を出す、真っ黒な岩と砂が堆積した一帯のことです。岩と砂から成る暗礁が潮によって運ばれ、移動することから、古来海岸沿いでの難破が頻発し、「川の地獄」（a hell of a river）と呼ばれ恐れられてきました。実際は、ブラック・ミドゥンは河口に位置しますが、物語では中流域に置き換えられ、本来堆積物は岩と砂から成りますが、物語では沈泥に変えられています。位置の置き換えは、子どもたちが物の見方を変革させる重要な経験をする場所は日常のすぐ傍らにあるという、従来の冒険小説の定式とは異なるアーモンドらしい距離感を実現させていますし、堆積物の置き換えは、母胎という闇の中のぬくもりや包括性を、ブラック・ミドゥンのイメージに付加しています。そして子どもたちはなぜ、ブラック・ミドゥンに座礁しなくてはならなかったのか。それは地獄性というブラック・ミドゥン特有の性質こそ、子どもたちが一度は降り立って向き合わなければならない、自らの心の内面の在り様の表象でもあるからです。

ここで子どもたちは、どんなに荒廃した世界の中でも天国性を見出すことのできる目を持った不思議な少女、ヘヴンアイズと出会い、「聖者」（a saint）を掘り起こします。ヘヴンアイズも聖者も、実際にはブラック・ミドゥンで過去に起きた水の事故で犠牲になった人々と推測できますが、やはり象徴的な人物でもあります。

漆黒の闇の中でも目が見えることも、手足に水かきがあることも、ヘヴンアイズがブラック・ミドゥンという沈泥の母胎から生まれた、幻想的な人物であることを示唆しています。同じタイン川流域で育ったエリンとヘヴンアイズが姉妹のような関係を築くことは、エリンが土地との関係を深く結んだことの比喩表現でもあります。セルキーと人間との間に生まれた子どもは水かきを持つというブリテン島沿岸の伝承を思い起こせば、ヘヴンアイズの水かきは水と人との密接な関係性の暗喩として読むことができ、エリンがヘヴンアイズと深く結ばれなければならなかった理由も、ここに浮上してきます。

聖者は、その風貌から、イングランドを始め、北西ヨーロッパの湿地帯から多数出土している、湿地遺体（bog body, bog people）が連想されます。湿地遺体は、燃料のための泥炭採取の際に偶然掘り当てられることが多く、20世紀後半以降の研究では、死因は特定できないものの、大半の遺体が、高貴な装飾品を身に着けたり、東に頭を向けてうつ伏せで埋められていたり、喉周りにナイフ跡や縄が残っていたり、頭を叩き割られていたりしていることから、飢饉などの折に、豊穣の実りを願って大地に捧げられた犠牲者ではないかと考えられています。近年の放射性炭素年代測定によって、豊饒を祈るための犠牲の風習があった紀元前後の遺体と判明したものも多く、遺体が腐敗せずに保存される泥炭の化学作用も明らかにされてきました。この湿地遺体のイメージが重ねられた聖者から読み取れるのは、人間が共同体と自然との境界域で土地と密接にやりとりをしてきたマージナルな場所の特性、その聖性や畏怖です。

また、聖者には場所の特性を体現化した人物としての側面もあります。聖者が掘り出されたタイン川支流のウーズバーン一帯は、造船所や印刷工場など近代工業の工場が多く立ち並んでいた地域です。川沿いの工場からの排水や廃油の混じった沈泥質の堆積物が、湿地遺体が埋まっている泥炭のイメージに重ねられていると考えれば、聖者はウーズバーン一帯の近代工業の遺物の表象としても読めます。子どもたちも聖者を堀り出した時、つなぎの留め金を見つけ、「労働者だったんだ」と言い合います。エリンも、再開発のために取り壊されるのを待っている印刷工場の廃墟など川辺の風景を眺め、それらがこれから取り壊されて、姿

を消すだろうことに思いをいたし、泥の中に眠る聖者を見て、「取り壊された時代から来た人だ」と感じています。

アーモンドはこの物語でも、ウィリアム・ブレイクの詩世界のキーワードであるヴィジョンの変容を扱い、子どもたちに現実的なものを日常的に見る目だけではなく、非日常的、神秘的な視点から物事を捉え直すような、複数の視点を獲得させています。そして子どもたちのヴィジョン変容の物語には、タイン川周辺の地形や川の自然現象、そしてそれらの文化的な意味との歴史的、身体的、精神的な交流が欠かせなかったのです。ヴィジョンの変容によって、母の喪失感、根差す場所のない自己といった闇に繰り返し埋没しかけていたエリンは、ヘヴンアイズを妹のように愛している自分に気づき、ジャニュアリーと家庭を築く未来を想像し、母の死の先にも未来がつながっているという希望を見いだすことができるようになります。産後、自分を病院に置き去りにした母が、今でも自分を愛しており一緒に暮らしたがっていると信じたい気持ちと、結局は憎みきれないながらも「誰も彼もみんな憎んでやりたい」という気持ちが複雑に揺らぎ、苦しんできたジャニュアリーも、川下りを通じて、心の深く静かな部分まで下降し自己と対話できるようになり、結末では迎えに来た母親との絆を結び直します。

『ヘヴンアイズ』の様々な版の装画を見ると、外的、物理的な環境、気候や地形といったリアルな風景を描いたものもあれば、物理的な風景を極端に抽象化したものや、内的世界を象徴的に表現しているもの、その両面をはらんでいるものがあります。それぞれの装画は物語の核心をよく捉え、子どもたちが、自らの内なる荒野、荒廃した心の土壌に降り立っていく様子を可視化しています。

Ⅳ. シヴォーン・ダウド『ボグ・チャイルド』

シヴォーン・ダウド（Siobhan Dowd, 1960–2007）の『ボグ・チャイルド』（*Bog Child*, 2008）は、アイルランド人の両親のもと、ロンドンで生まれ育ったシヴォーン・ダウドの長編児童文学の3作目に当たる作品です。物語は、ボグ（bog）と呼ばれる泥炭質の湿地帯で見つかった湿地遺体を軸に、IRA（アイルランド共和軍）暫定派のハンガーストライキに参加し、死をもって抗議することを選んだ兄ジョーを持つ少年、ファーガスの視点から語られています。

物語の舞台であるアルスター地方とは、そもそもは12世紀のノルマン人侵入以前のアイルランドの5大王国の一つだったアルスター王国の領土でした。現在では、アイルランド共和国に属するドニゴール（Donegal）、キャバン（Cavan）、モナハン（Monaghan）の3県と、北アイルランドの6県を足した9県が、アルスターと呼ばれる地方です。つまりアルスターは、国境線を抱え込んでおり、独立を求めてIRAが爆弾テロを起こしてきた紛争地としての場所の特殊性を有しています。

ファーガスの母親は、「きっとわたしは、生まれ故郷のリートリムをはなれずに、やっかいごとだらけの結婚なんてしなければよかったのよ。…（略）…この村の男の子ときたら、だれもかれもが血まみれのヒーローになりたがるんだから。バカバカしい話よ。でも、あなたはそうならないわね？」とファーガスに言い、彼は「ならない」と答えます。高校時代にも体育館倉庫で爆弾騒ぎを起こしていたジョーとは異なり、ファーガスはスコットランドのアバディーン医大への進学を目指すことで、故郷を去ることのできる道を選びます。愛すべき故郷でありながら、去らなければ紛争に巻き込まれてしまう国土、それがアルスター地方に特有の政治的風土です。

こうした政治的環境とは対比的に語られるのが、湿地帯を擁する高地の自然環境です。ファーガスやタリー叔父をはじめ、北アイルランドに住んでいる共和国側の人間が自由の身だと感じられる場所こそ、国境地帯に広がっているボグなのです。ファーガスが高地へのジョギングを日々の息抜きとしているのも、町から出て森を抜けて坂を駆け上り、後ろを振り返る場面で語られているように、紛争の場としての町が広がる低地が免れ得ない政治的、社会的文脈を超越できる唯一の場所が、高地にある自然の荒野だからです。

ボグは一方で、神に見捨てられた場所（godforsaken place）とも語られます。godforsakenという語には、物理的に人里離れたという意味もありま

すが、字義通り、神に見捨てられたという含意があります。この語を伴って語られるとき、ボグは物理的な荒野としてだけではなく、アイルランド国土のメタファーとしても機能します。北アイルランド第二の都市ロンドンデリーは、本来アイルランドの人達からはデリー（ディレ）と呼ばれてきたのですが、16世紀以降に北アイルランドにグレートブリテン島から入植してきた、英国国教会に属するプロテスタント系住民によってロンドンデリーと名付け直されました。入植者が築いた旧市街を取り囲んでいる城壁の西側には、政治的・経済的に搾取されてきたアイルランド共和国に出自を持つカトリック系住民が暮らす貧しい地区があり、ボグサイド（bogside）と呼ばれてきました。そもそも水浸しで泥沼だった湿地帯を整地した、物理的な土地の状況に由来する地名ではあるのですが、同時に、北アイルランドへの入植者であるプロテスタント系住民からの視点で、蔑むような否定的な意味が重ねられています。ここから派生して、ボグは「汚い」という意味でも使われるようになりました。このことからも、ボグが南側の国土を表すことは明白です。ボグサイド地区には、紛争史を刻む壁画や記念碑が残り、献花もいまだに絶えません。

もう一つ、ボグと並んで、この物語の中で重要な場所が、ロングケッシュ刑務所（メイズ刑務所の別称）の H 棟です。今はもう刑務所としては機能しておらず、歴史遺産として残そうという動きが始まっていますが、北アイルランド紛争史にとって忘れ難い場所です。ここでは1981年 3 月 1 日から、リパブリカン[5]の政治犯によるハンガーストライキが実行され、ボビー・サンズ（Bobby Sands）を始め、7 名の IRA メンバーと 2 名のアイルランド民族解放軍（INLA）メンバーが衰弱の末、獄中で餓死しました。このため1981年という年は、アイルランド国民の民族独立意識が高まった年として、アイルランド紛争史において銘記すべき年となりました。『ボグ・チャイルド』の物語も、まさにこの年に設定されています。しかもファーガスの兄のジョーが、ボビー・サンズやイエス・キリストに重ねて語られ、紛争の犠牲となっていきます。

『ボグ・チャイルド』は、少し複雑な物語構造を持っています。ジョーが1980年代初頭の社会の犠牲となっていく過程が描かれるのと並行して、ボグから掘り出された湿地遺体の少女メルが、紀元80年頃の社会の犠牲となっていく過程が語られているのです。メルの物語が語られている部分のフォントは、英語版ではイタリックに、日本語版ではゴシックになっています。メルの物語は、森野聡子氏が指摘するようにファーガスの世界のパラレルワールドとしても読めますし、あるいは2000年前に実際に起こった物語として、ジョーの犠牲の物語を補強しているサブプロットと読むこともできるのですが、精査してみると、ゴシックやイタリックになっている部分は、メルの物語だけではなく、ファーガスの意識の流れであり、内面世界の叙述でもあることが分かります。

メルが一人称で語る物語は、ファーガスが眠っている間に見ている夢のようでもありますし、メルの声がファーガスに語りかけてくることもあります。一方、ランニングをしているファーガスが無心に走っている時の息遣いが、擬音語で記されているだけのこともあれば、夢の中で兄の声を聞いたり、埋葬の風景を幻視したりするファーガスの意識が書き留められていることもあります。実は比べてみると、日本語版のゴシック部分は、必ずしも原書のイタリック部分に忠実ではないので、意味合いが変わってきてしまうのですが、少なくとも原書では、メルの物語は、ファーガスが自分の頭の中で紡ぎ出している物語として解釈することもできるのです。ファーガスは、自身を犠牲にしてまで抗議行動を起こす道を選んだ兄ジョーに対して、自分は平和な国外へと脱出する道を取ろうとしていることに負い目を感じています。3 章のタイトル「闘争か、逃走か」（Fight or Flight）にも、ファーガスの苦しみが表れています。結局、アルスター脱出を選ぶファーガスは、心理的な補完作用として、メルの物語を紡がずにはいられなかったと考えられるのです。この文脈において、『ボグ・チャイルド』は、人間が物語る行為

5　北アイルランドにおいて、英国からの分離、アイルランド共和国との合併を求める一派。治安機関に対する爆弾テロなど、過激な闘争を行ってきた。

を必要とすることについて考えるメタフィクションとしても読むことができます。

『ヘヴンアイズ』と同様に、『ボグ・チャイルド』の様々な版の表紙を見比べると、本の装丁がいかに物語の核心を掴み、表現しているかがよく分かります。日本語訳のゴブリン書房版の表紙では、ファーガスが両拳を握りしめて高地に立ち尽くし、おそらく東の方角を遠望しています。東の方角は、ファーガスにとっては、唯一紛争のない未来が可能となるスコットランドがあり、メルにとっては、高地で犠牲になった最期の瞬間に見た朝日が昇ってくる方角です。英語初版（David Fickling Books，2008）では、上半身に何も身につけていないファーガスが、ジョーやメルの犠牲行為に想いを馳せているのか、高地で両腕を広げて立っており、イエス・キリストがゴルゴタの丘の上で受けた受難のイメージを喚起します。物語中でも、ジョーが犠牲になっても誰も救われないと母親が嘆き、人類を救ったイエス・キリストの犠牲と対比して、紛争が繰り返される虚しさが語られています。David Fickling Books は2011年に、高地の山々を背景にしたファーガスの顔と、全く同じ構図で山々の方を向いており顔が見えないメルの横顔の、２種類の表紙のペーパーバックを出版しました。二人が一見異なる人物のように見えながら、メルはファーガスが紡ぐ物語の登場人物であり、ファーガスの意識を具現化した象徴的な人物としても読めることが仄めかされています。

『ボグ・チャイルド』の冒頭には、考古学者 P・V・グロブによる『湿地遺体』（*The Bog People*，1969、デンマーク語初版 1965）から引用された文章が、エピグラフとして載せられています。ダウドは、ボグの自然としての意味と、歴史文化的な意味を通じて、また湿地遺体のイメージに託して、アルスター地方の特殊な風土に生きる若者の葛藤を描いたのです。アルスターという場所に生きることを文学的に探る試みは、アルスター地方生まれの詩人シェーマス・ヒーニー（Seamus Heaney，1939–2013）の第二詩集『闇への入口』（*Door into the Dark*，1969）に収められている「沼沢地」“Bogland”に始まるボグ連作詩（Bog poems）によってもなされてきました。ヒーニーは2013年８月に亡くなってしまいましたが、1995年にノーベル文学賞を受賞しています。彼も、ボグと湿地遺体をモチーフにした詩作を通じて、アルスター地方の人々の精神的風土を探り、北アイルランドの民族抗争と、それを受け入れなければ生きられなかった自身の個人的な歴史を語っています。「特異な政治的・宗教的風土を歴史的な必然性として内に抱え込んでいるのがアイルランドの〈自然〉」であり、アイルランドの自然は、単なるナチュラルな自然ではあり得なくなってしまったという指摘が、ヒーニーについての研究文献『シェーマス・ヒーニー：ナチュラリストのパラダイム』（小野正和、清水重夫 著訳　書肆山田　1993）にあります。私たちを取り巻く自然は、ナチュラルな自然なのか、山括弧つきの〈自然〉なのか。政治や宗教に限らず、自分を取り巻いている環境を複眼的に見つめ直し、自らの生が立脚している風土に重層性を見出す視点は、このような作品を読むことで、育まれていくのではないでしょうか。

おわりに

今日は、自らを取り巻く自然的・歴史文化的風土と、身体的、精神的、歴史的に関係性を結ぶ子どもの姿を、主にイギリス児童文学の作品から見てきました。

最後に、3.11以降、環境との関係を結び直さなければいけなくなった私たちが避けて通ることができない、エコサイド文学について触れておきたいと思います。エコサイド文学とは、生態系の破壊や環境絶滅を引き起こす人的災害を主題として扱う文学です。主題が震災や原発問題に限定されている場合、震災文学、原発文学などとも呼ばれます。

イギリス児童文学では、美しい湿地帯に原子力発電所を建てるかどうかという問題を扱ったマイケル・モーパーゴの『発電所のねむるまち』（*Homecoming*，2006）があります。ロバート・スウィンデルズ（Robert Swindells，1939– ）の『弟を地に埋めて』（*Brother in the Land*，1984）は、原爆の攻撃を受けて荒廃したイギリスの街中で生き抜く兄弟を描いています。ドイツのグードルン・パウゼヴァング（Gudrun Pausewang，1928）によ

る『みえない雲』(*Die Wolke*, 1987) は、映画化もされていて、コミック版でも広く知られています。

日本でも、2011年3月11日の東日本大震災を経て、震災後の環境を生きることについて語る子どもの本が書かれてきました。『セバスチャンおじさんから子どもたちへ:放射能からいのちを守る』(2013) は、3.11直後に世界中から福島に集まった環境学者による会議録で、3.11以降の日本の環境汚染について発表された報告を、子どもの読者のために分かりやすく伝えています。長谷川集平 (1955-) の『およぐひと』(2013) は、独自の視点から津波を描いた絵本です。川上弘美 (1958-) の『神様2011』(2011) は、1993年のデビュー作『神様』を、作者自身が3.11以降の価値観で書き直した作品です。くまと出会って過ごす1日が、日常的な文体で淡々と描かれていますが、1993年の自然環境を、3.11以降の汚染された環境に置き換え、私たちの日常や環境意識が不可逆的に変わってしまったことを浮き彫りにしています。

人々の生活や内的世界、社会的な精神風土は、外的環境である物理的な自然と、社会的あるいは歴史文化的な部分を含めた風土によって規定されます。これからを生きる子どもたちは、古来日本人が育み、育まれてきた日本の風土と、戦後あるいはポスト3.11に大きく変貌した現代日本の風土との関係性を、どのように築いていくのでしょうか。自然を探索し、身体的、精神的、歴史的に関わることは、自然の「自然性」から様々なものを受け取るだけではなく、自然のナチュラルな風景の中に潜む歴史文化と関係性を結ぶことでもあり、自己の内面を探索することにもつながる、ということは、今日見てきた様々な作品でも示されていました。住環境やメディア環境の変化などによって、自然の中で人間が生かされている感覚や、生の実感すらなかなか持ちにくくなっている現代の子どもたちに、子どもの本に携わる私たちが、子どもの本を通じてどのように関わっていけるのか。また、私たち大人も、どのように自分と環境 (自然と歴史文化的風土) との関係性を捉え直し、エコロジカル・アイデンティティを掴んでいくのか。私はもう少し、こうした問題をテーマに研究を深め、子どもの本の現場にも還元していきたいと願っています。

(ないとう　たかこ　昭和女子大学・
東京女子大学・和洋女子大学ほか非常勤講師)

「児童文学が描くイギリスの風土と子ども」紹介資料リスト

(本館) →国立国会図書館東京本館で所蔵
※→国立国会図書館東京本館にも所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	風土：人間学的考察	和辻哲郎 著	岩波書店 1979. 5	HA144-5 (本館)
2	東京の「地霊」	鈴木博之 著	文芸春秋 1990. 5	GC67-E122 (本館)
3	環境批評の未来：環境危機と文学的想像力	ローレンス・ビュエル 著 伊藤詔子，横田由理，吉田美津，三浦笙子，塩田弘 訳	音羽書房鶴見書店 2007. 11	KS184-J15 (本館)
4	まぼろしの白馬	エリザベス・グージ 作 石井桃子 訳	岩波書店 2007. 1	Y7-N07-H38
	The little white horse	Elizabeth Goudge	Puffin Books 2001	Y8-B7283
5	フィオナの海	ロザリー・K. フライ 著 矢川澄子 訳	集英社 1996. 6	KS156-G37 ※
	Secret of the Ron Mor Skerry	Rosalie K. Fry	Dutton 1959	所蔵なし
6	海と島のマイリ	スーザン・クーパー 文 ウォリック・ハットン 絵 ふるたちえ 訳	すえもりブックス 1996. 8	Y18-11881
	The selkie girl	retold by Susan Cooper illustrated by Warwick Hutton	M. K. McElderry Books c1986	Y19-A170
7	おふろのなかからモンスター	ディック・キング=スミス 作 金原瑞人 訳 はたこうしろう 絵	講談社 2000. 9	Y9-N00-117
	The water horse	Dick King-Smith	Puffin 1992	所蔵なし
8	ヒナギク野のマーティン・ピピン	エリナー・ファージョン 作 石井桃子 訳 イズベル＆ジョン・モートン=セイル 絵	岩波書店 1974	Y7-2195- [5]
	Martin Pippin in the daisy-field	Eleanor Farjeon illustrated by Isobel and John Morton-Sale	M. Joseph 1937	Y8-B10824
9	エルシー・ピドック、ゆめでなわとびをする	エリナー・ファージョン 作 シャーロット・ヴォーク 絵 石井桃子 訳	岩波書店 2004. 6	Y18-N04-H338
10	ケルトの白馬	ローズマリー・サトクリフ 作 灰島かり 訳	ほるぷ出版 2000. 12	Y9-N01-10
	Sun horse, moon horse	Rosemary Sutcliff	Bodley Head 1977	所蔵なし

11	闇の女王にささげる歌	ローズマリー・サトクリフ 著 乾侑美子 訳	評論社 2002. 12	Y9-N03-H32
	Song for a dark queen	Rosemary Sutcliff	Pelham Books 1978	所蔵なし
12	ジャッコ・グリーンの伝説	ジェラルディン・マコーリアン 作 金原瑞人 訳	偕成社 2004. 11	Y9-N04-H383
	The stones are hatching	Geraldine McCaughrean	HarperTrophy 2002	Y8-B8094
13	ふくろう模様の皿	アラン・ガーナー 作 神宮輝夫 訳	評論社 昭和47	Y7-2919
	The owl service	Alan Garner	Collins 1967	VZ1-431
14	Red shift	Alan Garner	Collins 1973 1995 re-printing	Y8-B3187
15	りすのナトキンのおはなし	ビアトリクス・ポター さく・え いしいももこ やく	福音館書店 2002. 10	Y9-N02-221
	The tale of squirrel Nutkin	Beatrix Potter	F. Warne 1995	Y17-A4628
16	のねずみチュウチュウおくさんのおはなし	ビアトリクス・ポター さく・え いしいももこ やく	福音館書店 2002. 10	Y9-N02-219
	The tale of Mrs. Tittlemouse	Beatrix Potter	F. Warne 1995	Y17-A4637
17	たのしい川べ	ケネス・グレーアム 作 石井桃子 訳	岩波書店 2002. 7	Y7-N02-77
	The wind in the willows	Kenneth Grahame	Methuen 1951	Y8-A400
18	クマのプーさん	A. A. ミルン 作 石井桃子 訳	岩波書店 2000. 6	Y7-N00-48
	Winnie-the-Pooh	A. A. Milne with decorations by Ernest H. Shepard	Methuen 1926	Y8-A159
19	ハヤ号セイ川をいく	フィリパ=ピアス [著] 足沢良子 訳 エドワード=アーディゾーニ 絵	講談社 1984. 5	Y8-1662
	Minnow on the Say	Philippa Pearce illustrated by Edward Ardizzone	Puffin Books 1978 c1955	Y8-A1248
20	川べのちいさなモグラ紳士	フィリパ・ピアス 作 猪熊葉子 訳	岩波書店 2005. 5	Y9-N05-H247

21	思い出のマーニー．上	ジョーン・ロビンソン 作 松野正子 訳	岩波書店 2003. 7	Y7-N03-H88
	思い出のマーニー．下	ジョーン・ロビンソン 作 松野正子 訳	岩波書店 2003. 7	Y7-N03-H89
	When Marnie was there	Joan G. Robinson illustrated by Peggy Fortnum	William Collins 1971	Y8-B4996
22	川の少年	ティム・ボウラー 著 入江真佐子 訳	早川書房 2003. 6	Y9-N06-H282
	River boy	Tim Bowler	Margaret K. McElderry Books 2000 c1997	Y8-A5258
23	スノーグース	ポール・ギャリコ 作 アンジェラ・バレット 絵 片岡しのぶ 訳	あすなろ書房 2007. 9	Y9-N07-H397
	The snow goose	Paul Gallico illustrated by Angela Barrett	Alfred A. Knopf 2007	Y17-B9598
24	ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち．上	リチャード・アダムス [著] 神宮輝夫 訳	評論社 1975	KS151-16 (本館)
	ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち．下	リチャード・アダムス [著] 神宮輝夫 訳	評論社 1975	KS151-16 (本館)
	Watership Down	Richard Adams	Puffin Bokks 1973 c1972	Y8-A832
25	オオカミは歌う	メルヴィン・バージェス 作 神鳥統夫 訳	偕成社 1994. 10	Y9-1027
	The cry of the wolf	Melvin Burgess	Andersen Press 1990	所蔵なし
26	西風のくれた鍵	アリソン・アトリー 作 石井桃子，中川李枝子 訳	岩波書店 2001. 2	Y7-N01-43
	The spice woman's basket and other tales	Alison Uttley illustrated by Irene Hawkins	Faber 1944	所蔵なし
27	氷の花たば	アリソン・アトリー 作 石井桃子，中川李枝子 訳	岩波書店 2004. 11	Y7-N04-H214
	John Barleycorn: twelve tales of fairy and magic	Alison Uttley illustrated by Philip Hepworth	Faber 1948	所蔵なし
28	農場にくらして	アリソン・アトリー 作 上條由美子，松野正子 訳	岩波書店 2000. 6	Y7-N00-79
	The country child	Alison Uttley	Faber and Faber 1931	所蔵なし
29	時の旅人	アリソン・アトリー 作 松野正子 訳	岩波書店 2000. 11	Y7-N01-12
	A traveller in time	Alison Uttley	Faber 1939	所蔵なし

30	グリーン・ノウの子どもたち	ルーシー・M. ボストン 作 ピーター・ボストン 絵 亀井俊介 訳	評論社 2008. 5	Y9-N08-J222
	The children of Green Knowe	Lucy M. Boston illustrated by Peter Boston	Puffin Books 1975	Y8-A1233
31	グリーン・ノウの川	ルーシー・M. ボストン 作 ピーター・ボストン 絵 亀井俊介 訳	評論社 2008. 7	Y9-N08-J328
	The river at Green Knowe	Lucy M. Boston illustrated by Peter Boston	Puffin Books in association Faber & Faber 1976 c1959	Y8-B1790
32	グリーン・ノウのお客さま	ルーシー・M. ボストン 作 ピーター・ボストン 絵 亀井俊介 訳	評論社 2008. 9	Y9-N08-J442
	A stranger at Green Knowe	L. M. Boston illustrated by Peter Boston	Harcourt Brace c1961	Y8-A95
33	グリーン・ノウの石	ルーシー・M. ボストン 作 ピーター・ボストン 絵 亀井俊介 訳	評論社 2009. 2	Y9-N09-J124
	The stones of Green Knowe	Lucy M. Boston illustrated by Peter Boston	Puffin Books 1979 c1976	Y8-B1791
34	海のたまご	ルーシー・M. ボストン 作 猪熊葉子 訳	岩波書店 1997. 9	Y7-M98-17
	The sea egg	Lucy M. Boston	Harcourt 1967	所蔵なし
35	ヘヴンアイズ	デイヴィッド・アーモンド 著 金原瑞人 訳	河出書房新社 2003. 6	KS151-H14 ※
	Heaven eyes	David Almond	Hodder Children's Books 2000	所蔵なし
	Heaven eyes	David Almond	Delacorte Press 2001	Y8-A5965
36	闇の底のシルキー	デイヴィッド・アーモンド 著 山田順子 訳	東京創元社 2001. 10	Y9-N01-196
	Kit's wilderness	David Almond	Hodder Children's Books 1999	Y8-A5252
37	ボグ・チャイルド	シヴォーン・ダウド 作 千葉茂樹 訳	ゴブリン書房 2011. 1	Y9-N11-J185
	Bog child	Siobhan Dowd	David Fickling Books 2008	Y8-B8453
38	The bog people: iron-age man preserved	P. V. Glob	Faber 1969	GG98-5 (本館)
39	シェーマス・ヒーニー：ナチュラリストのパラダイム	シェーマス・ヒーニー [著] 小野正和，清水重夫 著訳	書肆山田 1993. 5	KS158-E458 (本館)

40	発電所のねむるまち	マイケル・モーパーゴ 作 ピーター・ベイリー 絵 杉田七重 訳	あかね書房 2012. 11	Y9-N12-J319
	Homecoming	Michael Morpurgo	Walker 2012	所蔵なし
41	弟を地に埋めて	ロバート・スウィンデルズ 作 斉藤健一 訳	福武書店 1988. 3	Y8-6251
	Brother in the land	Robert Swindells	Puffin 1984	所蔵なし
42	みえない雲	グードルン・パウゼヴァング 著 高田ゆみ子 訳	小学館 2006. 12	KS417-H6 （本館）
	コミックみえない雲	アニケ・ハーゲ 画 グードルン・パウゼヴァング 原作 高田ゆみ子 訳	小学館 2011. 10	Y84-J29789 （本館）
43	セバスチャンおじさんから子どもたちへ：放射能からいのちを守る	セバスチャン・プフルークバイル 著 エミ・シンチンガー 訳	旬報社（発売）2013. 4	Y11-N13-L317
44	およぐひと	長谷川集平 [作]	解放出版社 2013. 4	Y17-N13-L344
45	神様2011	川上弘美 著	講談社 2011. 9	KH258-J741 （本館）

レジュメ

児童文学におけるセクシュアル・マイノリティ

水間　千恵

1.　セクシュアル・マイノリティとは

身体の性（sex）、性自認（gender identity）、性的指向（sexual orientation）
マイノリティ　⇔　マジョリティ
LGBT / LGBTI / LGBTIQ

2.　翻訳児童文学作品に見られるセクシュアル・マイノリティ

1980　J・ブルーム『キャサリンの愛の日』（*Forever*, 1975）
1980　R・ガイ『女友だち』（*Ruby*, 1976）
1994　I・ホランド『顔のない男』（*The Man Without a Face*, 1972）
1994　B・ワースバ『クレージー・バニラ』（*Crazy Vanilla*, 1986）
1999　F・リア・ブロック『ウィーツィ・バット』（*Weetzie Bat*, 1989）
2000　F・リア・ブロック『"少女神" 第9号』（*Girl Goddess #9*, 1996）
　　「マンハッタンのドラゴン」「ウィニーとカビー」
2000　F・リア・ブロック『ベイビー・ビバップ』（*Baby Bebop*, 1995）
2000　P・フォックス『イーグルカイト―ぼくの父はエイズとたたかった』（*The Eagle Kite*, 1995）
2001　S・チョボウスキー『ウォールフラワー』（*The Perks of Being a Wallflower*, 1999）
2006　C・クラッチャー『アイアンマン―トライアスロンにかけた17歳の青春』（*Ironman*, 1995）
2008　E・L・カニグズバーグ『ムーンレディの記憶』（*The Mysterious Edge of the Heroic World*, 2007）
2009　V・E・ウルフ『トゥルー・ビリーヴァー』（*True Believer*, 2001）
2009　D・レヴィサン『ボーイ・ミーツ・ボーイ』（*Boy Meets Boy*, 2003）

3.　アメリカにおけるセクシュアル・マイノリティと児童文学

（1）歴史
ホモフォビアとヘイトクライム
エイズ
同性愛者の親権問題
レズビアン・ベビーブーム

（2）キャラクター
主人公が当事者　←①
主人公以外が当事者　　↓②　　↓③　　↓④
家族が当事者　（きょうだい／父母／その他）
家族以外が当事者　（友人／先生／その他）
↑⑤　↑⑥　↑⑦

(3) 作家
当事者と非当事者

4. まとめ

(1) 日本の児童文学作品におけるセクシュアル・マイノリティ
1997　魚住直子『超・ハーモニー』
2008　岡田依世子『トライフル・トライアングル』
2011　如月かずさ『カエルの歌姫』

(2) イギリスからの翻訳作品
1997　エイダン・チェンバーズ『おれの墓で踊れ』
2003　エイダン・チェンバーズ『二つの旅の終わりに』
2008　サンディー・トクスヴィク『ヒットラーのカナリヤ』

＜引用文献＞

アルトマン，デニス 『ゲイ・アイデンティティ――抑圧と解放』 岡島克樹・風間孝・川口和也訳 岩波書店　2010
風間孝・河口和也『同性愛と異性愛』 岩波新書　2010年
チョーンシー，ジョージ 『同性婚――ゲイの権利をめぐるアメリカ現代史』 上杉富之・村上隆則訳　明石書店　2006年
セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク（編著）『セクシュアル・マイノリティ』（第３版）明石書店　2012年
水間千恵「アメリカの LGBT 作品における家族像の意味――ノーマ・クラインとレスリー・ニューマンを例に」 児童文学に見る家族の国際比較プロジェクト編『児童文学に見る家族の国際比較プロジェクト論文集――子どもの本と家族』（白百合女子大学児童文化研究センター　2010年２月）120–33頁
横田順子「問題小説」 日本イギリス児童文学会編『英語圏諸国の児童文学Ⅰ――物語ジャンルと歴史』第２版　ミネルヴァ書房　2013年　127–132頁
Becker, Beverley C. and others. *Hit List for Children 2: Frequently Challenged Books*. Chicago: ALA, 2002.
Cart, Michael. *From Romance to realism: 50 Years of Growth of Young Adult Literature*. New York: Harper Collins, 1996.
Cart, Michael and Christine A. Jenkins. *The Heart Has Its Reasons: Young Adult Literature with Gay/Lesbian/Queer Content, 1969-2004*. Lanham, ML: Scarecrow Press, 2006.
Day, Frances Ann. *Lesbian and Gay Voices: An Annotated Bibliography and Guide to Literature for Children and Young Adults*. Westport, CT: Greenwood Press, 2000.
Lesesne, Teri S. and Rosemary Chance. *Hit List for Young Adult 2: Frequently Challenged Books*. Chicago: ALA, 2002.

児童文学における
セクシュアル・マイノリティ

水間　千恵

はじめに

「児童文学におけるセクシュアル・マイノリティ」というタイトルでこれから話をさせていただきます。「子どもの本」と「性的少数者」という組合せに違和感を覚えた方もいらっしゃるかもしれません。実際、まだ日本では作品自体も非常に少なく、研究も進んでいるとは言えない分野です。しかしその一方で、近年では、多様な性の在り方についての議論が社会で盛んに行われるようになり、この点に関して悩みを抱える子どもや若者の存在にも光が当てられるようになってきています。大手の全国紙でもこの数年、子どもの性の多様性をめぐって度々特集が組まれていますので、御覧になった方もいらっしゃるのではないでしょうか。このような現状を踏まえて、本日は、このジャンルについての先進国であるアメリカの事例を中心にお話しすることによって、子どもの本に関わる皆様に多少なりとも情報提供ができればと思っております。

セクシュアル・マイノリティとは

まずは本論に入る前に、用語の定義から話を始めなくてはなりません。セクシュアル・マイノリティ、すなわち性的少数者とは、身体の性、性自認、性的指向において、少数者の立場にある人々のことを指します。「身体の性」とは生物学的な性別、「性自認」とは特定の性別に対する帰属意識、「性的指向」とは恋愛対象に基づくセクシュアリティ区分です。

「マイノリティ」という言葉を考えるに当たっては、「マジョリティ」を想定すれば分かりやすいはずです。「身体の性」について多数者の立場にあるのが「男性」「女性」であり、少数者の立場にあるのは「インターセックス」（半陰陽・間性）です。外性器の形状によって「男女」の区別がつきにくい人々の存在については、古くから知られていましたが、今日では遺伝子、ホルモンなども考慮要素となっています。「性別」というと「男女」に二分されると考えてしまいがちですが、そうではないということが近年より広く知られるようになってきています。

「性自認」については、「身体の性」に違和感を覚えていない人がマジョリティであるのに対して、違和感を覚える人々がマイノリティであり、その総称として「トランスジェンダー」という言葉が使われます。この中でも、身体への違和感が特に強い人々のことを「トランスセクシュアル」と呼びます。「身体の性」まではいじらなくてよいけれども社会的には異なる性（「男性」あるいは「女性」）として生きていきたいと願う人々もいます。彼らを狭義での「トランスジェンダー」と呼びます。さらに、男性であれば女性の、女性であれば男性の装いをすることで精神的な安堵感を得られる人々もいます。異性装者「トランスヴェスタイト」と呼ばれる人々です。

ここまでの分類が頭に入れば、「性同一性障害」（Gender Identity Disorder）が、性自認をめぐる診断名であることも御理解いただけると思います。

最後に「性的指向」ですが、「指向」という漢字にご注意ください。「嗜好」ではなく「志向」でもありません。趣味や好みの問題ではなく、また意志の力でどうこうできる問題でもない、ということです。異性に惹かれる人々がマジョリティ、そうでない人々がマイノリティということになります。同性愛者については、かつてはゲイという言葉で総称されていた時期もありましたが、今日で

は男性同性愛者のことはゲイ、女性同性愛者のことはレズビアンと呼ぶのが一般的になってきています。異性にも同性にも惹かれるバイセクシュアル、また、性的欲望を持たないアセクシュアルの方々もおられます。

「セクシュアル・マイノリティ」を理解する上で大事なことは、これらの要素、すなわち「身体の性」「性自認」「性的指向」を混同しないこと、そして、相互関係を正しく理解することかもしれません。例えば生物学的には「男性」の身体を持っていても、「男性」であることに違和感を覚えているトランスジェンダーの人が男性に惹かれるとしたら、それは「同性愛者」ではありません。

このような「セクシュアル・マイノリティ」を表わす際にしばしば、LGBT、LGBTI、LGBTIQ といった略語が使われることがあります。LGBT というのはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字です。I はインターセックス、Q はセクシュアル・マイノリティを包括的に表す queer あるいは、性自認や性的指向が曖昧な人々を指す questioning の頭文字です。

「クィア」(queer) という言葉についても、少々説明の必要があるかもしれません。英文学の世界では今日すっかり一般化した専門用語ですが、英語の queer 自体は「奇妙な」「おかしな」「いかがわしい」といった意味を持つ単語です。もともとはセクシュアル・マイノリティに対する侮蔑語として使われていましたので、この意味では「ホモ」「オカマ」「変態」といった訳語になるのだと思います。ところが1990年代になって、当事者たちがこの言葉を肯定的な意味を込めて使うようになりました。ですから、今日「クィア」という言葉が使われる際には、セクシュアル・マイノリティの自己肯定的なアイデンティティ表明や、伝統的なセクシュアリティ規範に縛られた社会に対する異議申し立てといった含意を前提に受け止める必要があります。

アメリカでは、既に40年以上も前からセクシュアル・マイノリティが子どもの本の中で描かれてきました。その大部分はゲイあるいはレズビアンですが、最近ではバイセクシュアルやトランスジェンダーの登場人物も増えてきています。これまで私自身は大体300作前後、この種の作品を読んでいるのですが、インターセックスの登場人物にはまだ出会ったことがありません―日本の真面目な女性マンガでは描かれているのですけれども。そもそもインターセックスの当事者の中には、「性自認」や「性的指向」に基づくマイノリティ（つまりトランスジェンダーや非異性愛者）と共にマイノリティとして括られることに抵抗感を持つ方もいらっしゃるそうで、運動体や各種団体での表記も LGBT の方が LGBTI よりも多いのが現実です。児童文学についても、LGBT あるいは LGBTQ を使う方が現状を反映しているように思います。

先ほど述べたとおり、アメリカでは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー等のキャラクターが登場する児童文学が40年以上も前から出版されてきています。実は、研究についても1990年代から本格化していますので、その歴史は20年以上になります。特に、アメリカの学会誌 *Children's Literature Association Quarterly* が1998年秋号で特集を組んだことで、この分野の研究に弾みがついた感があります。2000年代になると、児童書やヤングアダルトのブックガイドにも、インデックスにホモセクシュアル、レズビアン、ゲイ、トランスジェンダーなどの項目が盛り込まれるようになってきました。最近では、このテーマに特化した児童文学研究書も出版されています。

単に作品が出版されている、批評・研究がされているというだけではありません。2007年の10月にはJ・K・ローリング（J. K. Rowling, 1965– ）が、アメリカのカーネギーホールで行った講演の中で「ハリーポッターシリーズのダンブルドア校長はゲイである。」と表明し、大きな騒ぎになりました。また、2012年に亡くなった絵本界の大御所モーリス・センダック（Maurice Sendak, 1928–2012）は、長年連れ添ったパートナーの死をきっかけに、2008年になってニューヨーク・タイムズ紙上で、自身がゲイであることをカミングアウトしています。このように、アメリカでは作品の内外を問わず、子どもの本の世界でも、セクシュ

アル・マイノリティに関する話題が、実は非常に身近なものになっているのが現実です。

ここでまた、特殊な用語が出ましたので、簡単に御説明いたします。「カミングアウト」あるいは「カムアウト」という言葉がセクシュアル・マイノリティに関して使われる場合には、自らの性的指向を他人に対して明らかにすることを意味します。また、性的指向を隠した状態でいることの比喩として、「クローゼットの中にいる」という表現が使われることから、「クローゼットから出る」（out of the closet）という言葉でカミングアウトが表現されることもあります。

翻訳児童文学作品に見られるセクシュアル・マイノリティ

では、具体的に作品を見ていきたいと思います。分かりやすくするために、今日は日本語に翻訳されている作品の中から、全部で13冊を取り上げます。

最初に挙げた『キャサリンの愛の日』（*Forever*, 1975）は、離婚やいじめなどとともに性に関するテーマを積極的に取り上げたことで有名なジュディ・ブルーム（Judy Blume, 1938– ）の作品です。日本語版はメロドラマ風のタイトルになっていますが、原題は *Forever* です。この原題を見てぴんときた方もいらっしゃるかもしれません。児童文学史、特にヤングアダルト文学の歴史を学ぶと必ず言及される作品です。高校生の女の子の性体験を赤裸々に描いて、出版当時大きな議論を巻き起こしました。日本語版がコバルト文庫から出版されているということからも、内容をある程度想像していただけるのではないでしょうか。物語は、最初から最後まで「性」、特に性行為としてのセックスに関する話題で埋め尽くされています。その中で、主人公キャサリンの親友エリカのボーイフレンドとして、自分の性的指向に悩むアーティーという名の少年が登場しています。キャサリンとエリカはボーイフレンドとの仲がどれくらい進んだかを互いに打ち明け合いますが、その際、エリカは「（前略）彼がパーティーから送って来てくれて、頬におやすみのキッスをしたとき『あんたホモなの？』と言ってやったわ。」と話しています。いくら迫っても手を出してこないからです。「そしたら彼、なんと言った？」と問うキャサリンに対して、エリカが明かしたアーティーの返事は「オレにもわからないんだ。オレも知りたいよ。」「オレ、それを知るのがこわいんだよ。」というものでした。

エリカが投げつけた「ホモなの？」という言葉は、原文では"Artie, are you queer?"となっています。「知るのがこわい」という少年の答えからも明らかなように、この作品の中で queer であることは恥ずべきこととして捉えられていますし、少なくとも、社会の中でそのように捉えられているという現実が描かれています。そして、結局、この少年は後に自殺を企てることになります。

2冊目に挙げた『女友だち』（*Ruby*, 1976）は、トリニダード・トバゴ生まれの女流作家ローザ・ギイ（Rosa Guy, 1922–2012）の作品です。翻訳書での表記は「ガイ」となっていますが、正しい発音は「ギイ」だそうです。この物語は、ニューヨークのハーレムを舞台に、孤独な18歳の少女が知的で大人びた級友の女の子への愛に溺れていく様を描いています。主人公ルビーは家族の要であった母親が病死した後、大衆食堂を経営する抑圧的な父親と、皮肉屋で独立心に満ちた妹との暮らしの中で孤立感を募らせていました。生まれ育ったカリブの島の習慣と、生来の優しさゆえに、年長者を粗略に扱えない彼女は、学校でも、老齢の白人女性教師への態度をめぐって、アフリカン・アメリカンの級友たちから「アンクル・トム」と蔑まれて、孤立していました。そんなときに惹かれたのが、ブラックナショナリストの娘で大学進学を目指している秀才ダフネという女の子でした。男性性と女性性を兼ね備えた彼女の魅力を、ルビーは次のように描写しています。一部省略があります。以後引用に関しては同様に省略している箇所がありますので、あらかじめ御了承ください。

> ダフネ、ダフネ。なめらかな浅黒い肌をしたダフネ。太くていかつい黒いまゆと、それに見事に調和している灰色の瞳の持主ダフネ。厚く

て格好の良い唇と、真白な大きな歯をもつダフネ。黒くて濃い縮れ髪を肩までたらした女らしさあふれるダフネ。太い首にカラフルなシャツとツイードを組合せたボーイッシュなダフネ。
＜いまあの六フィートの身体が席につくところだわ…… …（略）…ダフネ、ああダフネ、ダフネ＞

この後間もなく、ルビーはダフネと深い関係になります。しかし、ルビーの父親の介入をきっかけに二人の仲には隙間風が吹き始め、最終的には、名門大学に進学が決まったダフネがルビーを捨てる形で関係に終止符が打たれることになります。『女友だち』は、ルビーとその妹を主要登場人物とする３部作の２作目に当たり、児童文学（ヤングアダルト文学）史上初めて「レズビアン関係」を描いた作品と位置付けられていますが、続巻では恋人の子どもを妊娠して中絶したルビーの姿も描かれています。

これら２作が、「セクシュアル・マイノリティ」を現代的な意味で取り上げた作品かという点には疑問が残るかもしれません。しかし、『キャサリンの愛の日』で、侮蔑語としての queer を投げ付けられ、そのようにカテゴライズされることに脅えていた少年は、少なくとも自分のセクシュアリティに悩みを抱えるマイノリティです。『女友だち』に登場するルビーの場合は、同性の恋人を持ちながらも、自分が同性愛者（両性愛者）だという自覚はなく、それに伴う葛藤もありません。それはある意味、彼女自身が非常に無垢で純粋だからですが、最終的には自分たち、すなわち「女性と肉体関係を持つ女性」に向けられる社会の眼差しに気付かされ、傷つくことになります。この意味ではやはり、セクシュアル・マイノリティの在り様の一面が描かれていると言えるでしょう。

３番目に挙げている『顔のない男』（*The Man without a Face*, 1972）は、家庭で孤立し疎外感を覚えている14歳の少年が、コミュニティと距離を置いて一人暮らしをしている、ある成人男性との交流を通じて成長していく様を描いた作品です。主人公のチャールズは、頭の良い姉と妹にはさまれて、非常に居心地の悪い家庭生活を送っています。姉とも妹とも父親が違うのですが、母親は、今は亡きチャールズの父親に対してのみ、ネガティブなことを口にしますし、どうやらその死に関しては何か公にできないような秘密もあるようだとチャールズ自身も薄々感じています。お陰で彼は家庭の中に居場所を見出すことができません。家を離れたくて寄宿学校への入学を志した彼が、個人教授を頼んだ相手が、事故で顔半分に火傷を負い世間から「顔のない男」と呼ばれていた47歳の元教師ジャスティン・マクラウドという人物でした。少年はこの教師に信頼を寄せ、強い絆を感じるようになります。その絆について、大人であるジャスティンは度々「父子関係」になぞらえますが、チャールズ自身は、父親を求める気持ちを認めながらも、何かそれ以上のものがあるのではないかと、自分自身に対して漠然とした不安を感じてもいます。実際に彼は「ぼくのこと、ホモだと思いますか？」と口に出してもいます。

やがて、チャールズが父親の死をめぐる秘密を知ってショック状態に陥ったとき、ジャスティンはこの少年をベッドへと導くことになります。ことが起きた翌朝、ジャスティンはチャールズに対して、この関係は、長年精神的に無理な緊張を強いられてきたチャールズが大きなショックを受けたことによって起きた突発的な出来事であり、「永続的な意味はない」と説明します。つまり、チャールズ自身の性的指向を決定付けるようなことではない、と言って安心させようとしたわけです。けれども、もちろんチャールズの不安は消えません。男女にかかわらず、こういう形で性体験をすることはあり得るのだと思いつつ、自分自身の性的指向に不安を覚えているわけです。彼の心情は次のように語られています。

そう、ぼくもそれは知っていた。それから、人間の中に女性的なものと男性的なものが存在するのも知っていた。だが、ほかのことも思い出さないわけにいかなかった。たとえば、岩の上にふたりで寝ころんでいたあの日のこと。あのときぼくは、手をのばしてジャスティンに触

れた。ぼくがそうしたのだ。彼ではなく。それを考えると、空恐ろしく、ほかのことは何も考えられなくなった。

主人公が女の子だったら、と想像してみてください。年上の男性に惹かれて初体験、という話になります。その場合、ここでは「体験そのもの」へのショックが描かれるはずですが、この作品では「体験そのものへのショック」ではなく、「自分の性的指向に対する不安」が描かれています。結局チャールズは、そのまま逃げるように寄宿学校に入った後、２か月経ってから改めて自分の気持ちに気付くことになり、それを伝えようとジャスティンを訪ねます。けれども彼は既に住まいを引き払って異国へ移住していました。しかも、心臓発作で亡くなっていたということが分かります。「自殺」ではありませんが、同性愛者を都合よく消し去るという構図がここには見て取れます。その一方で、最終的に、同性を含めて「人を愛する気持ちを肯定する」ということを謳い上げている作品であるということもまた事実です。

バーバラ・ワースバ（Barbara Wersba，1932– ）の『クレージー・バニラ』（*Crazy Vanilla*，1986）は、裕福ではあっても決して幸福ではない家庭に育った少年が、生命力あふれる逞しい少女との出会いを通じて成長を遂げていく様を描いた物語です。主人公のタイラーは14歳です。鳥の写真を撮ることが好きなのですが、株のディーラーをしている父親は認めてくれず、南部の上流家庭出身の母親もお酒に溺れていて、味方になってくれるわけではありません。唯一の理解者だった７歳違いの兄が同性愛者であることが分かり、家を出て行ったのは２年前、タイラーが12歳の時です。当時タイラーは、兄のことを理解しようと思って同性愛についての本を読みますが、性に関する生々しい描写にショックを受けただけでした。父親はエイズの話題を持ち出して兄を責め立て、母親は夫のことを恐れて自分の意見を言うことはありませんでした。やがて恋人と同棲を始めたという兄の知らせにタイラーは動揺します。ちょうどその頃、地元で起きたある事件も、タイラーの心に影響を与えていました。

あやしげなパーティーをやっていたある家に警察が踏みこんだら、男たちがみんな女の格好をしていたというのだ。化粧をして、スカートをはいて、ハイヒールなんかはいて、アクセサリーもつけていた。なかの一人はニューヨークで歯医者をやっている人で、有名な不動産業者も二人いたという。みんな結婚してちゃんとした家庭を持っている人ばかりだった。

この事件はテレビでも報道された。偶然そのニュースを見ていた母さんもぼくも、おたがいの顔から目をそらしてしまった。

同性愛と異性装の混同という、当時一般的だった誤解がここに描かれています。もちろん、作品の中で、これが誤解であることは述べられていますが、同性愛者に対する最も的確な擁護は、ミッツィーという14歳の女の子の口を借りて行われています。彼女は兄とその恋人の関係を受け入れられないタイラーに、次のように語りかけます。

どうして、兄さんが同性愛だってことを欠点だなんて考えているのかな。兄さんにとっては長所かもしれないじゃない…（略）…あたしのママにも、同性愛の友だちがたくさんいるのよ。でも、誰も、自分を変えたいなんて思ってないみたい。あるがままの自分で幸せなのよ。同性愛の人だって、違うのは性の好みだけで、あとはみんなと同じでしょ？　だったら、どうしてそんなに大騒ぎするの？　たぶん、きみが悩んでいるのは兄さんが同性愛だからじゃないのね。兄さんをとられてさびしいのよ

次々と恋人を変え、転居を繰り返す母親と共に生きてきたミッツィーは、野生動物専門のカメラマンになることを目指す少女です。自分よりはるかに厳しい環境の中で、同じような目標を持ち、逞しく生きているミッツィーとの出会いを通じてタイラーは成長します。抑圧的な父親の下で自分らしい生き方を肯定できないでいた少年の成長は、兄の在り様をそのまま受け入れるという姿勢

につながっていきます。

次に挙げたのはフランチェスカ・リア・ブロック（Francesca Lia Block，1962– ）の『ウィーツィ・バット』（*Weetzie Bat*，1989）です。1989年に出版されたこの作品は、LGBT 児童文学の歴史では金字塔になるものだと言ってよいと思います。日本に紹介されたのはちょうど10年後の1999年でした。ロサンゼルスの若者文化を色彩感あふれる詩的な文体で綴った物語です。アメリカでは1995年まで 6 年間に 5 作品が出版されてシリーズ化され人気を博し、10年後の2005年には後日譚が、また、最近、前日譚も出版されています。このシリーズは一貫して多文化主義を祝福し、あらゆる差異を乗り越えた人間愛を強調していますが、なかでも特徴的なのが性をめぐるテーマです。連作短編集の趣を持つ第 1 作の第 1 話で、主人公ウィーツィはクールな女子高生で、素敵なボーイフレンドのダークとデートを楽しんでいます。ところがある日、彼から突然カミングアウトされます。

「オレ、ゲイなんだ」
「だれが、なんで、いつから、どこで、どんなふうに――ううん、どんなかはいわなくていいっ」ウィーツィはいった。「でもね、あんたがゲイであってもなくても、そんなことどうでもいいよ」いいながら、ウィーツィはダークを抱きしめた。
ダークはコークをぐいっと飲んだ。
「けど、おれはずっとウィーツィのこといちばん好きだし、きれいでセクシーだと思ってる」ダークはいった。
「ってことは、あたしたち、一緒にオトコをゲットしにいけるわね」ダークの手を取り、ウィーツィがいった。

LGBT 児童文学においては、好きになった相手が同性愛者だと知った主人公が延々と葛藤したり、憎んだりするといったエピソードが描かれることが少なくありません。実は、バージニア・ユウワー・ウルフ（Virginia Euwer Wolff，1937– ）の『レモネードを作ろう』（*Make Lemonade*，1993）の続編、『トゥルー・ビリーヴァー』（*True Believer*，2001）もこのパターンです。主人公のラヴォーンという15歳の女の子は、密かに憧れていた幼馴染が他の男の子とキスしているところを見て、ショックを受け、彼を長らく避け続けることになります―最後には友情を取り戻しますが。このような同種の物語と比べてみると、リア・ブロック作品の斬新さがよく分かります。ウィーツィは、すぐさま相手の在り様を受け入れ、変わらぬ敬意と友情という名の愛を差し出しています。これは、非常に理想化されたカミングアウトノベルなのです。

さらに斬新なのは、このシリーズが提示する家族像です。ウィーツィは、恋人が子どもを持つことに反対した時、親友ダークとその恋人―つまり二人とも男性です―の協力を得て子どもを作ります。さらに、ウィーツィの恋人が別の女性との間に作った子どもも加えて、 2 組のカップル―ゲイカップルとストレートカップル―と 2 人の子どもの計 6 人で家族として暮らしていくことになるのです。

シリーズは全て LGBT 児童文学に分類されるのですが、ここでは特に第 1 作以外に、第 5 作の『ベイビー・ビバップ』（*Baby Bebop*，1996）を挙げておきました。これはゲイのダークを主人公にした物語だからです。ウィーツィと出会う前の少年時代の彼の姿が描かれています。そこでは、親友にカミングアウトして拒絶されて傷つき、暴行を受けて大けがを負うなど、セクシュアル・マイノリティとして生きることの困難さが語られています。これも LGBT 児童文学によく見られるエピソードです。

2001年に翻訳が出版された『ウォールフラワー』（*The Perks of Being a Wallflower*，1999）でも同様のエピソードが語られています。スティーブン・チョボースキー（Stephen Chbosky，1970– ）という作家が書いた青春小説で、現代版『ライ麦畑でつかまえて』とも評され、ハイティーンの若者に非常によく読まれています。アメリカでは高校の図書館所蔵率も非常に高い作品です。主人公は、幼児期に経験したある出来事のせいで精神的な傷を負い、自己表現にも問題を抱えている繊細な

チャーリーという15歳の男の子です。彼は個性的なサムことサマンサという少女に恋をし、その兄―ステップブラザーに当たります―のパトリックと友情で結ばれます。このパトリックがゲイです。物語の中で、パトリックは、同性愛関係の発覚を恐れて冷たい態度をとるようになった恋人によって心を傷つけられ、集団暴行の犠牲者にもなりかけます。この作品は映画化され、非常に高い評価を得たようです。『ハリー・ポッター』シリーズで人気を博したエマ・ワトソンがヒロインのサム役を演じており、日本でも間もなく公開されるのではないかと思います。

ブロックの短編集『少女神第９号』（*Girl Goddess #9*, 1996）もセクシュアル・マイノリティが登場する短編が収められています。「ウィニーとカビー」は、『ウィーツィ・バット』の第１話とよく似たカミングアウトノベルですが、「マンハッタンのドラゴン」“Dragons in Manhattan”は非常にユニークな物語です。主人公の女の子タックにはイジーとアナスターシアという二人の母親がいます。実母と義母ということではなく、母親二人の家庭、つまりレズビアンマザーの家庭で育てられた子どもなのです。そんな家庭に全く不満はなかったのですが、通い始めた中学で父親がいないことを指摘されたタックは、自分探しの延長として、父親を探す旅に出ることにします。そして旅の終わりに、イジーが実の父親だったということが分かるのです。

要するに、彼女の両親は、性別適合手術を受けて女性になった元男性であるイジーと、元から同性愛者だったアナスターシアというレズビアンカップルだったというわけなのです。ちなみに、このカップルはウィーツィ・バットシリーズの第４巻『エンジェル・フアン』（*Missing Angel Juan*, 1995）にも、名前は出てこないのですが、ちらりと顔を出しています。「ウィニーとカビー」では、イジーが家を出て以来、一度も両親、タックの祖父母に当たる人々と会っておらず、ずっと住所のない葉書だけを送り続けていたという事実も明かされ、セクシュアル・マイノリティがしばしば抱える問題の一つが提示されています。しかし結末では、この祖父母がタック一家をしばしば訪ねて来ることが語られ、ハッピーエンドになっています。

『片目のねこ』（*One-Eyed Cat*, 1984）や『どれい船にのって』（*The Slave Dancer*, 1974）で知られる国際アンデルセン賞の受賞者ポーラ・フォックス（Paula Fox, 1923– ）もセクシュアル・マイノリティを描いています。『イーグルカイト』（*The Eagle Kite*, 1995）がその作品です。日本語版の副題にあるとおり、エイズがこの作品の主要なテーマになっています。主人公の少年リーアムは、父親がエイズを発症したことをきっかけに、彼が実はゲイであったことに気付き衝撃を受けます。父の死後、リーアムは自分の中にある同性愛者に対する嫌悪感（ホモフォビア）に気付きます。

> 父さんの本当の病気のことを隠したいのは、デリアやルーサーに対してじゃない。ほかのだれでもない、自分自身に対してだ。父さんが浜辺で男と抱き合っているのを見てしまってから、だれかにとがめられたり、軽蔑されるのがずっと怖かった。

この作品は、エイズをめぐる誤解を正し、患者や同性愛者に対する差別意識を糾弾する意図をもって書かれていることは確かなのですが、自分自身のホモフォビアを自覚した少年が、それをどう克服するのか、あるいはしないのかという点については明らかにされないままに終わります。というよりも、父親が死んでしまったため、エイズについても同性愛者についてもこれ以上考えなくてよいというのが、主人公の最終的な状況なのです。この意味では、やはり、「同性愛者は都合よく死んで、問題は棚上げされる」という、『顔のない男』と同じパターンになっているのです。ちなみに、エイズについては、『ウィーツィ・バット』のような理想化された物語の中でも、かなり深刻な形で取り上げられています。

ホモフォビアについて非常に分かりやすく、その真理の一面を描いているのが、クリス・クラッチャー

（Chris Crutcher, 1946– ）の『アイアンマン』（*Ironman*, 1995）です。主人公は、優秀なアスリートなのですが少々短気な面がある、ボーことボーリガードという17歳の少年です。彼は、かねてから折り合いの悪かった教師に暴言を吐いて停学となり、処分解除の条件として、早朝に行われる「アンガーマネジメントグループ」（自分の怒りをコントロールするためのカウンセリング教室）への参加を命じられます。ギャング顔負けの生徒ばかりが属しているこのクラスへの参加を最初は渋ったボーですが、指導者のナカタニ先生の下で学ぶうちに、彼らがそれぞれに深刻な家庭の問題を抱えていることに気付き、また、自分自身が抱える問題（父親との関係）にも気付き、それに正面から向き合うようになります。トライアスロン競技会への挑戦というイベントを一つの軸にしたスポ根ドラマであると同時に、落ちこぼれグループが仲間意識を持ち、結束していく様子を描いた友情物語としても読めます。

さて、この作品に登場するセクシュアル・マイノリティは、ボーを息子あるいは弟のようにかわいがり、支え続けてくれたセルボーセック先生です。ボー自身もこの先生を慕っていたのですが、彼がゲイだと分かると、大きなショックを受け、距離を置くようになってしまいます。ボーの最も大きなこだわりは、次の言葉に表れています。「先生は男と寝る。それも男と並んで寝るだけじゃなくて、セックスするんだ」。ボーの父親は既に、セルボーセック先生の性的指向に関する悪口を地域に広め始めていました。ボーは、父親に抗して、先生の味方になりたい気持ちをもちろん持っています。けれども「こんど先生に会ったらどんな顔をすればいいんだろう？」とも思います。そして、「先生が普通の男だったら、こんな思いはせずにすんだのに」と考え、そこで思考停止してしまっています。

このように、どうしても嫌悪感を払拭できず悩んでいたボーを諭したのは、ナカタニ先生でした。それはかなり手荒な治療です。ナカタニ先生は次のように言いました。

ブルースター、おまえ、親父さんとお袋さんが、おまえをさずかった瞬間はどんなふうだったんだろうかなんて、考えたことがあるか？　つまり、自分の親がやってるところを想像したりするか？

これに対して、ボーは即座に「おれは変態じゃない」と答えます。ナカタニ先生は、ボーに対して、＜他人の性生活をリアルに想像し、それがノーマルかどうかを判断することのアブノーマルさ＞を教えてくれたのです。同性愛者に対する偏見の形成過程というものが、非常に分かりやすく描かれている作品だと思います。

大御所カニグズバーグ（Elaine Lobl Konigsburg, 1930–2013）の作品である『ムーンレディの記憶』（*The Mysterious Edge of the Heroic World*, 2007）もリストに挙げました。今年の春に亡くなったこの大作家の最後の長編です。これまでに紹介した作品とは少し毛色が異なり、現代のセクシュアル・マイノリティを扱っているわけではありません。ナチスによる、いわゆる「略奪絵画」をめぐるミステリー仕立てになったこの作品は、ホロコーストの犠牲者の中に実は多くの同性愛者たちが含まれていたことを伝えています。ユダヤ人が強制された、三角形を二つ重ねた黄色の星型バッジは有名ですが、同性愛者たちはピンク色の逆三角形（Rosa Winkel もしくは Pink Triangle）のバッジ着用を強制されました。80歳を過ぎた作家がどうしても書いておきたかった作品です。遺作となったこの作品で、これまで世の中にあまり知られていなかった Rosa Winkel、そしてナチス政権下での同性愛者の処遇というものが描かれていることの意味は非常に大きいと思います。

リストの最後に挙げたデイヴィッド・レヴィサン（David Levithan, 1972– ）の『ボーイ・ミーツ・ボーイ』（*Boy Meets Boy*, 2002）という作品をお読みになったことがある方はどれくらいいらっしゃるでしょうか？ざっと拝見した限りでは、いらっしゃらないようですね。実は、公共図書館にどれくらい入っているのかと思いまして、昨日、東京23区の図書館で検索をしてみたのですが、所蔵し

ていたのは半分以下でした。もしかしたら私の検索の仕方が悪かったからかもしれないのですけれども、ちなみにここ台東区でも、私が住んでいる文京区でも所蔵していませんでした。この作品の登場は、ブロックのウィーツィ・バットシリーズと同じくらい、LGBT 児童文学の歴史の重要な転換点となったと位置付けてよいと思います。この作品の革新性は、セクシュアル・マイノリティのコミュニティが既にそこにあるものとして、若しくはセクシュアル・マイノリティが既にそこにいるものとして描かれており、特別視されていない点と、明るいユーモアに満ちたスタイルにあります。主人公ポールのカミングアウトに関する記述を読むと、この作品の特徴はよく分かるはずです。

ぼくはずっと自分がゲイだとわかっていた。でも幼稚園に入るまでは本決まりじゃなかった。

ゲイだと言ったのは担任の先生だ。幼稚園の連絡帳にしっかり書いてあった。“ポールは完全にゲイで、自分というものがよくわかっています”

「ぼくの感じ方って正しいの？」と尋ねた幼いポールに対して、幼稚園の先生は「あなたの感じ方はあなたにとってはまったく正しいわ。それをいつも忘れないで」と答えます。その夜ポールはこの大ニュースを両親に伝えることを決心します。

父はキッチンにいて、皿を洗っていた。母は僕と居間にいて、カウチで本を読んでいた。そっと、ボクは母のほうに忍び寄っていった。

「ねえ！」と大声を上げると母は跳び上がったものの、なんでもないふりをした。本は閉じない――指でページを押さえただけなので、ぐずぐずしている暇はなかった。

「なあに？」

「ぼくはゲイなんだ！」

親っていうのは、絶対こっちの思ったようには動いてくれない。ぼくは少なくとも母が本から指をはなしてくれるものと思っていた。でも違った。代わりにキッチンのほうを向き、父に大声で呼びかけた、

「ねえ……ポールが新しい言葉を覚えたわよ！」

両親が受け入れるまでには数年かかった。でもそのうち慣れた。

ポールが幼馴染のジョニという女の子にカミングアウトしたのは2年生の時でした。キスしようとしたらポールが避けるので、ジョニは「あたしのこと嫌い？」と傷ついた顔をして聞きました。

「違う違う」ぼくは答えた。「でも、あのね、ぼくゲイなんだ」

「えっ。すごい。ごめん」（Oh, Cool, Sorry）

「いいんだ」

一瞬間があり、それからジョニがまた話を続けた。

「でもハゲタカがその手から左腕をぶん取って殴って……」

その瞬間、ぼくはジョニと末永く友達になれそうだと思った。

ストーリー自体は、恋と友情を軸にした高校生の日常生活を描いた、ある意味、たわいのない話です。ですから、日本の公共図書館が所蔵していなくても、仕方がない面があります。ポールの学校には、真っ赤なウィッグをかぶってハイヒールを履いた身長190センチのドラァグクイーン（女装家）もおり、彼／彼女は、フットボールの名クォーターバックでもあります。ここでは、ジョニのようなストレート（異性愛者）の恋愛も、ポールの恋愛も等しく戯画化され、どちらかがロマン化されてどちらかが悲劇的に描かれるということはありません。もちろん、セクシュアル・マイノリティの苦悩も描かれています。ポールの親友は、敬虔なクリスチャンである両親にゲイ・アイデンティティを認めてもらうことができず悩み苦しんでいます。けれども、作品全体は軽く明るい雰囲気を保ち、結末も希望に満ちたものになっています。

新しいタイプの LGBT 児童文学として大いに

話題になり、性的指向にかかわらず、つまりゲイもストレートも読むという意味で、若い読者の人気を集め、アメリカでは高校図書館等でも積極的に収蔵されている作品です。

アメリカにおけるセクシュアル・マイノリティと児童文学

少し時間をかけて、日本語に訳されている作品を見てきたのですけれども、ここからは、こういった作品が生まれてきた背景を押さえながら、翻訳されていない重要な作品にも言及しつつ、アメリカのLGBT児童文学の歴史とその特徴をまとめていきたいと思います。

アメリカのLGBT児童文学の歴史は40年を超えると先ほどから繰り返し述べてきました。その記念すべき最初の作品とされているのは、ジョン・ドノバン（John Donovan, 1928–1992）が1969年に発表した*I'll Get There. It Better Be Worth the Trip*です。友情が深まっていく中で、遊び心あるいは好奇心から関係を持ってしまった13歳の少年たちを描いた作品で、1969年に出版されているのですが、非常に長い間出版され続けていて、最近も新版が出たばかりです。

実はこの1969年というのは、アメリカのセクシュアル・マイノリティの歴史を考える上で、非常に重要な年でもありました。この年、1969年6月28日の出来事なのですが、ニューヨークのワシントンスクエアやNYU（ニューヨーク大学）にほど近いゲイバー「ストーンウォール・イン」に対する警官の手入れが行われた際、セクシュアル・マイノリティたちが抗議行動に出て、大きな騒乱に発展しました。それまでにも組織化の動きがなかったわけではありませんが、この事件以後、同性愛者を中心にセクシュアル・マイノリティの連帯と独自のコミュニティ創出の動きが急速に進み、権利獲得運動が活発化することになっていったのです。ですから、1969年はセクシュアル・マイノリティの権利獲得運動元年と位置付けられるような、記念すべき年なのです。その同じ年に、実はLGBT児童文学の最初の本も出ているということになります。

当時のセクシュアル・マイノリティの活動家たちは、運動戦略の一つとして、性をめぐる従来的な規範への不一致を自覚している人々に対して、カミングアウトを推奨しました。その結果、権利集団としてのセクシュアル・マイノリティが社会に顕在化していくことになったわけです。彼らの初期の運動は、アフリカン・アメリカンの文化的ナショナリズムやフェミニズムの影響を受け、エスニック・リバイバルや性革命、さらにはヒッピー・ムーブメントのようなサブカルチャーとも複雑かつ密接な関係にありました。

LGBT児童文学の中で、カミングアウトが重要なテーマになり続けてきたことも、このあたりの事情と無関係ではありません。また、『女友だち』や『ウィーツィ・バット』の中には、セクシュアル・マイノリティ文化と密接な関係にあった様々なムーブメントの影響が見てとれます。

そもそも、戦後のアメリカでは、性的指向が異なることは精神疾患とみなされ、その行為、特に男性同士については犯罪とみなされていました。別表（p. 67）を御覧ください。1973年になってようやく、アメリカ精神医学会は精神障害の診断名から同性愛を外しました。つまり、それまでは世の中的には「病気」だったわけです。国家機関でも職業差別が当然存在していました。さらに法制上も、植民地時代からソドミー法が存在しました。自然に反する性行為を取り締まる法律の総称で、事実上、同性愛を取り締まる際の根拠として機能してきました。実際、1960年代には、アメリカのほぼ全州にソドミー法がありました。1970年代になって、これを廃止する州が相次いだのですが、1986年には連邦最高裁がジョージア州のソドミー法に対して「ソドミー法規定は違憲ではない。」とする判決を出しています。これはつまり、少なくとも男性同性愛者の性行為が、刑事罰を伴う犯罪なのだと、国家レベルで意思表明をしたといえます。この判決が覆されるまでには、その後17年かかることになりました。別表の2003年のところに、テキサス州の事例を挙げています。ここでようやく、犯罪ではないということになったわけです。

今日でも、同性愛は中絶と共に、アメリカ社会を二分する政治的な論点です。大統領選挙でも、必ず争点になっています。同性愛者に限らず、バイセクシュアルやトランスジェンダーを含めて、自らをセクシュアル・マイノリティと位置付ける人々の権利獲得運動が進む一方で、彼らの性的指向や性自認の在り方を、特異な嗜好とみなしたり、彼らを変質者だとみなしたりする偏見は今も根強く残っているのが現実です。そのことを如実に示すのが「ヘイトクライム」です。最近、日本でも話題の「ヘイトスピーチ」は、人種、民族、宗教などの特定の集団や、その集団に属する個人に対する偏見に基づく誹謗中傷や憎悪に満ちた表現のことを指しますが、「ヘイトクライム」は、同様の定義に基づく犯罪、特に暴力を伴う犯罪のことを指します。アメリカの連邦法では「人種・宗教・性的指向・民族への偏見」が動機となる犯罪と定められています。「性的指向」が入っているのは、実際にそのような犯罪が頻発してきたからこそです。別表には、三つの殺人事件を挙げました。1978年のハーヴェイ・ミルクは、ゲイであることを公言してカリフォルニア議会のスーパーバイザーという公職についていた人物です。彼の生涯についてはドキュメンタリー映画にもなりましたし、数年前にショーン・ペン主演で映画化され、非常に高い評価を受けていましたので、おそらく御覧になった方もいらっしゃるかと思います。この事件については、政争などもからんでいたようですので、安易にヘイトクライムと決めつけることはできないでしょうが、チャールズ・ハワードとマシュー・シェパードという二人の青年は、明らかにヘイトクライムの犠牲者でした。こういった社会状況は、実は児童文学作品の中にも直接反映されています。1991年のベティ・グリーン（Bette Greene, 1934– ）の *The Drowning of Stephan Jones*（1991）は、1984年のチャールズ・ハワードの事件を基にしたもので、同性愛者に対する憎悪が招いた悲劇を描いた作品です。最近の作品にもあります。2002年に出版されたキャロル・プラム・ウーチー（Carol Plum–Ucci, 1957– ）の *What Happened to Lani Garver*（2002）でも、同様の悲劇が繰り返されています。ただし、この作品の被害者 Lani は、ホモセクシュアルではなく、性別不明の存在として描かれています。もしかすると Lani は、今まで取り扱われたことのないインターセックスの人物かもしれません。

別表には、1982年に GRID（ゲイに関連した免疫不全）に関する報道がなされことを記しておきました。後にエイズと名付けられた病です。初期に、ゲイの病として報道されたことによって、セクシュアル・マイノリティに対する不当な偏見が助長されたことは、先ほど御紹介した『クレージー・バニラ』や『イーグルカイト』などの作品にも反映されています。

LGBT 児童文学の背景になってきたアメリカの社会状況について、ここで一度まとめておきたいと思います。3 点あります。1 点目は、権利主体としてのセクシュアル・マイノリティの組織化が、アメリカでは1969年のストーンウォール事件以後に進展し、それは LGBT 児童文学の歴史と重なっているということです。2 点目は、その運動は、ほかのマイノリティの社会運動やサブカルチャーと密接な関係を持っていたということ、3 点目は、アメリカでのセクシュアル・マイノリティは、ごく最近まで公的に、精神病患者や犯罪者として扱われ、今日に至るまで、偏見や差別が残っているということです。

アメリカの社会におけるセクシュアル・マイノリティ、この場合は同性愛者、特にゲイに対する偏見や差別の背景は、もちろん宗教とも無関係ではありません。キリスト教では聖書の記述を根拠に長らく同性愛を罪としてきたからです。けれども近年では、教会の見解も分かれています。カトリックはもちろん同性愛を認めていませんが、プロテスタントでは、女性聖職者の登用と同様に、セクシュアル・マイノリティへの積極的な支援を行っている宗派もあります。アメリカで行われるセクシュアル・マイノリティのパレード「プライド」には、近年、教会が参加している例もよく見受けられます。

宗教を別にすれば、セクシュアル・マイノリティへの抑圧は、彼らの存在や主張が伝統的な家族像に対する脅威とみなされる際に、特に強まります。

児童文学との接点も、実はここに最も顕著に現れます。

そもそも、同性愛が精神疾患あるいは犯罪行為とみなされていた時代には、同性愛者たちが自らの性的指向を隠して、あるいはいずれ治るものと信じて異性パートナーと結婚し、子どもをもうけることも珍しくありませんでした。しかし、ストーンウォール事件以降進んだ権利獲得運動の中で、カミングアウトが推奨された結果、いったん規範的な家族を形成していた人々の中からも、カミングアウトして離婚する、あるいは、離婚した後にカミングアウトするケースが目立つようになりました。子どもの本の世界でも、1970年代には離婚家庭を描いた作品が次々と出版されましたが、1980年代にはそれに加えて、同性愛者の親が登場する作品が現れることになります。

別表の中では、1980年に挙げたノーマ・クライン（Norma Klein，1938–1989）の *Breaking Up* という作品があります。主人公は15歳の少女ですが、両親は既に離婚し、母親と共に暮らしています。この母親に同性の恋人がいると知った父親が、子どもへの悪影響を恐れて親権を求める裁判を起こそうとするという筋立てになっています。同性愛者が子どもに悪影響を及ぼすというのは、当時決して珍しい主張ではありませんでした。別表にも挙げておきましたが、1977年には、歌手の Anita Bryant を広告塔に、同性愛者の悪影響から「子どもを守ろう」（Save Our Children）というスローガンを掲げたキリスト教保守派のキャンペーンが、全米に広がりました。そのような状況でしたので、異性との間に子どもをもうけた後に離婚した同性愛者たちが、子どもの養育権、面会権などを求めても、子どもへの悪影響を理由に拒否されることが多く、裁判でも同性愛者の親が敗訴するケースが相次ぎました。クラインのこの作品は、こういった社会情勢を敏感に取り込んだ物語なのです。

セクシュアル・マイノリティの親を描いた作品についてはその後も連綿と出版されています。1988年にノーマ・クラインの作品がもう一つあります。*Now That I Know* という、離婚した父親のカミングアウトに反発する少女の心の動きを丁寧に描いた作品です。1980年代に出版されたこのテーマの作品に共通する特徴として指摘できるのは、親の性的指向を、子どもたちが直面する「問題」として扱っている点です。もちろん、作品全体として親が同性愛者であることを非難しているわけではなく、むしろそのような親を、子どもや元配偶者が受け入れていく過程を描いています。つまり、親が同性愛者だということは、家庭内不和や離婚と同様に、子どもにとって恥ずべきことではないし、社会に対して負い目に感じる必要もないから安心せよというメッセージが盛り込まれているのです。こういった当時の作品というのは、横田順子さんがまとめている「プロブレム・フィクション」の特徴にぴったり当てはまります。つまり、「物語よりも題材そのものに主眼を置き、多くの問題よりも一つの問題を扱い、その問題が社会性を帯びている」というわけです。

ところが1990年代になると、この傾向は変化します。1995年に出版されたジャクリーン・ウッドソン（Jacqueline Woodson，1963–）の *From the Notebooks of Melanin Son* は、単に親の性的指向を「問題」にする物語ではありません。母親が女性の恋人を連れてきて、とまどう少年の心情に寄り添った物語ではありますが、主人公の親子がアフリカ系であるのに対して、恋人は白人女性です。つまり、インターレイシャルカップルを描いた作品ということになります。人種というもう一つの差異を組み込むことで、物語をより複雑化させているのです。2006年に出版されたジュリー・アン・ピータース（Julie Anne Peters，1952–）の *Between Mom & Jo* は、さらに現代的な物語です。主人公はレズビアンカップルの下で幸せに暮らしてきた少年です。ところが、二人のママが別れてしまい、生物学上のつながりのない母親と面会できなくなって悩むことになります。また、先ほども御紹介したフランチェスカ・リア・ブロックの「マンハッタンのドラゴン」に登場するレズビアンカップルの片方が、実は性別適合手術を受けたトランスジェンダーだったという点については、既に御紹介したとおりです。この話を収録した短編集は、別表の1996年のところに挙げてあります。

さて、家族像をめぐる社会の動きと密接に関係したLGBT児童文学の動きについて、もう一つ、重要な例を御紹介しておきます。先ほどからいくつも御紹介してきたのは主に、「異性との間に子どもをもうけた後に、自らの性的指向に目覚めた同性愛者の親」を描いた物語でしたが、1980年代のアメリカ社会では別パターンのLGBT家庭が顕在化しました。主にレズビアンカップルを中心として、人工授精によって子どもをもうけたり、養子を迎えたりするケースが増え始めていたのです。自分たちのような家族を肯定的に描いた作品が欲しいという声に応えて登場したのが、レスリー・ニューマン（Lesléa Newman，1955–）の *Heather Has Two Mommies* という絵本で、1989年に出版されました。二人のママと幸せに暮らしてきた5歳の女の子ヘザーが、初めて保育所に行った日に、ほかの子にはお父さんがいるということを知って不安になって泣き出してしまいますが、先生に慰めてもらい、さらに、ほかの子どもたちの家族構成も様々だと知って、勇気付けられるという物語です。この作品は、翌1990年に出版された絵本、マイケル・ウィルホイト（Michael Willhoite，1946–）の *Daddy's Roommate* と共に、非常に激しい排斥運動に遭いました。絵本という形式で、明らかに幼児をも読者対象としていた点が、抵抗が大きかった理由の一つだと考えられます。*Daddy's Roommate* に登場しているのは「異性との間に子どもをもうけた後に、離婚してカミングアウトした父親」ですが、その後、レズビアンカップルだけでなく、子育てをするゲイカップルを描いた作品も描かれるようになっています。日本に紹介されているのは、2匹のオスペンギンの子育てを描いた『タンタンタンゴはパパふたり』（*And Tango Makes Three*，2005）のような婉曲的なものですが、もちろんアメリカではもっとストレートな表現の作品も、いくつも出ています。

表に挙げた作品の中でまだ言及していない作品を確認していきます。

1981年出版の作品が2作あります。ゲイリー・W・バーガー（Gary W. Bargar）の *What Happened to Mr. Forster?* という作品は1950年代のカンザスが舞台です。主人公を支えてくれていた親切な心優しい教師が、ゲイであることを理由に首になってしまうという物語です。ナンシー・ガーデン（Nancy Garden，1938–2014）の *Annie on My Mind*（1982）は、少女同士の恋を描いた作品ですが、不当な噂に苦しめられる女性教師のカップルも登場します。非常に美しい恋愛小説で、出版から30年以上たった今もよく読まれています。1986年出版のM・E・カー（M. E. Kerr，1927–）の *Night Kites* は、兄が同性愛者で、しかもエイズに罹患していることが知れ渡ってしまったために、孤立していく少年を描いた作品です。翻訳が出版されているポーラ・フォックスの『イーグルカイト』よりも早い時期にエイズを扱っており、より評判の高い作品です。1991年に出版されたジャクリーン・ウッドソンの *The Dear One* は、10代の妊娠を扱った作品でもあります。主人公は12歳のアフリカン・アメリカンの女の子です。母親が妊娠した少女（親友の娘）を預かったことで、主人公の生活に、そして心にも変化が起きます。そんな主人公の良き相談相手となっているのが、母親のもう一人の親友とそのパートナーです。この作品では、同性愛カップルが特別視されることなく日常生活に溶け込んでいます。1994年出版のM・E・カーの *Deliver Us from Evie* は、非常に保守的な南部の田舎町を舞台に、同性に魅かれる少女が経験する苦労を、妹の視点から描いています。1997年に出版されたジャクリーン・ウッドソンの *The House You Pass on the Way* は、自分の性的指向を秘めていた14歳の少女が、夏休みにやってきた年上の従姉もレズビアンだと知って、心を通わせるというエピソードが中心をなしています。けれども、やがて帰宅した従姉は、男の子と付き合い始め、これを知った主人公は再び孤独の中に取り残されることになります。肉体関係ではなく、精神的なつながりに焦点が置かれているとはいえ、これは先ほど御紹介した『女ともだち』の現代版と言っていいような内容を含んだ作品です。ジャクリーン・ウッドソンの名前は何度も出てきていますけれども、この作家の作品は日本にも紹介されています。ただし、セクシュアル・マイノリティを扱った作品は、日本では一作も出ておりません。

1999年のところに挙げている *Alice on the Outside* はフィリス・レイノルズ・ネイラー（Phyllis Reynolds Naylor, 1933– ）のアリス・シリーズの１冊です。日本語では『アリスのいじめ対策法』など、最初の数冊が青い鳥文庫から出版されていますが、アメリカでは30年近くにわたって、30冊近く出版されている人気シリーズです。つい先日、最新刊が出て、完結しました。表に載せたのはその11巻に当たります。中学生になったアリスは、セクシュアル・マイノリティの転校生と出会います。その後のシリーズで、アリスは「ゲイ・ストレート同盟」の活動に参加するなど、一貫してセクシュアル・マイノリティに好意的な立場をとることになります。

2001年出版のアレックス・サンチェス（Alex Sanchez, 1957– ）の *Rainbow Boys* は、ゲイの高校生たちの悩みや喜びを描いた作品で、セクシュアル・マイノリティのコミュニティがそこにあるものとして描かれている点で、先ほど取り上げた『ボーイ・ミーツ・ボーイ』と共に、LGBT 児童文学の新しい傾向を象徴する作品の一つです。

2004年のジュリー・アン・ピータースの *Luna* は、セクシュアル・マイノリティの姉を描いた作品ですが、この姉の身体の性は男性です。ルナと名乗る姉が、体の性と心の性を一致させるべく旅立つところで幕切れとなる、トランスジェンダーあるいはトランスセクシュアルの物語です。

まとめ

LGBT 児童文学というと、特殊なジャンルかと思われるかもしれませんが、実はテーマ自体は、従来の児童文学作品あるいはヤングアダルト作品とあまり変わらないということにお気付きになったでしょうか。

例えば、①個人の成長（アイデンティティトラブル、他者理解と受容）、②恋愛（障壁としての「同性愛」・失恋理由が「同性愛」）、③家族関係（家族の中の黒い羊として若者・親の抑圧・問題親）、④社会から受けるプレッシャー、などといったテーマは、ほかの一般的な作品と何ら変わるところはありません。

作家たちも実は様々です。これまで御紹介した作家の中で、オープンリー・ゲイ、オープンリー・レズビアンとしてカミングアウトしている人たちは、名前を挙げると、レスリー・ニューマン、マイケル・ウィルホイト、ナンシー・ガーデン、M・E・カー、ジャクリーン・ウッドソン、アレックス・サンチェス、デイヴィッド・レヴィサンぐらいではないでしょうか。それから、『タンタンタンゴはパパふたり』の作者は二人ともゲイで、実際に子どもを育てています。今、挙げた以外は、自分たちをセクシュアル・マイノリティだと認識していない方々なのです。つまり、このジャンルは、社会問題への関心が深く、多文化主義を肯定する、リベラルな価値観を持った、非当事者の作家たちによっても支えられてきているのです。

当事者である作家たちの作品にも、マイノリティに向けられた不当な差別や偏見を告発するだけでなく、若い読者が自分自身のアイデンティティを肯定できるようにとの願いを込めた、軽く明るい雰囲気の作品も出版されるようになってきています。

では、日本の児童文学はどうなっているでしょうか。レジュメに挙げたのは「児童文学」として出版されたものです。ほかには藤野千夜（1962– ）の『少年と少女のポルカ』（1996）や吉田修一（1968– ）の「Water」（『最後の息子』所収）など、一般書の中にも中高生が読んでいると思われるものはあります。けれども、決して多いわけではありません。ですが一方で、日本にはライトノベルやコミックなどで、様々なセクシュアル・マイノリティが描かれているということも忘れてはなりません。大人には極めて評判の悪い BL（ボーイズラブ）小説やコミックでも、唾棄すべき作品ばかりが出回っているわけではありません。今市子やよしながふみなどのように、含蓄のある作品を発表している作家もいます。

いずれにせよ、本日御紹介したデイヴィッド・レヴィサンの『ボーイズ・ミーツ・ボーイ』をお読みになれば、おそらく「これはふつうでしょう。よくあるつまらない話じゃないか。」とお感じになるのではないかと思います。こういった作品が「画期的」とみなされてしまうのが、アメリカの現

状です。そういったような、社会的環境の違いというものがあります。

けれどもやはり、今、現実にそういう悩みや苦しみを抱える子どもたちに求められている本がどのようなものなのか、ということは、我々もまだまだ勉強していかなくてはいけないなと、私自身、思っております。

（みずま　ちえ　川口短期大学こども学科専任講師）

児童文学におけるセクシュアル・マイノリティ（別表）

年	著者名、書名	社会の出来事	
1969	John Donovan. *I'll Get There. It Better Be Worth the Trip.* ①	ストーンウォール事件	John Donovan, 1929–92
1972	Isabelle Holland. *The Man Without a Face.* ⑥　→1994『顔のない男』		Isabell Holland, 1920–2002
1973		アメリカ精神医学会が精神障害の診断名から「同性愛」を外す	
1975	Judy Bloom, *Forever.* ⑤　→1980『キャサリンの愛の日』	公務員人事委員会がゲイ雇用禁止令を撤回	Judy Bloom, 1938–
1976	Rosa Guy. *Ruby.* ①　→1980『女友だち』		Rosa Guy, 1922–2012
1977		Anita Bryant による“Save Our Children”キャンペーン	
1978		Harvey Milk 殺害事件	
1980	Norma Klein. *Breaking Up.* ③		Norma Klein, 1938–89
1981	Gary W. Bargar. *What Happened to Mr. Forster?* ⑥		Gary W. Bargar Nancy Garden, 1938–
1982	Nancy Garden. *Annie on My Mind.* ①⑥	Gay–related Immune Deficiency（GRID）に関する最初の報道	
1984		Charles Howard 殺害事件	
1986	M. E. Kerr. *Night Kites.* ② Barbara Wersba. *Crazy Vanilla.* ②　→1994『クレージー・バニラ』	連邦最高裁がジョージア州のソドミー法に対して合憲判決を下す	M. E. Kerr, 1927– Barbara Wersba, 1932–
1988	Norma Klein. *Now That I Know.* ③	Lambda 賞創設（第1回授与は1989年）	
1989	Francesca Lia Block. *Weetzie Bat.* ⑤　→1999『ウィーツィ・バット』 Lesléa Newman and Diana Souza. *Heather Has Two Mommies.* ③		Francesca Lia Block, 1962– Lesléa Newman, 1955–
1990	Michael Willhoite. *Daddy's Roommate.* ③		Michael Willhoite, 1946–
1991	Bette Greene. *The Drowning of Stephan Jones.* ⑦ Jacqueline Woodson. *The Dear One.* ⑦		Bette Green, 1934– Jacqueline Woodson, 1963–
1993		世界保健機構 (WHO) が「同性愛」を疾病分類から削除	
1994	Marion Dane Bauer, ed. *Am I Blue?: Coming Out from the Silence.* M. E. Kerr. *Deliver Us from Evie.* ②		Marion Dane Bauer, 1938–
1995	Francesca Lia Block. *Baby Bebop.* ①　→2000『ベイビー・ビバップ』 Chris Crutcher. *Ironman.* ⑥　→2006『アイアンマン』 Paula Fox. *The Eagle Kite.* ③　→2000『イーグルカイト』 Jacqueline Woodson. *From the Notebooks of Melanin Sun.* ③		Chris Crutcher, 1946– Paula Fox, 1923–
1996	Francesca Lia Block. *Girl Goddess #9.* ③⑤　→2000『"少女神" 第9号』	婚姻防衛法（DOMA）成立	
1997	Jacqueline Woodson. *The House You Pass on the Way.* ①④		
1998		Matthew Shepard 殺害事件	
1999	Phyllis Reynolds Naylor. *Alice on the Outside.* ⑤ Stephen Chbosky, *The Perks of Being a Wallflower.* →2001『ウォールフラワー』		Phyllis Reynolds Naylor, 1933– Stephen Chbosky, 1970–
2001	Alex Sanchez. *Rainbow Boys.* ①⑤ Virginia Euwer Wolff. *True Believer.* ⑤→2009『トゥルー・ビリーヴァー』 Michael Cart, ed. *Love and Sex: Ten Stories of Truth.*		Alex Sanchez, 1957– Virginia Euwer Wolff, 1937– Michael Cart
2002	Carol Plum–Ucci. *What Happened to Lani Garver.* ⑤		Carol Plum–Ucci, 1957–
2003	David Levithan. *Boys Meets Boy.* ①→2009『ボーイ・ミーツ・ボーイ』	連邦最高裁がテキサス州のソドミー法に対する違憲判決を下す	David Levithan, 1972–
2004	Julie Anne Peters. *Luna.* ②	マサチューセッツ州で同性婚の合法化	Julie Anne Peters, 1952–
2005	Justin Richardson and others, *And Tango Makes Three.* →2008『タンタンタンゴはパパふたり』		Justin Richardson
2006	Julie Anne Peters. *Between Mom & Jo.* ③		
2007	E. L. Konigsburg. *The Mysterious Edge of the Heroic World*　⑦ →2008『ムーンレディの記憶』		E. L. Konigsburg, 1930–2013
2008		カリフォルニア州で同性婚の合法化⇒住民投票により無効化	
2009	Michael Cart, ed. *How Beautiful the Ordinary: Twelve Stories of Identity.*	Matthew Shepard 法成立	
2013		連邦最高裁が婚姻防衛法（DOMA）に違憲判決を下す	

原著名の右端の○で囲んだ数字は、その作品に登場するセクシュアル・マイノリティ（※1）の役割に応じて付記している。
①主人公、②兄弟姉妹（※2）、③親、④その他の家族、⑤友人、⑥先生、⑦家族以外のその他
※1　ただし、自己認識にかかわらず、そのような「行為」や「ふるまい」が見られるという場合も含む。
※2　②以下は主人公との関係を示す。

「児童文学におけるセクシュアル・マイノリティ」紹介資料リスト

（本館）→国立国会図書館東京本館で所蔵

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	キャサリンの愛の日	ジュディ・ブルーム 著 島村敬一 訳	集英社 1980. 11	Y82-7148 （本館）
2	女友だち	ローザ・ガイ 著 加地永都子 訳	晶文社 1980. 11	KS157-141 （本館）
3	顔のない男	イザベル・ホランド 作 片岡しのぶ 訳	富山房 1994. 7	Y9-1714
4	クレージー・バニラ	バーバラ・ワースバ 作 斉藤健一 訳	徳間書店 1994. 11	Y9-1157
5	ウィーツィ・バット	フランチェスカ・リア・ブロック 著 金原瑞人，小川美紀 訳	東京創元社 1999. 10	KS152-G422 （本館）
6	“少女神”第9号	フランチェスカ・リア・ブロック 作 金原瑞人 訳	理論社 2000. 1	KS152-G461 （本館）
7	ベイビー・ビバップ	フランチェスカ・リア・ブロック 著 金原瑞人，小川美紀 訳	東京創元社 2000. 2	KS152-G464 （本館）
8	イーグルカイト：ぼくの父は、エイズとたたかった	ポーラ・フォックス 著 村田薫 訳	文溪堂 2000. 9	Y9-N00-103
9	ウォールフラワー	スティーヴン・チョボウスキー 著 小西未来 訳	角川書店（発売） 2001. 4	KS153-G616 （本館）
10	アイアンマン：トライアスロンにかけた17歳の青春	クリス・クラッチャー 作 金原瑞人，西田登 共訳	ポプラ社 2006. 3	Y9-N06-H178
11	ムーンレディの記憶	E. L. カニグズバーグ 作 金原瑞人 訳	岩波書店 2008. 10	Y9-N09-J6
12	トゥルー・ビリーヴァー	ヴァージニア・ユウワー・ウルフ 著 こだまともこ 訳	小学館 2009. 6	Y9-N09-J278
13	ボーイ・ミーツ・ボーイ	デイヴィッド・レヴィサン 著 中村みちえ 訳	ヴィレッジブックス 2009. 9	KS163-J127 （本館）
14	タンタンタンゴはパパふたり	ジャスティン・リチャードソン，ピーター・パーネル 文 ヘンリー・コール 絵 尾辻かな子，前田和男 訳	ポット出版 2008. 4	Y18-N08-J199
15	ヒットラーのカナリヤ	サンディー・トクスヴィグ 作 小野原千鶴 訳	小峰書店 2008. 8	Y9-N08-J338
16	おれの墓で踊れ	エイダン・チェンバーズ 作 浅羽莢子 訳	徳間書店 1997. 11	Y9-M98-70
17	二つの旅の終わりに	エイダン・チェンバーズ 作 原田勝 訳	徳間書店 2003. 9	Y9-N03-H252

18	超・ハーモニー	魚住直子 [著]	講談社 2006. 7	KH667-H53 (本館)
19	トライフル・トライアングル	岡田依世子 作 うめだゆみ 絵	新日本出版社 2008. 9	Y8-N08-J887
20	カエルの歌姫	如月かずさ 著	講談社 2011. 6	Y8-N11-J586
21	少年と少女のポルカ	藤野千夜 [著]	講談社 2000. 3	KH166-G571 (本館)
22	Heather has two mommies	Lesléa Newman 作 Diana Souza 絵	Other World Publishing 1989	所蔵なし
23	Heather has two mommies	Lesléa Newman 作 Diana Souza 絵	2nd ed., 10th anniversary ed. Alyson Wonderland 2000	所蔵なし
24	Daddy's roommate	Michael Willhoite 作	Alyson Wonderland 1990	Y17-B15414
25	I'll get there, it better be worth the trip : a novel	John Donovan 作	Harper & Row c1969	Y8-B4383
26	Breaking up	Norma Klein 作	An Avon Flare Book 1980	所蔵なし
27	Now that I know	Norma Klein 作	Bantam Books 1988	所蔵なし
28	Annie on my mind	Nancy Garden 作	Farrar Straus Giroux 1982	所蔵なし
29	Holly's secret	Nancy Garden 作	Farrar Straus Giroux 2000	所蔵なし
30	Night kites	M. E. Kerr 作	Harper & Row c1986	所蔵なし
31	Deliver us from Evie	M. E. Kerr 作	HarperCollins c1994	Y8-A266
32	What happened to Mr. Forster?	Gary W. Bargar 作	Clarion Books c1981	所蔵なし
33	The drowning of Stephan Jones	Bette Greene 作	Bantam Books c1991	所蔵なし
34	The dear one	Jacqueline Woodson 作	Laurel-Leaf Books c1991	所蔵なし
35	From the notebooks of Melanin Sun	Jacqueline Woodson 作	Blue Sky Press c1995	Y8-A879
36	The house you pass on the way	Jacqueline Woodson 作	Delacorte Press 1997	所蔵なし
37	Luna : a novel	Julie Anne Peters 作	Little Brown 2004	所蔵なし
38	Between Mom and Jo	Julie Anne Peters 作	Little Brown 2006	所蔵なし

39	Alice on the outside	Phyllis Reynolds Naylor 作	Atheneum Books 1999	所蔵なし
40	What happened to Lani Garver	Carol Plum-Ucci 作	Harcourt 2002	所蔵なし
41	Rainbow boys	Alex Sanchez 作	Simon & Schuster c2001	所蔵なし
42	Am I blue? : coming out from the silence	Marion Dane Bauer 編	HarperCollins c1994	所蔵なし
43	Love & sex : ten stories of truth	Michael Cart 編	Simon & Schuster Books for Young Readers 2001	Y8-A5955
44	Mommy, mama, and me	Lesléa Newman 作 Carol Thompson 絵	Tricycle Press 2009	所蔵なし
45	Daddy, papa, and me	Lesléa Newman 作 Carol Thompson 絵	Tricycle Press 2009	所蔵なし

レジュメ

歴史とジェンダーをめぐって――バーネットの『小公子』、『小公女』、マロの『家なき子』、『家なき娘』の場合

川端　有子

アウトライン

1　作者の紹介
2　翻訳史、派生作品、変更点
3　四作品の紹介
4　類似点と相違点　ジェンダーの見地から
5　作品の地理的背景と世界情勢
6　発表当時の評判と、現在の評価

1　作者の紹介

エクトール・アンリ・マロ（Hector Henri Malot, 1830–1907）

フランス、ルーアン生まれ　劇作家志望、小説家

60余りの小説を書くが今も残っているのは3冊の児童文学作品のみ。『家なき子』、『家なき娘』、『ロマンカルブリス物語』。

フランシス・イライザ・ホジソン・バーネット（Frances Eliza Hodgson Burnett, 1849–1924）

イギリス、マンチェスター生まれ、アメリカ、テネシー州育ち。

イギリス生活も長いが晩年アメリカに帰化。60余りの小説を書くが今も残っているのは4冊の児童文学作品のみ。『小公子』、『小公女』、『秘密の花園』、『消えた王子』。

2　翻訳史、派生作品、変更点

作者	題名　出版年	邦題	主人公	舞台や関わりのある国
マロ	*Sans Famille* 1878	家なき子/児（まだ見ぬ親） 本邦初訳：五来素川	レミ	フランス、イギリス、スイス
バーネット	*Little Lord Fauntleroy* 1886	小公子 本邦初訳：若松賤子	セドリック	アメリカ、イギリス
マロ	*En Famille* 1893	家なき娘/少女（雛燕、あゝ故郷、なつかしの故郷） 本邦初訳：五来素川	ペリーヌ	（インド）フランス、（イギリス）

バーネット	*A Little Princess*（1888） 1905	小公女 本邦初訳：藤井白雲子	セーラ（セイラ、セアラ、サラ）	イギリス（フランス）（インド）

派生作品

もとの題名	テレビアニメ化 フジ系	テレビドラマ化	映画化（主なものに限る）
家なき子	家なき子レミ 1996放映 レミは女の子。半年放映、最低視聴率。	家なき子 1994放映 ストーリーは無関係、女の子（安達祐実）が主人公	
小公子	小公子セディ 1988放映 地味で目立たなかった。		メアリー・ピックフォードの小公子（母子を一人二役） リトル・プリンス
家なき娘	ペリーヌ物語 1978放映 根強い人気。		
小公女	小公女セーラ 1985放映 いじめエピソードを膨らませ、人気が高かった。	小公女セイラ 2009放映 現代の日本の高校に翻案。先生とセイラの母親との確執が裏にあり。真の主人公は先生？	テンプルちゃんの小公女（背景はボーア戦争中イギリス） リトル・プリンセス（背景は第一次大戦中アメリカ）

＊サン・テグジュペリ（仏）の『星の王子さま』の英題が *The Little Prince* であることもさらに混乱のもと。

翻訳と誤解　それぞれがおそろいの題名を持つが…？

『小公子』『小公女』はそもそも無関係な題名であった。

『家なき子』①は天使のような本当の母親を探して長旅をする物語　母子もの＝日本古来の少女小説のテーマ　そもそも翻案もので、レミを「久美子」とするものもあった。

『小公子』天使のような無邪気な子どもと家庭の天使の物語　母子一体性＝母親向けの家庭雑誌に初翻訳が載った。

『…女』は『…子』の亜流ではないか、同じ作品ではないかとの誤解がある。

『家なき子』と同題名のドラマは、女の子が主人公でそのセリフが流行語になった。

『小公女セーラ』のアニメにおける「いじめ」「耐え忍ぶ」テーマの強調。

『…子』は外向き、『…女』は内向き、というステレオタイプ的見方が主流。

全て、幸せな結末で終わり、めでたしめでたしに見えるが……

3　原作の意味や意図

①『家なき子』　＜家庭がなくて＞

フランスの地理、産業を学びつつ、独り立ちしていく孤児の少年が、思いがけない本当の母親と兄弟を見つけ出し、幸せになる話。

「旅芸人や子ども労働者の生活の現状」＋「母の探索」＋「貴種流離譚」

フランス→イギリス→フランス→スイス→イギリス

②『小公子』　＜小フォントルロイ公＞

突然イギリスの爵位の後継者と判明したアメリカ人の少年が、アメリカ嫌いの頑なな老伯爵の心を次第に溶かしてゆき、最終的に祖父と母を結び付ける話。

「貴種流離譚」＋「息子が結婚した外国人の嫁を嫌う祖父を孫がとりもつ」＋「領地の小作人の悲惨な状況を訴え、改革を促す社会主義的テーマ」＋「アメリカとイギリスの和解」

アメリカ→イギリス

③『家なき娘』＜家庭の中で＞

インドからフランスへ帰る途中、父母を失った少女が、身元を隠して祖父の工場に入り、努力の末、キャリアアップして祖父の秘書となり、孫だと身元を明かす話。

「息子が結婚した外国人の嫁を嫌う祖父を孫がとりもつ」＋「労働者の悲惨な現状を訴え、改革を促す社会主義的テーマ」

（インド→ギリシャ→クロアチア→ドイツ→）フランス、パリ→マロクール

④『小公女』＜小さな王女さま＞

寄宿舎学校に預けられたお金持ちの少女が、財産や後ろ盾を亡くし、階級的没落を経験するが、隣人が亡父の友人と判明し、再びお金持ちの養女となる話。

（インド→）イギリス、ロンドン

4　類似点

①②は主人公が実はイギリスの貴族の跡取りだったと分かる。

③④は主人公がイギリス・フランス・インドに関わりを持つ。

①②③は旅の物語　ただし旅がメインになるのは①のみ。

①②③④ともに父親はいない　①②は主人公と母、③④は主人公と疑似・父親の結び付きが強調される。

②③は勘当された父と、勘当した祖父の間を孫が取り持つ。

③④は貧しくても誇りを失わず自らを王女様に例える主人公。

①③④は孤児の物語　たった一人で世の中の荒波を乗り越え家族に出会う。

①②③は主人公が肉親に巡り合う。

①②③④ともに産業革命が生み出した悲惨な貧困状態を描く。

①②③④ともにその貧困を救うのはノブリス・オブリージュだとしている。

5　舞台となった時代と場所

19世紀末のフランス、高価な絹の産着で捨てられていたレミ少年。貧しい村から、ヴィタリスという旅芸人に連れられて、フランス各地をめぐり、各地の環境や暮らし、職業を学ぶ。イギリスの貧困街、スイスの別荘地にまで至る。厳しく美しい自然、農業、炭鉱業の危険、大都会の暗部、浮浪児の集団を使う親方などが描かれる。

19世紀末のニューヨークから始まる。階級制のない社会から、イギリスの爵位継承者へ移行するセドリック少年。だんだんアメリカのほうが強い力を持ち始めた時代、歴史のあるイギリスと自由の国アメリカ、その対立と和解を描いた。

19世紀末のフランス、インドからフランスへ旅してきた親子。途上で親を亡くした混血の少女ペリーヌは親戚のいるマロクールを目指す。頑なな祖父の工場に女工として身の上を隠して近づき、認められるまで。技術国イギリス、原料産出国インド、新しい工場のあるフランス。インド生まれの英語力の勝利。

19世紀末イギリス。インドで軍隊にいる父、フランス人だった母、ロンドンの寄宿舎学校に預けられたセーラは、フランス語が得意。父の死後、学校の下働きとなるが、隣に越してきたインドから来た紳士に引き取られ、お嬢様に返り咲く。

6　現代の読者

歴史とジェンダーをめぐって――バーネットの『小公子』、『小公女』、マロの『家なき子』、『家なき娘』の場合

川端　有子

川端です。私の講義の題名を「歴史とジェンダーをめぐって」と付けたのですが、むしろ、「歴史と地理とジェンダーをめぐって」と言ったほうが、今年の講義のテーマに合っていたかと考えております。

それから一言弁解しなければいけないのですが、「英米児童文学における」という題名を付けておりながら、私は2冊もフランスの本を取り上げてしまいまして、どう言い訳をしようか、いろいろ考えたのですけれども、うまい言い訳を思いつきませんでした。けれども、比較ということで言えば、つまりマロはバーネットより少し年上ですが、同じような時代に同じような物語を書いていますし、また、マロの作品の中にも、イギリスは大きなファクターとして入っておりますので、その辺でお許しいただきたいと思います。講義は、レジュメの方にアウトラインと書いてあります、1から6の順番に従って進めていきたいと思っております。

1.　作者の紹介

『小公子』（*Little Lord Fauntleroy*，1886）、『小公女』（*A Little Princess*，1888）、『家なき子』（*Sans Famille*，1878）、『家なき娘』（*En Famille*，1893）、それぞれ大変似た題名が付いておりまして、これを混同する人も多いと思います。特に『家なき子』と『家なき娘』ってどっちがどっちだかよく分からない、というような声もよく聞いたりします。このバーネットとマロが、どういう人だったかということを最初にお話ししたいと思います。

エクトール・アンリ・マロ（Hector Henri Malot）は、1830年にフランスのルーアンで生まれ、1907年に没した人です。劇作家を志望し、小説家となりまして、60冊余りの小説を書いていますけれども、全て大人向けのものです。当時は非常に人気のある大衆作家だったのですが、今残っているのは、彼が書いた3冊の児童文学作品のみで、後の作品はすっかり忘却の彼方へと葬り去られてしまいました。その3冊というのが『家なき子』『家なき娘』そして『ロマンカルブリス物語』（*Romain Kalbris*，1867）という本でして、これは3冊とも偕成社文庫から翻訳が出ております。

これに対し、フランシス・イライザ・ホジソン・バーネット（Frances Eliza Hodgson Burnett）は、1849年に生まれ、1924年に没していますが、イギリスのマンチェスターに生まれ、16歳の時にアメリカのテネシー州に移住します。そして、イギリスとアメリカの間を実に33回往復したと言われているような二重生活をずっと送っていたのですが、晩年になってからアメリカに帰化しました。やはり60冊余りの小説を書いているのですが、今も残っているのは4冊の児童文学作品のみでありまして、これが『小公子』、『小公女』、『秘密の花園』（*The Secret Garden*，1911）、そして、これはあまり知られていないのですけれども『消えた王子』（*The Lost Prince*，1915）、こんな作品が残っています。

この二人の作家が、本来生きていた時代には大人向けの小説家であったにもかかわらず、その小説が現代には残らなかった理由も実は似ています。というのは、この二人が書いていた大人向けの小説は、いわゆる通俗的で、大衆受けのするものだったわけで、今となっては非常に古臭い感傷的なメロドラマと見なされています。つまり（1）筋書きが非常にはっきりしている。（2）登場人物

のキャラクターが非常に際立っている。(3) 感傷的である。そして、(4) 筋書きは御都合主義的で、伏線が見事に繋がってハッピーエンドに終わるという、いわゆるウェルメイド・プレイ、よくできた話でして、19世紀という時代に非常に密着したものであったわけです。そして、その価値観とか宗教観、そして倫理観にしても、19世紀的なものが非常に強かったということで、現在の大人の鑑賞にはちょっと堪えるものではない、という特徴を持っているわけです。そこに書かれている恋愛は、ロマンティックなプラトニックラブですし、親と子の愛情が一番尊いものとして賞揚されたりしております。

この二人の小説が全部忘れられていった後でも、なぜか手遊びに書いた児童文学作品の方が残ってしまったのは、やはり同じような理由によります。大人向けの小説では時代遅れになってしまったこのような特徴が、実は児童文学の世界では良くも悪くも長所になっている、というところがあるためです。筋のはっきりしたところ、登場人物が非常に際立っていること、上手くできた物語として結末が綺麗に収まること、そして、セクシュアルな描写とかそういったものがほとんどないこと、全くないと言ってもいいと思いますが、そういったようなところが良くも悪くも長所となって、子ども向けの作品のみだけが残っている、ということのようです。

この二人が書きました『家なき子』、『家なき娘』、『小公子』、『小公女』という4冊の本は、筋書きでもいろいろな面で不思議なほど共通点を持っています。ほぼ同時代に生きていたのですから、お互いがお互いのものを読んでいたという可能性も否定はできないのですが、それを検証することはできないでいます。バーネットはマロを読んでいたのか、マロはバーネットを読んでいたのか、これはどうしても私には探ることができませんでした。フランス文学の研究者に、マロは英語が読めたのだろうかとか、それからバーネットの作品がフランス語に訳されていたのだろうか、とか聞いてみましたけれども、フランス文学の研究者というのは児童文学を軽視するきらいがありまして、「マロって誰？」、「あぁ、そういう人もいたね。」のような反応で、ほとんど分かりませんでした。『家なき子』、『家なき娘』が訳されているのかどうかといいますと、これは*“Nobody's boy”*、*“Nobody's Girl”*という題名で、確かに英訳はされていますけれども、その初出がいつかということは、大英図書館で調べてもちょっと分かりませんでした。

このような事情で、お互いにお互いの作品を読んでいたかどうかはよく分かりません。そのフランス文学の研究者のお話では、マロはイギリスのディケンズに、非常に影響を受けていたということは確かだそうですので、二人ともディケンズに影響を受けた孤児ものを書いたということで、必然的に作品が似てきたのかもしれません。また、二人の作品には当時のイギリス・フランス・インド・アメリカといった国々の国際関係が背後にあるため、共通点が出てきたということはあるかもしれません。ただし、ここで国際関係というと、国同士の関係が対等であるというような感じがありますが、もちろん当時はインドが植民地であり、先進国はイギリスとフランスであり、それをアメリカがだんだん追い越そうとしていた、そんな状況であるということは承知しておかなければならないと思います。

また、この二人の作品の共通点の一つとして、二人が当時の空想主義的社会主義の考え方を多分に共有していたということも考えられます。この空想主義的社会主義といいますのは、つまり、企業主や領主など、上に立つ人たちが、まるで家父長のように優しく慈悲深く下の人達を扱えば、社会は上手く回っていくという、人間の善意に頼った考え方で、階級格差を温存したまま、なんとか社会を改革していこうということですので、マルクス主義が生まれてからは全く否定されてしまった、そういう社会主義です。

また、この物語四つが混同されがちである一つの理由としては、4作ともが日本では「世界名作劇場」でアニメ化されている、そのように受容されているという点も挙げられるかもしれません。そして、映画化や邦画ドラマへの翻案もあり、そんなことがさらに受容に厄介な問題をもたらしているようでもあります。

2. 翻訳史、派生作品、変更点

マロとバーネットの原作と、そして日本語に訳されたときの初出の例、そして主人公、そして舞台と関わりのある国をレジュメにも載せてありますので、そちらを見ながら聞いていただければと思います。

まず、時代順に一番早いのが、マロの『家なき子』で、これは、*"Sans Famille"*という題名で、1878年に発表されました。主人公は、レミという名前ですけれども、本邦初訳の『まだ見ぬ親』という題名で訳された1903年のものでは、主人公の名前が「太一」という日本語名になっておりました。これは、明治時代の翻訳にはよくあったことです。そして主人公のレミは、フランス、イギリス、スイスまで足を延ばして、長い旅をすることになっておりまして、関わりのある国が、この三つということになります。

その次に年代順に出てくるのが、バーネットの*"Little Lord Fauntleroy"*、『小公子』ですけれども、これは1886年本邦初訳が、若松賤子の訳でして、これは翻訳史上もメルクマールと言われまして、口語体の非常に読みやすい形で『女学雑誌』という雑誌に掲載されたものがあります。主人公はセドリックという名前で、アメリカ生まれ、そしてその後イギリスの祖父の元へ呼び寄せられるという筋書きになっております。セドリックという名前は、車のセドリックの名前の由来であるようです。なぜなのかはよく分からないのですが、確かにレミやペリーヌやセーラよりは車の名前らしいな、という気はします。

その次に出てきますのが、マロの*"En Famille"*、これは1893年『家なき娘』又は『家なき少女』というふうに訳されているものですが、最初の翻訳は『雛燕』（五来素川［訳］）というものでして、その後も『あゝ故郷』とか、『なつかしの故郷』などという題名にもなっています。主人公はペリーヌで、インドで生まれたこの少女が故郷のフランスへ帰ってくる、というような物語ですが、その背後にイギリスの存在というのが大きくあります。レジュメでインド、イギリスなどが括弧に入っているのは、直接出てこないのだけれども、大きな関わりがあるという意味です。

そして最後にバーネットの*"A Little Princess"* 1905年、『小公女』というのがありますが、実はこれは、『セーラ・クルー物語』（*Sara Crewe, or What Happened at Miss Minchin's*）という題名で、1888年に発表された中篇の物語を劇化して、そしてそれをまた作者自身がノベライズしたものです。そして、その前身の話である『セーラ・クルー物語』は、やはり若松賤子が翻訳しておりますが、これは『少年園』という雑誌に掲載されております。この『小公女』となった長い物語の初訳は、藤井白雲子ということになります。主人公はセーラ、表記はセイラとかセアラとかサラとかありますけれども、Sara という名前です。これはロンドンから話が始まっておりまして、インドとフランスというのは括弧の中に入って、大事な舞台として影に登場しております。

スライドでお見せするのはマロの本邦初訳の『まだ見ぬ親』とそれから『雛燕』の挿絵の部分です。国立国会図書館デジタルコレクションに入っておりまして[1]、そこからこの画像を取らせていただきました。そして、バーネットの初訳の若松賤子の『小公子』と、『セーラ・クルー物語』英和対訳版というのが国際子ども図書館にありましたので、その表紙をちょっとお借りしてきました。若松賤子の訳の『小公子』は、岩波文庫で今でも読むことができます。「セドリックは何にも知りませんかった」と、どこか非常に特徴のある口語の訳文で、有名なものです。

そもそもこの原題『*Sans Famille*』、『*En Famille*』は、男の子、女の子、というペアの題名になっているわけではありません。『*Sans Famille*』というのは、家庭がなくて、という意味であり、『*En Famille*』は、「家庭の中で」という意味です。そして、バーネットの場合も、彼女自身これをお揃いの題名にするつもりがなかったということは、この原作の題名を見てもらえば分かると思います。「小フォントルロイ公」が『小公子』の原題ですし、「小さな王女様」が『小公女』の原題の直訳である

1　国立国会図書館デジタルコレクション
『まだ見ぬ親』は国立国会図書館／図書館送信参加館内公開。
『雛燕』はインターネット公開（平成26年７月現在）。

わけです。ですから、この二つの物語は日本に入ってきてから男女のペアとみなされて題名が付けられた、ということが分かると思います。そしてさらに翻訳されたときに『家なき子』、『小公子』そして、それぞれの「子」が、「女」という字に替わった、または「娘」という字に替わったわけですので、これは多分、後でできた姉妹編であり、その『小公子』の亜流であろうとか、その女版であろうというように、ちょっと軽視されたきらいがあると私は考えております。

つまり、この「子」とか児童の「児」というのは、かつては暗黙のうちに、男の子だけを指している言葉だったわけです。ところが、現代では、「子」は男の子も女の子も指す言葉になっております。このことで、男の子たちは、子どもの日っていうのは、女の子と男の子の日なのに、３月３日もあるのはずるいと言い、そして女の子たちは男の子の節句は休日なのに、お雛様の日は休日でないのはずるいと言う、といったような現象が起こっているわけで、これは、お分かりだと思いますけれども、大学に男子校がないのに、女子校があるのと同じような経緯です。

ともかく、これらは翻訳で生じたカップリングというわけです。そしてこの姉妹編のほうが付け足しであり、ちょっと劣るのではないか、というような雰囲気が醸し出されたのは確かかと思います。

この「子」や「児」が、男の子を代表していたというのは、例えば英語ですと、Man という言葉が人間という意味であり、そしてまた男という意味であったのと同じようなことですが、今は、chairman と言っていたものを、chairperson と言い換えるようなことが広まっているところです。ですから、これはちょっと余談ですけれども、『ピーターパン』の中で、ピーターパンが「自分は大人になりたくない」、と言うときに、”I don’t want to be a man.”と言っているのですが、実は、男にはなりたくないと言っているわけです。ひょっとしたら女の人にならよかったのかも、と思うんですが、それは考えすぎでしょうか。とりあえず、こういったような形で、カップリングは日本で翻訳の際に作られたものだということを紹介した後で、さらにメディア化された派生作品を少し見ていきたいと思います。

御紹介するのは、現在流通している翻訳の一例です。『家なき子』と『家なき娘』の完全版は、この偕成社の本のみです。『家なき娘』は岩波文庫でも出ていますけれども、訳が古いので、こちらのほうがずっと読みやすいです。『小公子』、『小公女』のほうは、たくさん翻訳が出ておりますが、挿絵がちょっと気に入ったので、スライドでは偕成社版、福音館書店版を並べてみました。偕成社版は日本の漫画家が絵を描いていまして、大変可愛らしいセドリックが描かれております。

次に、テレビアニメ化やテレビドラマ化、そして、映画化が招いた誤解というのを説明するために作った表をレジュメに載せてありますので、御覧ください。

テレビアニメ化と言いますと、フジテレビ系で、「世界名作劇場」というのがありましたけれども、この４作はそこで全てアニメ化されています。アニメ化の順番は表の掲載順とは違っていまして、『家なき子』は、実は最後に「家なき子レミ」という題名で、1996年の後半期に半年放映されております。というのは、前半に放映されていた「名犬ラッシー」が非常に不人気で、途中で打ち切りになってしまい、その後で急遽差し替えられた、というわけなのですが、ここでは、なんとレミは女の子になっています。レミという名前の響きが女の子のように感じられたのかもしれませんし、また、通常このテレビアニメは、１年クールなのですけれども、半年で放映したため、大変なダイジェストになり、そうすると、もう女の子でも良いという状況になってしまったのかもしれません。これについてはまた後で少しお話をします。しかしこの「家なき子レミ」は、この系列では最低の視聴率となってしまいまして、これがフジテレビ系のアニメの最後の作品となりました。

また、テレビドラマ化というのはおかしいのですけれども、1994年に、「家なき子」というドラマが放映されましたのは、御記憶にあるかと思います。ストーリーは全く『家なき子』とは無関係なのですけれども、孤児の女の子が主人公で、まだ

非常にあどけなかった安達祐実が「同情するなら金をくれ。」という名台詞で非常に有名になった作品でして、これが女の子だったということからも、「『家なき子』って女の子じゃないの？」というような誤解を生む原因に少しなったのではないかな、と思っています。

『小公子』のほうは、「小公子セディ」という題名で、1988年に1年間放映されていますが、これは比較的地味で、あまり目立ったところがなかったようです。

『家なき娘』は、1978年に「ペリーヌ物語」という題名で放映されました。これは根強い人気を持っておりまして、今でもペリーヌのファンは非常に多いようです。これは1年クールで放映するために、ペリーヌがお父さんやお母さんとインドから出発するところから話が始まっておりまして、旅の物語の部分がかなり長くなっているようです。

そして、『小公女』のアニメ版は「小公女セーラ」という題名で、1985年に放映されました。これはちょうど、社会問題として、いじめというのが話題になり始めた頃でして、セーラがいじめられる様子がここでもかここでもかと、膨らませて書かれていて、それに健気に耐える、「おしん」のような主人公が大変人気を呼びまして、原作のセーラとは似ても似つかぬ哀れで儚げな少女が書かれることになりました。なお『小公女』は、2009年に「小公女セーラ」という題名で実写版でも放映されております。これは舞台が現代の日本の寄宿制の高校に設定されておりまして、ここで、原作通りにセーラという少女が貧しくなっていじめられる、というストーリーになっているのですが、原作と違っているのは、ベッキーという女中さんが、カイト君という男の子になっている点、そこに淡い初恋がなんとなく挿入されている点でした。それからミンチン先生に当たる先生が、実はセーラの母親に大コンプレックスを感じていたという、母親同士の葛藤が背景に書き込まれておりまして、プロデューサーは、実は真の主人公は先生の方だと言ったりしています。これを見ていますと、「ハリー・ポッター」のスネイプ先生を思い出してしまうのですが、ともかくそのような設定になっておりました。

これに加えて映画化の方に目を移してみますと、『家なき子』、『家なき娘』にも、もちろん映画はあるのですが、それはちょっと置いておきまして、『小公子』については、実は私が確認した範囲でも9本の映画ができています。この映画化の細部については、これから私は論文を書くつもりでいるので、そのうちまた読んでください。二番目のアメリカで作られた映画は、主役のメアリー・ピックフォードが、なんと27歳で母親のエロル夫人とセドリックを一人二役で演じるという離れ業をやってのけております。これはサイレントの映画で、今ではDVDで出ておりますので、見ることもできます。

これにも大きな意味があると思うのですが、それはともかく、その後この『小公子』は、また有名なテレビ番組や映画になり、その邦題が、なんと「リトル・プリンス」（The Little Prince）となっておりました。これがまた混乱の元でして、実は「リトル・プリンス」というのは、サン・テグジュペリの『星の王子さま』（*Le Petit Prince*）の英語題名でもあるのです。ここで『星の王子さま』まで巻き込んで、ややこしいことになってしまいました。

『小公女』の映画化につきましては、いくつかあるのですが、一番古いものは「テンプルちゃんの小公女」、シャーリー・テンプルという名子役が演じたこの『小公女』は背景がボーア戦争中のイギリスになっておりまして、原作では死んでしまった父親が生きていて、記憶喪失で帰ってくるという展開になっております。また、2003年の「リトル・プリンセス」という『小公女』の映画では、背景は第一次大戦中アメリカとなっており、ベッキーは黒人の女中さん、そしてこれもまた記憶喪失になった父親が帰ってくるという展開になっております。

日本ではこんな形で、様々に受容されてきましたので、そのためにいろいろな誤解が出てきたものと思われます。

ここでは①②③④と年代順で考えていきます。

四つの作品の出版年代
①家なき子（*Sans Famille*）1878
②小公子（*Little Lord Fauntleroy*）1886
③家なき娘（*En Famille*）1893
④小公女（*A Little Princess*）（1888）1905

まず、お揃いの題名を持っているのですけれども、そもそもは、お互いにジェンダーは関係なかったということで、①と③、②と④は無関係な題名でありました。①と③は、お揃いの題名を持っているのですが、家がない、家があるという意味の題名でして、別に男女が対になっていたわけではありません。

①の『家なき子』は、天使のような本当の母親を探して長旅をする少年の物語でしたが、この母を探して長旅をするというのは、そもそも日本で昔からある少女小説の母子もののテーマと合致し、たくさんある翻案ものの『家なき子』の中には、このレミを久美子という女名前で訳しているものもあった、という事実もありました。また、②『小公子』は、天使のような無邪気な子どもと、家庭の天使のようなお母さんの物語でして、この母子一体性が非常な特徴になっております。ですから、かつてメアリー・ピックフォードがこれを一人で演じたのも、あながち理由のないことではないと、後になって思われるのですが。さらに若松賤子の訳が、母親向けの家庭雑誌『女学雑誌』に載ったということもまた興味深いことかと思います。そして③『家なき娘』と④『小公女』が、①と②の二つの男の子の話の亜流ではないかとか、また同じ作品ではないか、という誤解も出て来ております。

『家なき子』、『小公子』、この二つの男の子の話は外向きの話、つまり家庭の外で活躍する男の子の話である、そして『家なき娘』、『小公女』という女の子が主人公の物語は「家庭の中で」という原題に象徴されるように内向き、家庭内での物語である、というようなステレオタイプな見方が主流になってきたようなのですが、研究の世界でもそうだったと言えるのですが、原作をきっちり読んでみますと、そうとも言い切れないという事実が見えてきます。さらにこの四つの物語は、全てが幸せな結末で終わり、めでたしめでたしに見えるのですが、これもまた現在の目で見てみると、果たしてそうであったのか、という疑問も多少は残らなくはありません。

3. 原作の意味や意図

それでは次に、原作の意味や意図を追っていきたいと考えます。

まず、①『家なき子』は、フランスの地理や産業を学びつつ、一人立ちしていく孤児の少年が、思いがけず本当の母親と兄弟を見付け出し、幸せになるという物語です。この物語の中には、旅芸人や児童労働者の生活の現状といったリアリスティックな描写と、それから、母を訪ねてという永遠のテーマ、そしてロマンスにはつきものの、貴種流離譚というのが重なって加えられています。そして主人公のレミは、フランスからイギリス、そしてフランスへ戻ってスイスへ、そしてまたイギリスへ戻って来ています

次に②『小公子』の方は、突然、イギリスの爵位の後継者と判明したアメリカ人の少年が、アメリカ嫌いの頑なな老伯爵の心を次第に溶かしていき、最終的にはその祖父と、母を結び付けるという物語でして、これにも貴種流離譚、そして息子が結婚した外国人の嫁を嫌う祖父を孫が取り持つ、というテーマを持っている上、領地の小作人の悲惨な状態を訴え、改革を促す社会主義的なテーマも兼ね備えております。さらにこの中にはアメリカとイギリスの和解というテーマも含まれています。

③の『家なき娘』は、インドからフランスへ帰る途中、父母を失った少女が身元を隠しながら祖父の工場の中に入り、努力の末にキャリアアップして祖父の秘書となり、最後に自分は実は孫なのだと身元を明かすという物語でありまして、『小公子』と同じように、息子が結婚した外国人の嫁を嫌う祖父を、孫が取り持つというテーマが繰り返されております。そして労働者の悲惨な現状を訴え、改革を促す社会主義的なテーマも、やはりここに繰り返されております。このペリーヌの旅は、インドからギリシャ、クロアチア、ドイツ、

フランス、そしてパリからマロクールという街へと続いていきます。マロクールは架空の町の名前ですが、モデルになったという工場町は存在しております。

④の『小公女』というのは、インドからロンドンの寄宿学校に預けられた、お金持ちの少女が、財産や後ろ盾の父を失くしてしまい、階級的没落を経験するのですが、隣人が亡くなった父の友人と判明し、再びお金持ちの養女となる物語でして、セーラはインドからイギリス、ロンドンへやってくる、という旅路をたどっております。

4. 類似点

類似点としましては、この①『家なき子』と②『小公子』は、主人公は実はイギリスの貴族の跡取りだったと分かる、という点があります。そして、③『家なき娘』と④『小公女』には、主人公がイギリス、フランス、インドに強い関わり合いを持つという共通点を持っております。そして、①と②と③は旅の物語であるということ、ただし、旅がメインになるのは、この①の物語のみです。そして、この４作ともに、主人公には父親がいません。そして、①と②は主人公と母親、そして③と④は、主人公と疑似父親、つまり、③の場合はおじいさん、④の場合は父親の友人との結び付きが強調されます。そして、②『小公子』と③『家なき娘』は、勘当された父と勘当した祖父の間を孫が取り持つという点が共通点です。そして③と④は、貧しくても誇りを失わず、自らを王女様に例える、プライドの高い少女の主人公というのが共通しています。①と③と④は孤児の物語であり、たった一人で世の中の荒波を乗り越え、家族と出会うという物語になっております。そして、①と②と③は、実の肉親に巡り合う、というプロットを持っております。そしてこの４作が４作とも産業革命が生み出した、悲惨な貧困状態を背景として描いており、その貧困を救うのは高貴なる者の義務、つまり、ノブレス・オブリージュであるという空想主義的社会主義の考え方を背景に持っております。

5. 舞台となった時代と場所

それではこの物語の舞台となった時代と場所を、少し見ていきたいと思います。

―レミの道のり

『家なき子』の舞台は、19世紀末のフランスです。レミ少年は、高価な絹の産着を着て教会の前に捨てられていたということになっており、見付かった村はシャヴァノンという貧しい村です。ここで彼は養い親に育てられるのですけれども、ここから売り飛ばされて、ヴィタリス親方という旅芸人に連れられて、荒野や石灰質の高原、常緑の谷、ブドウ畑、などを通り、シャヴァノンからドルドーニュ川を下っていって、ボルドーという港町の辺りまで、まずは旅をします。そして、ここで一旦、その旅芸人のヴィタリスとは離れてしまいますが、この後ガロンヌ川から続くミディ運河を船で旅をしているミリガン夫人という未亡人と、その息子のアーサーに拾われて、ポーという町からセートという町へ、一緒に贅沢な旅をします。ミリガン夫人とアーサーはお金持ちのイギリス人で、ミリガン夫人は身体の弱いアーサーのために、この船で静養の旅をしているのでした。確かにこのポーとかセートは、地中海の沿岸でもありまして、気候は温暖で、そしてイギリス人の避寒客と言うのでしょうか、寒さを逃れて、こちらで冬を過ごす人たちが多かったということでも知られております。けれども主人公のレミはそのままミリガン夫人と一緒に暮らすのではなく、ヴィタリス親方と再会し、再び二人でパリへと旅を続けていきます。その道のりは、ロワーヌ川を遡り、この辺でレミはミリガン夫人とは違う道を行くのだろうなと思いながらパリへとたどり着くわけです。ところが、花の都と憧れていたパリの実情は、大変悲惨なものでありまして、大都会の裏町で行われている児童労働の実態、親方が多くの浮浪児を引き連れて煙突掃除をさせたり、様々な片付けをさせたり、乞食をさせたりして、その売上げの上前をはねている、といったような実情がここで語られます。ヴィタリスは、一旦ここでレミをある親方の元に預けるのですが、その後また二人で旅を続けていくことになります。けれども、パリの

近郊で、ヴィタリスは亡くなってしまい、一人ぼっちになってしまったレミは、この近郊にある、花を作っている農家に引き取られ、そこで幸せな暮らしを４年ばかり経験します。ここの家族はレミを家族の一員として迎えてくれ、そこの兄弟とも仲良くなって、レミは家族生活というのを経験します。また花作りの農業を手伝うことによって、レミは植物学の研究を非常に細かくすることになります。ところが、この生活は長くは続かず、突然襲ってきた災害のために、この花農家は全く立ち行かなくなり一家離散の目にあってしまい、レミもたった一人独立して、今度は自分自身が親方となって、レミ一座というのを作り、カピという犬が一匹、そしてパリで知り合ったマチアというヴァイオリン弾きの友人とともにまた旅芸人の生活を始めることになります。

後半は、レミが自分自身の一座を作って、パリから一旦、自分の育てのお母さんがいるシャヴァノンに帰ろうとする旅路が描かれていくのですが、その途中でレミは自分に親切にしてくれた花農家の兄弟の一人に会おうと考え、少し寄り道をして、バルスという所へ行きます。このバルスは実は架空の地名らしいのですが、鉱山の町で炭鉱があります。そしてその家の子どもは炭鉱で働いていたのですが、ここでレミはその手伝いをするうちに落盤事故に巻き込まれ、一週間ほど地下に閉じ込められてしまいます。このとき、同じく巻き込まれて閉じ込められた人たちの中に、地質学に非常に詳しい職人がおりまして、この人の話からレミは地質学、炭鉱学、炭鉱の仕事のやり方、いろんなことを学ぶことになります。このような脱線が多いため、『家なき子』は非常に長い物語になっているのですが、この、花作り農家で植物学を学ぶ、バルスの近くで地質学を学ぶといった辺りの話を端折ってしまいますと、これは単に男の子が母を求めて三千里という話になってしまうわけで、別に女の子が主人公でも良いのではないか、となってしまう、つまり、ダイジェスト版にしてしまうと、『家なき子』の職業小説としての意味がなくなってしまうわけです。

そしてこの後、無事にレミとマチアは念願の牝牛を買って、シャヴァノンに帰り、育ててくれたお母さんに再会するのですが、実はレミの実のお母さんが生きているという話をされまして、その人を探そうと再び二人はパリへ出ていきます。そしてパリで、実の親はロンドンにいるのだということで、このテムズ河のほとり、ロンドンまで行くことになります。19世紀のロンドンは、『小公女』にも描かれているとおり、スモッグが大変ひどかったそうで、「豆スープのような煤煙」と言われていました。当時、石炭を焚く暖房を使っていたために、ロンドンの霧は非常に汚かったということで、今の方が空気はずっときれいです。レミは、ロンドンでベスナルグリーンというスラム街に自分の家族が住んでいると言われ、そこへ連れられていきます。ところがこのベスナルグリーンに住んでいた家族は、密輸を行っている盗賊の一味で、本当の親ではありませんでした。そして、レミはこの家を逃げ出し、再びリトルハンプトンという港を通ってフランスへ戻り、今度は水路沿いにセーヌ川を通り、そして運河に沿ってずっと行きまして、シャロン・シュル・ソーヌという所を通り、スイスへと入っていきます。

これは、前に自分がミディ運河の辺りで世話になったミリガン夫人こそが実は自分のお母さんであり、アーサーが弟であったという、ちょっと考えたらあり得ないような偶然が途中で分かったためなのですが、ずっとその足跡、白鳥号という船を追って、水路を旅していくわけです。そしてついにはヴヴェというスイスの街で、ミリガン夫人と弟のアーサーと再会します。

この物語は家族がすっかり再会し、イギリスのミリガン夫人の故郷である大きなお城に戻り、幸せになったレミが過去を思い出して、自分の半生を語るという一人称の語りで語られています。何もかもが上手くいくわけで、アーサーは友人マチアの妹と結婚しますし、レミは、花作り農家の娘であった誠実な女の子と結婚し、さらに彼は実はイギリスの伯爵家の跡継ぎ息子で、その跡目相続の騒動に巻き込まれたために捨て子にされていたということが判明する貴種流離譚になっています。筋は本当に都合良過ぎるくらい都合良くて、そんなことがあり得るのかという感じですし、フランスの地理を教えるにしては、レミの通った道

のりはフランス全土を回っておらず、ただ、同じ道を繰り返しているので、あまり編集者の意図にはそぐわなかったようです。

そしてこの物語の中で、ダイジェスト版ではやや省略されがちなところとしては、厳しく美しい自然描写であり、農業や炭鉱業の危険であり、大都会の暗部や浮浪児の集団を使う親方制度の実態が挙げられます。

―セドリックの旅

そして、今度は世界地図を出さざるを得ないのですが、２番目に挙げました小公子セドリックの旅は、まずは、19世紀末のニューヨークから始まります。アメリカは階級制のない社会で、セドリックは食料品店の店長さんや靴磨きのディック、りんご売りのおばさんなどと仲良しの少年ですが、突然イギリスから、弁護士がやってきて、あなたは爵位継承者だと告げられ、母とともにイギリスへ渡ることになります。ですから彼らは大西洋を渡り、恐らくリバプールに着いたものと思われますが、その後、具体的なイギリスの地名は出てきませんので、このセドリックのおじいさんのお城がどこにあったのか、ということは定かではありません。そしておじいさんはアメリカが大嫌いですので、セドリックのお母さんを決して寄せつけようとしません。

しかし祖父と孫の間には愛情が生まれまして、頑固なおじいさんの心を無邪気なセドリックがだんだんに溶かしていきます。伯爵領の大きな農地では、小作人が非常に貧乏な暮しをしています。本来は伯爵領の小作人の福利厚生は領主の責任であり、そしてその精神的支えは牧師の責任なのですが、伯爵は勝手気ままに生きてきて、全く小作人の福祉には気を配っていませんでした。ところが、セドリックの階級を知らぬ無邪気さと、そしておじいさんは良い人だ、と信じこんだあまりの無知ぶり（と言っていいかもしれません。）のお陰でアメリカ嫌いの伯爵もだんだんに心を動かされ、そしてセドリックの母を認め、一緒に暮らすことを決心します。

さらにニューヨークにおいてセドリックの大の仲良しだった食料品店のホッブスさんも、一旦イギリスに来てみますと、イギリスの暮らしがえらく気に入ってしまって、「やあ、やっぱり歴史のある国はいいなあ。」と、イギリスに住むことになってしまう、という、アメリカとイギリスの仲直りの話でもありました。

この時代、実はイギリスから独立したアメリカが、国力をつけて強くなりつつあった時代で、歴史のあるイギリスと自由な国アメリカは、何かと反目を起こしていたわけですが、この物語は、気がついてみると、イギリスにとって息子であったアメリカが、いつの間にか自分より背の高い息子になってしまい、そして孫の代になってようやく二つの国は仲良くなることができた、という情勢をも表しているわけです。この二つの国の和解を導いたということで、バーネット夫人は当時のイギリス首相のお褒めの言葉をいただいたそうです。

―ペリーヌの旅

さて、３番目の『家なき娘』、こちらは19世紀末のフランスが舞台になるのですけれども、そもそもこのペリーヌという主人公のお父さんは、遊び好きであったところを、そのお父さん、つまりペリーヌのおじいさんに、「お前なんか勘当する」というような感じで、黄麻（ジュート）（黄色い麻と書きまして、コーヒーの豆が入っている荒い麻袋がありますが、あれがジュートです。）の買い付けにインドへ行かされました。つまりおじいさんの工場はジュートを扱って大きくなったものなので、原材料を買い付けに行って来いというわけで、息子をインドへ飛ばしたわけです。ところがそこで暮らしているうちに、インド人の美人の娘さんと恋をして結婚してしまいます。

この結婚した相手が、インドの中でもカースト制度最上位にあるバラモン階級の娘さんで、しかもキリスト教に改宗していて、英語が堪能であった、という背景がありました。ところがキリスト教に改宗するということは、カーストを失うということでもありますので、このキリスト教に改宗した時点で、彼女、ペリーヌのお母さんはもうインドに帰属することができなくなってしまっています。そして一家は家へ帰ろうと馬車で写真を撮

りながらダッカ、今ではインドというよりはバングラディシュになるのでしょうか、こちらのほうから一生懸命旅をしてきた、というお話です。写真はこの時には非常に新しい技術ですから、旅回りの馬車がカメラを積んで、そしてあちこちで肖像画を撮っては現像してお金を儲けるというような職業が成り立ったのですね。

恐らくは、カイロでスエズ運河を通り、地中海へ行けばフランスはすぐで、それに楽なのですが、ここまでは来たけれども、お金が尽きてしまって、ロバを買ったお父さんとお母さんは、ギリシャやクロアチア、ドイツを経由してパリに入った、という旅をして来たらしいのです。というのは、物語は、先ほどもお話しましたとおり、パリに入るその門の所でお母さんが病気にかかって死んでしまうという場面から始まっているからです。この陸路の旅の途中で、お父さんは亡くなってしまっており、ペリーヌはたった一人、パリからおじいさんのいるマロクールへ旅をしなければならない、ということになってしまいます。

話はパリのサン・ドニ辺りから始まっているのですけれども、実は、ペリーヌが自分自身で歩いた距離は大したことがなくて、レミがほとんどフランスを横断しているのに比べ、シャンティの辺りまでしか歩いておらず、その後、善意の人に汽車賃を出してもらって汽車でアミアンまで行っています。けれども、『家なき子』とは違って、ペリーヌは無一文になってしまって、ほとんどお金を持っていなかったというところが大きな違いです。彼女にはお金を儲ける術は全くなく、ロバも馬車も写真機も、全部売り払ってしまい、ただ、お母さんの持っていた結婚証明書だけを頼りに、この道を歩いていくわけです。最初持っていたお金は、贋金だろうということで、パン屋のおかみさんに取り上げられてしまい、彼女はたった6スーがポケットに入っているだけという状況で、嵐が来たりするような、様々な自然の厳しさの中、また夜明けの美しい小鳥のさえずる美しい自然の中、ようやっとマロクールにたどり着くということになっております。

後半部分はたどり着いた工場の中で、名前をオーレリーと変えて女工として働き始めた彼女の生活が描かれます。そして女工の生活の厳しさ、機械で作業をする危なさ、そして住環境の悪さ、といったようなものが描かれ、これが社会的にアピールする点となっていたわけです。そして興味深いのは、この『家なき娘』の中では、イギリスがいち早く産業革命が進んだ国として、技術を提供する国であるということ、そして、インドがジュートという原材料を産出する植民地であるということ、そして遅れてきた工業国（主として農業国なので）であるフランスで成功したヴュルフラン・パンダヴォワーヌというペリーヌのおじいさんが、息子を勘当したことを後悔し、その行方を捜しているその最中に、孫娘であるペリーヌが入ってきて、そして静かにおじいさんの傍で名乗り出るタイミングを待つ、というこのスリルとサスペンスが、同時進行形で書かれているところです。

インドの嫁や混血の孫なんか絶対に認めない、と言っているおじいさんの傍で、いつ名乗り出るのがベストなタイミングかと計るペリーヌの様々な思惑、そして、英語の読み書きが堪能であったことから、イギリス人の技術者からも翻訳を任され、おじいさんの秘書にまで登り詰めるという、ペリーヌの能力が買われた点、そしてその後、盲目のおじいさんへもたらされた手紙を代読するという役割を担いながら、自分の父の消息を知らせる手紙を、自らが翻訳しておじいさんに聞かせるハラハラするような展開、そして最後に、実はその孫というのは私ですとカミングアウトする、それまでの彼女の手練手管と言いますか、非常に巧みなやり方が描かれているのが『家なき娘』の物語ということになります。そして、盲目だったおじいさんも、ようやく孫娘に巡り会ってからは、目の手術を受ける決心をし、そして目が開いて、見えるようになったときに目の前にいたのは、息子そっくりな孫娘だったということで、この頑ななおじいさんも心を和らげ、領主としても雇用人の福利厚生に気を配るようになりました、とハッピーエンドで終わります。孫がおじいさんの心を和らげるという点では、『小公子』と大変似ていることが分かると思います。

―セーラの生い立ち

それから４番目の『小公女』ですけれども、セーラ自身の旅は描かれておらず、物語は終始ロンドンの中で起こります。そもそもセーラとその父はインドのボンベイで暮らしていたイギリス人の一家で、セーラのお父さんは軍人でした。その頃インドはイギリスの植民地でしたので、貿易商や軍人、それから官吏などが大勢家族と共に住んでいたわけです。そして、セーラのお母さんはセーラが赤ちゃんの頃に亡くなっていましたが、実はフランス人で、そのためにセーラはバイリンガル、英語もフランス語も同じようによくできるという、そんな出自を持っていました。

その頃、インドで生まれたイギリス人の子どもは、旅ができるくらいの年頃になりますと、インドの気候は子どもの体に良くないからとか、またはイギリスで教育を受ける方がいいというような理由で、イギリスへ渡り、寄宿制の学校や親戚に預けられるのが習わしでした。実際にそういう憂き目にあった作家に、ラドヤード・キプリング、それからルーマー・ゴッデンなどがおります。セーラも同じように年頃になり、その健康を気遣った父に連れられて、恐らくは海路スエズ運河を通って、イギリスへたどりついたものと考えられます。

ロンドンの寄宿学校に預けられたセーラは、フランス人の母親を持っていましたから、フランス語は得意で、特待生の扱いを受けるのですが、実はフランス語ができないということがコンプレックスであったミンチン先生の反感を買ってしまいます。彼女は単にお金持ちだからということで、ちやほや甘やかされていたわけですが、13歳の誕生パーティーの日、父親の投資していた友人のダイヤモンド鉱山が破産し、父親も死んでしまったということが知らされ、一挙にセーラは学校の下働きとして屋根裏部屋で寝起きし、いじめられるという待遇になってしまいます。それでもお嬢様らしさを失わないセーラは、隣に越してきたインドから来た紳士のインド人の召使いにヒンズー語で話しかけ、共感を覚えます。この場合もやはり、セーラの語学力が彼女の将来を開く鍵となっているのが興味深いことだなと思います。そして、その隣に越してきたインドから来た紳士こそセーラの父の友人であり、実は破産したと思われていたダイヤモンド鉱山は回復していて、そしてその回復した財産を持ってセーラのことを一生懸命探していたという事実が判明します。

そしてセーラは彼に引き取られ、お嬢様の地位に返り咲くのですが、貧しかった時のことを忘れず、ロンドンの浮浪児にパンを自ら恵むなどボランティア活動を続けていく、という結末になります。ですからこれもまた、富める者が慈悲の心を持って貧しい者に施せ、という19世紀的な社会主義を根底に持っていたことが分かると思います。

―物語をめぐる世界情勢

これでこの４作品が、フランス、イギリス、アメリカ、インドの４か国と関連があると申し上げた訳がお分かりかと思いますが、インドは産業革命の原材料の提供地であり、植民地であり、ここに住めばフランス人もイギリス人も、本国では大したことがなくても、大富豪としての生活ができましたし、インド人の使用人を使って贅沢に暮らしていました。ペリーヌの母親はバラモン階級のキリスト教化した女性であるからこそ、フランス人と結婚しましたけれども、その結婚した相手の父親からは認められることがありませんでした。

そしてイギリスは、いち早く産業革命が終わり、世界一の工業国として栄えていたのですが、都市のスラム化という深刻な問題を抱えていました。またフランスは、イギリスに一歩遅れて工業が起こりましたので、イギリスからは技術を、インドからは材料を輸入していたわけですが、今でもそうですがフランス人というのは、英語を学ぶのを非常に嫌っております。フランスに行くと英語はほとんど通じない、もしくは、通じても通じないふりをされるというのは現在に至るまで残っている傾向で、フランス人はフランス語を非常に大事にしております。ペリーヌのおじいさんの工場でも英語ができる技術者が一人しかおらず、その人が病気になってしまったために、ペリーヌに通訳の役が回ってきたというわけです。現在に至るまで、フランスのラジオは放送されるポップスの中でも英語の曲の割合を法律で決めているそうで、

アメリカの文化が入り込んでくるのをそこでせき止めているというようなフランス人の母国愛もあって―日本人の英語コンプレックスもいい加減にして、こういうふうに日本語を大事にして欲しいなと思うところもありますが―、フランスには英語を話せる人が少ないです。

ところがインドの方は物凄い多言語国家でありまして、統一言語というのが非常に難しい。多数派はヒンドゥー語、ウルドゥー語などですけれども、その他方言を含めて非常にたくさんの言葉がありまして、この国で共通語を使うとすると英語にせざるを得ないというような事情も、この辺りから垣間見ることができます。

さて、フランスは基本的に農業国なのですが、ロンドンや、またはニューヨークの方から見ますと、パリはやはり花の都、という憧れがありまして、フランスはファッションリーダー、というのも、19世紀の辺りから続いております。実は『小公子』、『小公女』の作者であるフランシス・イライザ・ホジソン・バーネットは、結婚するときに、フランス製のウェディングドレスをわざわざ取り寄せましたけれども、途中で船が事故にあったらしくて届かず、普段着で結婚式を挙げざるを得なかったという話も残っております。そして、物語の中にもセーラは、フランス製のドレスや下着を着ているので級友から非常に羨まれた、という話が含まれております。そしてフランス語は、イギリスではお嬢様の教養として欠かさざるべき科目であった、ということもありました。

そして、アメリカとイギリスとの関係を見ますと、先ほど『小公子』のところでお話ししたとおり、イギリスから独立してしばらく経ち、近代的には成長しておりましたけれども、イギリスの産業革命のコアになっていた紡績工業に南部の綿花など原材料を供給していた、という事実もありました。そして、アメリカで南北戦争が起こったとき、この綿花の供給ルートが閉ざされてしまい、そのためにイギリスのマンチェスターでは、綿花飢饉（Cotton Famine）と呼ばれるような恐慌が起こりました。まさにこの時代にホジソン一家は父を失い、職業を失って、アメリカへ移住したわけです。アメリカへ行けばきっと一旗揚げられると皆がそう思っていましたけれども、ホジソン一家がアメリカへ行ったときには、テネシー州は南北戦争の後で国土は荒れたまま、何も仕事は無かった、というところから、16歳の少女フランシスは、なんとかペンとインクで職業を立てていこうと、ロマンス小説を書き始めた、作家修業を始めた、という事実もありました。

このように、この国々は四つの物語、そして作者を通しても、緊密な関係にあったということがお分かりかと思います。そしてその後、アメリカはやはり民主主義の国として大きく成長し、ヨーロッパ旧大陸に対して新大陸と名乗り、非常にプライドを持つのですけれども、その半面、歴史の中で伝統のなさをコンプレックスに思っておりました。ですから、『小公子』のような物語が現れたとき、実はうちの息子ももしかして先祖をたどるとイギリスの伯爵の跡取りかも、みたいな夢がありまして、お陰で『小公子』はベストセラーになりました。読者は実は男の子というよりはお母さん層であった、というような事実もあったようです。アメリカの母親たちは皆こぞって自分の息子の髪を伸ばし、巻き毛にし、レースひらひらの襟が付いたベルベットのフォントルロイ・スーツというのを着せて装わせ、少年たちに非常な嫌悪感を持って迎えられました。そしてこの『小公子』がベストセラーになったその次の世代、このスーツに悩まされた男の子たちが大人になった時代に、『小公子』の人気はがた落ちになってしまい、このスーツは、フォントルロイ・フォビア（恐怖症）と呼ばれるほど、女々しさとマザコンの代弁者となってしまいます。先ほどお話したエロル夫人とセドリックが、一心同体の一人二役であったメアリー・ピックフォードの映画は、まるでそれを予見していたかのように、母子一体性を図らずも演出していたというわけです。

これがフランス、イギリス、アメリカ、インドの、その時代の重要な社会背景であります。

少し前の時代には、フランスではフランス革命があって、一応、貴族というものがいなくなっていますので、貴族の御曹司といったらそれはイギリス、ということになるわけで、『家なき子』も『小

公子』も、貴族のおじいさんの所、またはお母さんの所へ行くとなると、イギリスへ行くわけです。またマリー・アントワネットは、フランス革命中に処刑されてしまいますが、このフランス革命は、19世紀のイギリスのブルジョワ階級には、大変危機感を持って迎えられており、自分たちの所まで革命が波及してきたら危ないと恐れられていたということがあります。そのため、19世紀のイギリスでは、マリー・アントワネットは、暴徒に囲まれて首を切られても最後まで毅然とした態度を崩さなかった悲劇の女王として受け入れられておりまして、今私たちが思い出すような贅沢好きの「パンがなければケーキを食べればいいのに」といったようなイメージとは違うものとして受け取られていたようです。そのため小公女セーラはいくら貧しい身の上になってしまっても、自分はマリー・アントワネットを目指すのだというような形で、ロールモデルにしていたわけです。

アメリカの独立戦争、イギリスの産業革命は18世紀から19世紀の初めに終わっております。そして1877年までは、イギリスはインドを東インド会社という形で会社経営していましたけれども、この年にインド帝国が成立し、ヴィクトリア女王が皇帝を兼ねるという直接統治の時代を迎えています。そして、これよりも少し前ですが、スエズ運河が開通したということで、インドとヨーロッパの間の行き来は非常に便利になったといったような状況もありました。

そして４作ともが、金持ちの人が優しく慈悲深く、ボランティア精神を持っていれば世界は上手くいく、というような運動の背景の下に書かれたということもお話ししたとおりです。その他、児童労働や学校制度、そして言語の問題や識字の問題、こういったような問題も４作を読むとよく分かります。例えば『家なき娘』のペリーヌは、フランス語をすらすら話せるのですが、読み書きはできませんでした。おじいさんの秘書になってから、フランス語の家庭教師を付けてもらって、読み書きを習うということになっています。それから労働者の福利厚生問題も深刻な問題でありましたし、また、イギリスにおいては爵位継承も大きな問題となっていました。だんだん、この爵位を持っている人たちもお金持ちとは限らなくなっていきまして、貧乏貴族がお金持ちのアメリカ人と結婚するというような関係も生まれてきていたようです。これは、アメリカ人は爵位が欲しい、イギリス人の貴族は貧乏なので、アメリカの成金のお金が欲しい、というような非常に都合のいい所で成り立つ結婚関係だったのですが、これもバーネットの大人向けの小説にはよく出てくるテーマでした。

それからインドにおいてはカースト制度という、イギリスにおける階級問題のようなものがあったということ、それからジュートの産地がダッカであったとか、イギリスの技術とインドの原材料、フランスの工場がペリーヌの物語の背景にあったなどということはお話ししたとおりです。そして当時は、水路が非常に重要な交通の手段でありまして、イギリスでも運河は非常に大きな交通の手段であったのですが、船で運ぶというのは私たちが思っているよりもずっと楽に重い荷物を運搬することができたわけで、レミの旅が街道とともに水路もたどっているということが、とても興味深いことだなと思います。

そしてアメリカとイギリスはこのように、お互いがお互いを羨み、またはコンプレックスを抱く関係にあった、ということも述べておきたいと思います。

6.　現代の読者

今回の講座を引き受けるに当たりまして、私は大学の３年生のゼミ、つまり21歳の女の子と、それから大学院の学生たち、これは25歳から上は60歳といったような人たちに、この作品を読み比べてもらいまして、感想を聞いてみました。これが現在の読者の反応ということになります。

21歳では子どもとは言えませんが、私から見ると十分子どもなので、その反応を見て、非常に面白いものを感じたのです。

彼女たちの印象では、まず『家なき子』は長過ぎる、３冊も読んでいられない、しかし筋は一本なので追いやすい、というわけです。ただレミについていけばいいだけなので、単純といえば単純です。途中で炭鉱の話になったり、農業の話に

なったりするのは『レ・ミゼラブル』とよく似ていまして、あれも延々と地下道の話が入ったりしますが、そういうところを飛ばせば非常に単純な話ではあります。

そして『小公子』は大学の3年生には評判が良かったです。母と子の愛情にじんと来た、とか、おじいさんの心を溶かす孫息子が感動的だった、など。でも大学院生たちに聞くと、これはちょっとおセンチであり過ぎる、またはこのセドリックという少年があまりにもいい子すぎてちょっと鼻につく、というような感想が見られました。けれども、読ませるという点においては、バーネットの筆力には凄いものがありまして、いかにも出来過ぎだよ、と言いながらもつい読んでしまう、というところがマロもバーネットも一流か、と思われたようです。

そして意見が分かれたのが『小公女』でして、これは学部の3年生では、お金持ちのときにはちやほやして、お金がなくなるとそっぽを向いてしまうというようなお金中心の価値観にはどうもついていけない。それから、つい最近、小学校で教育実習をしてきた身としては、もしセーラのような生徒がいたらすごく嫌だ、あんな生意気な女の子がすらすらフランス語とか英語とかで喋りだしたら自分は立場がない、とミンチン先生の身になって、セーラのことを嫌がる子が多かったという事実がございました。けれども、大学院生になりますと、いろいろなことに鑑みて、この小公女セーラは実は非常に複雑な性格の持ち主であり、小公子のセドリックよりも奥行きのある人物像になっている、というような感想が見られまして、これはちょっと面白いと思いました。また、どちらにも共通していたのは、インド人の召使いが屋根沿いに来て、セーラの貧しい生活をのぞき見していて、そしていろいろな贈り物を持ってきてくれるくだりは、ストーカーみたいで気持ち悪い、という大変現実的で現代的な感想でした。

そしてこの両方の年齢層の人達に一番受けましたのが『家なき娘』でして、やはり自分の力で前向きに生きる少女の物語は非常に評価が高かったです。『家なき娘』の、一つ一つ工夫を重ねながら自分だけの小屋を作り上げて、島の中に自分のお城を作り上げるところとか、それからおじいさんの反応を見ながら少しずつ少しずつ、そのおじいさんに近付いていく様子は、本当にわくわくする、そして英語力を後ろ盾に、キャリアを積み自分の力でのし上がっていく女の子が、現代にも通じる非常に力強い姿である、ということで、『家なき娘』は両者から物凄く評価を受けたことを御報告しておきたいと思います。

それではこの辺で、私の話は一旦終えさせていただきますが、参考文献の中に挙げておきました佐藤宗子さんの『家なき子の旅』には、この『家なき子』という作品が日本で翻訳を通してどのように受容されたか、という話が載っておりまして、翻案を通じて主人公が日本人になったり、女の子になったり、そしていじめられることによって、単なる母探しの物語になってしまったり、といったような紆余曲折を追っております。

また、自分の著作で大変恐縮ですけれども、『少女小説から世界が見える：ペリーヌはなぜ英語が話せたか』という本の中では、いくつもの少女小説を扱っていますが、その中で『家なき娘』を扱った章に「ペリーヌはなぜ英語が話せたか」という題名で、インドやフランス、イギリスの関係からペリーヌの物語を読み直してみた私の論文が載っておりますので、また何かの参考にしていただければと思っております。

（かわばた　ありこ　日本女子大学家政学部
児童学科教授、国立国会図書館客員調査員）

「歴史とジェンダーをめぐって
――バーネットの『小公子』、『小公女』、マロの『家なき子』、『家なき娘』の場合」紹介資料リスト

（本館）→国立国会図書館東京本館で所蔵
※→国際子ども図書館及び国立国会図書館東京本館で所蔵
デジタル化図書（限定）→「国立国会図書館デジタルコレクション」（館内又は図書館向け送信参加館限定公開）
デジタル化図書（インターネット）→「国立国会図書館デジタルコレクション」（インターネット公開）

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号	デジタル化
1	家なき子. 上	エクトール・マロ 作 二宮フサ 訳	偕成社 1997. 2	Y9-3464	
	家なき子. 中	エクトール・マロ 作 二宮フサ 訳	偕成社 1997. 2	Y9-3464	
	家なき子. 下	エクトール・マロ 作 二宮フサ 訳	偕成社 1997. 2	Y9-3464	
2	家なき児	エクトル・マロ 著 鈴木三重吉 訳	角川書店 1977. 10	KR164-63 （本館）	
3	家なき娘. 上	エクトール・マロ 作 二宮フサ 訳	偕成社 2002. 2	Y7-N02-15	
	家なき娘. 下	エクトール・マロ 作 二宮フサ 訳	偕成社 2002. 2	Y7-N02-15	
4	家なき娘：アンファミーユ. 上	エクトル・マロ 作 津田穣 訳	岩波書店 1941. 8 (第4刷:2001. 7)	KR164-G38 （本館）	デジタル化図書 （限定）
	家なき娘：アンファミーユ. 下	エクトル・マロ 作 津田穣 訳	岩波書店 1941. 11 (第4刷:2001. 7)	KR164-G38 （本館）	デジタル化図書 （限定）
5	小公子	バーネット 作 坂崎麻子 訳	偕成社 1987. 9	Y8-4668	
6	小公子	バアネット 著 若松賤子 訳	岩波書店 1953 22刷	933-cB96s-W （本館）	デジタル化図書 （限定）
	小公子	バアネット 作 若松賤子 訳	岩波書店 1994. 10	KS152-E648 （本館）	
7	小公女. 上	バーネット 作 谷村まち子 訳	偕成社 1985. 8	Y8-2741	
	小公女. 下	バーネット 作 谷村まち子 訳	偕成社 1985. 8	Y8-2741	
8	セーラ・クルー物語：英和対訳	バーネット 著 若松賤子 訳 木下祥真 編	内外出版協会 明37. 11	138-219 (洋) （本館）	デジタル化図書 （インターネット）
9	小公子	フランシス・ホジソン・バーネット 作 脇明子 訳	岩波書店 2011. 11	Y7-N12-J28	
10	小公子	バーネット 作 吉田甲子太郎 訳	岩波書店 昭和29	児933-cB96sY	デジタル化図書 （限定）
	小公子	バーネット 作 吉田甲子太郎 訳	岩波書店 1995. 2	Y9-1945	

11	小公子セドリック	バーネット 著 グラハム・ラスト 絵 西田佳子 訳	西村書店 2010. 2	Y9-N10-J91	
12	小公女	フランシス・ホジソン・バーネット 作 脇明子 訳	岩波書店 2012. 11	Y7-N12-J353	
13	小公女	バーネット 著 伊藤整 訳	新潮社 1953	933-cB96s2-l (本館)	デジタル化図書 (限定)
	小公女	バーネット [著] 伊藤整 訳	新潮社 2004. 12	KS152-H198 (本館)	
14	小公女	フランシス・ホジソン・バーネット 作 高楼方子 訳 エセル・フランクリン・ベッツ 画	福音館書店 2011. 9	Y9-N11-J287	
15	リトルプリンセス : 小公女セアラ	バーネット 著 グラハム・ラスト 絵 秋川久美子 訳	西村書店 2008. 12	Y9-N09-J49	
16	リトル・プリンセス : 小公女ノベライゼーション	ダイアン・モレソン 著 フランシス・H. バーネット 原作 清水奈緒子 訳	文渓堂 1995. 11	KS164-G35 (本館)	
17	家なき子レミ	箱石桂子 [ノベライズ] エクトル・マロ 原作	竹書房 2005. 2	YU81-H411	
18	ペリーヌ物語	三田ゆいこ [ノベライズ] エクトル・マロ 原作	竹書房 2004. 10	YU81-H360	
19	小公女セーラ	三田ゆいこ [ノベライズ] フランシス・ホジソン・バーネット 原作	竹書房 2004. 7	YU81-H307	
20	小公子セディ	箱石桂子 [ノベライズ] フランシス・ホジソン・バーネット 原作	竹書房 2004. 6	YU81-H299	
21	「家なき子」の旅	佐藤宗子 著	平凡社 1987. 6	KE177-63 ※	
22	少女小説から世界が見える : ペリーヌはなぜ英語が話せたか	川端有子 著	河出書房新社 2006. 4	KE177-H24 ※	

レジュメ

資料紹介
「少年少女 SF 小説全集の興亡」

国際子ども図書館資料情報課長

西尾　初紀

1. 幼年期の始まり（1950年代後半〜1960年代前半）
   ジャンル名の模索：冒険、空想、科学、“推理・探偵”ものとの同居
   許容の背景：戦後復興と工業化、空想科学映画の隆盛

2. “SF”登場（1960年代後半）
   日本での下地：邦人作家と日本 SF 作家クラブ
   大衆化への発展展開：怪獣ブームとアポロ月面着陸

3. 百花繚乱・ビッグバン（1970年代）
   出版社のドル箱企画：各社競合、続編・再刊
   マニエリスム：“怪奇・恐怖”ブームとの同調

4. 凋落への兆し（1980年代）
   売り出し方の模索：メディアミックス、他ジャンルとの再融合

5. 失われた“冬”の時代（1990年代）
   新企画「0」の年月

6. 2001年復活への旅（21世紀）
   大もての“ファンタジー”、煙たがられる“SF”
   過去の読者に向けて
   未来の読者に向けて

資料紹介
「少年少女 SF 小説全集の興亡」

西尾　初紀

はじめに

平成24年度の本講座「イギリス児童文学の原点と展開」ではファンタジーを取り上げましたが、今回のテーマは「英米児童文学をめぐる時代と環境」ということで、私たちの世代が子どもの頃に熱中して読んだ SF（サイエンス・フィクション）物語について、ファンタジー全盛の現在に至るまでの歴史をひもといてみました。といっても、単行本で出たものを全て追いかけるのは難しいので、児童向け全集に絞ってその歴史を追ってみました。

1.　幼年期の始まり[1]
（1950年代後半～1960年代前半）

日本で初めて編まれた児童向け SF 全集企画が1956年の「少年少女科学小説選集」で、途中で出版社名が変わったのが改称なのか、版権譲渡なのか分からないのですが、最後は銀河書房から出版されました。これはとても売れたらしいのですが、この出版社は潰れてしまいます[2]。しかしこれをきっかけに、大手出版社や児童書出版社から、毎年のように全集が編まれます。

ただし、まだ SF という言葉が一般的でないのと、SF ずくめの全集は売れるかどうか分からなかったので、冒険小説や推理小説の全集の中に混ぜ込んだケースが多かったようです。『ロビン・フッドの冒険』（*The Merry Adventures of Robin Hood*）や『ゼンダ城の虜』（*The Prisoner of Zenda*）などの冒険活劇の中に押し込めたような売り出し方でした。

もう一つ特筆すべきことは、この頃の全集は英米以外、特にソ連の児童文学も収録対象にしていたということです。年表には「ベリャーエフ少年空想科学小説選集」という個人全集が入っています。残念ながらベリャーエフ（А. Р. Беля́ев, 1884–1942）の本は今では書店で見かけなくなってしまっているのですが、当時は、SF 全集には必ず 1 冊は入っていたくらい、ポピュラーな作家でした。

1950年代に SF 本が出回り始めたきっかけは何であったかを類推してみます。レジュメでは「戦後復興と工業化」というように表現していますが、この時代は東西冷戦の最中で、核開発や宇宙開発、スプートニク・ショックなど、共産主義勢力と資本主義勢力との間で熾烈な争いが繰り広げられていました。

また、この時代には SF 映画も数多く作られていて、怪物の来襲や宇宙人の侵略をテーマにした作品も多かったのですが、これも同じように東西対立が生んだ危機感が背景にあると考えられていますし、有色人種の中に形成されつつあった知識層や富裕層が、白人社会に入ってくるのを脅威に感じた人たちの心理が働いているという解釈[3]もあるようです。

2. “SF” 登場（1960年代後半）

このような下地があって、1966年に「ジュニア版 SF 名作シリーズ」が出版されました。これはシリーズと銘を打ってはいますが、たった 1 冊し

1 『幼年期の終わり』（*Childhood's End*）アーサー・C・クラークが1953年に発表した長編 SF 小説。

2 後述の『少年少女昭和 SF 美術館』によれば、後発の講談社版「少年少女世界科学冒険全集」との競合に敗れ、売れ行き不振に陥ったという（pp. 32–33）。

3 越智道雄「「宇宙戦争」から「I D 4（インディペンデンス・デイ）」まで：宇宙人映画とアメリカの50年史」（『あなたの知らない㊙怪獣大百科』洋泉社 1997. 1　所収）

か刊行されませんでした。しかしこれ以降、タイトルには空想や冒険に代わって、SF という言葉が入るようになりました。

この 1 冊だけの全集が持つもう一つ象徴的な点は、その 1 冊が星新一さんの作品であったということです。SF という看板が掛かったのと、邦人作家の作品の紹介が同時であったのです。この翌年に出版された「ジュニア SF」シリーズは全て日本の作家の作品で構成されています。皆さんも御存じの『時をかける少女』もこの中に入っています。

SF がジャンルとして認知され児童向け全集も編まれ、その端緒から国内の作品も収録されたことの土台は何であったかということを考えてみます。レジュメに挙げた日本 SF 作家クラブは1963年に結成されています。それに先行し日本 SF 作家クラブとも競い合ったグループ“宇宙塵”の結成が1957年、早川書房の「SF マガジン」が1959年創刊、早川書房のライバル東京創元社の創元推理文庫で創元 SF 部門（のちの「創元 SF 文庫」）が創設されたのが1963年で、大人の世界では下地が整い、今度はいよいよ子どもの世界に SF の紹介が始まったのです。

また1966年というのは、怪獣ブーム、「ウルトラ」シリーズが始まった年でもありますし、翌年にかけて、これは外貨獲得になるということで政府の後押しもあって邦画各社が競って怪獣映画を製作しました。

1968年から1969年には出版界でも各社からいろいろなシリーズが競演するかのように出版されています。レジュメでは1970年代を「百花繚乱・ビッグバン」としたのですが、年表を眺めてみると1960年代の終わりから既にビッグバンは始まっているように見えます。ですが、アポロ11号が月面着陸した、ついに現実が空想物語に追い付いた1969年を一区切りとしてみました。この年、「少年少女 SF アポロシリーズ」が刊行されています。全て月に関する作品を集めたアンソロジーで、この頃のアポロの月面着陸は、世界中の一大関心事であったということが伺えます。

3. 百花繚乱・ビッグバン（1970年代）

1970年代に入ると、新企画を一から練り上げていては需要に追いつかなくなったのか、かつて出ていた本を新装・改装版として再発売するケースが増えてきます。新しい本を増補したケースもありますし、過去の複数のシリーズを合併して新たなシリーズ名を冠して出したというケースもあります。

しかしそんな好景気にも、1970年代の後半にもなると陰りが見えてきます。1970年代の特色としては、マニエリスム（マンネリズムと同一語源で、一定の到達点に達してしまった後、変形や装飾を加えることで新たな表現手段を模索すること。）とも言える傾向が挙げられ、怪奇・恐怖ものとの融合が盛んに行われました。1970年には「世界の名作怪奇館」、1971年から1972年には「世界怪奇ミステリー全集」、1972年に「ジュニア版怪奇サスペンス全集」、1973年には「世界の怪談」と、おどろおどろしいタイトルのシリーズが並び、いずれにも 1 冊ずつ、SF 作品のアンソロジーが組み込まれています。

振り返ると、怪獣ブームが去って、1968年に妖怪ブーム、1971年に第 2 次怪獣ブーム、1973年に変身・巨大ロボットブームがあって、その後は子どもたちが同じ曜日に皆で同じテレビ番組を見ていたという時代は終わりを迎え、興味が多様化し拡散し、ニーズを掘り起こすのが難しい時代になったといえるかもしれません。

4. 凋落への兆し[4]（1980年代）

1980年代になると、今まで綿々と横並びに続いてきた出版が途切れがちになって模索の時代が始まります。

この時期に刊行された「ポプラ社の SF 冒険文庫」は、従来の全集のように多様な作品を収録した企画ではなく、1994年にテレビアニメと映画で公開された『レンズマン』を軸としたシリーズで、同シリーズのメディア展開の一端を担った企画でした。また、1982年の「少年 SF・ミステリー文庫」は、SF とミステリーのタイアップで、毎月 1 回、

4 『終末の兆し』(Beginning of the End) バート・I・ゴードン監督、1957年の怪獣（巨大バッタ）映画。

SF 1 冊とミステリー 1 冊ずつを同時に配本していたものです。SF の一枚看板では売れない時代に入ったことを示しているようです。

5. 失われた“冬”の時代（1990年代）

1980年代に既に陰りは見えてきていますが、1990年代になると、以前出ていたものの改題刊行が 1 件ある以外、全く新しい企画はなくなってしまいます。この時代を「冬の時代」という人もあるようですし、1990年代で SF 自体の役目がもう終わってしまったと悲観する人もあるようです[5]。

しかし映画の分野を見渡してみると、『バック・トゥ・ザ・フューチャー PART3』(1990年) や『ターミネーター 2 』(1991年) のように大人も子どもも楽しめるような SF 映画が公開されて観客動員数を稼いでいた時代なので、世界的に見れば SF がそれほど飽きられていた訳ではないのです。ただし、ほとんどが1980年台にヒットした作品の続編的なものでしたが。1990年代が“冬”の時代になってしまったのは、日本の出版事情の何か特殊なところがあるのかもしれません。

6. 2001年復活への旅[6]（21世紀）

そんな空白の時代を経て21世紀に入ると、新しく復活の兆しが見えてきます。先にも触れた星新一さんの、『ショートショートセレクション』が2001年に発行され、再び新たな呼び水になります。

星新一さんの作品が持つ、世代を超え時代を超えて読み継がれる普遍性に関しては既に指摘されている[7]ところではありますが、ショートショートであるがゆえ余り細かく書き込まれていないため、いつまでも時代遅れにならないところが最大の要因で、それがゆえにいつの時代にも、どの世代にも再発見され続けるのでしょう。

これをきっかけにしてか、出版社はいろいろな企画を練り始め、2010年前後に「ボクラノ SF」と「筒井康隆 SF ジュブナイルコレクション」が出されましたが、どちらも第 1 回配本の 5 冊だけで、後が続きませんでした。SF という言葉がタイトル名に入っているだけで敬遠されるような風潮が生まれていたようです。2003年に始まった「冒険ファンタジー名作選」は、中身は SF 作品ばかりなのですが SF の看板を掲げず、まるで1950年代にタイムスリップしたかのような販売戦略がなされています。かつて使われた空想・科学・宇宙という言葉の座に据えられるのが、ファンタジーであることが今という時代を象徴しています。

このように、SF の本を売るというのは、もう今ではかなり難しいことになってしまったようです。ここで別表（p. 97参照）に注目していただくと、右上の方に離れ小島のようにぽつんぽつんとあるのが、先ほど御紹介した『時をかける少女』が入っていた「ジュニア SF」で、何と45年ぶり (2013年) の再刊です。その下あたりの「創作子ども SF 全集」も27年ぶり（2006年）の再刊です。ただし、いずれも予約限定復刻という方法で刊行され、書店には並びませんでした。昔、買いたくても全巻を揃えられなかった人の大人買いを狙って発刊されたものだと思われます。今やこのような本を買ってくれるのは、かつて SF に親しんでいた「昔の」少年少女しかいないという状況なのかもしれません。

今と未来を生きる少年少女たちに SF の面白さを伝えようとする企画はもう途絶えてしまうのかと思われたそんな中、今年（2013年）になって、岩崎書店から全 9 巻「21世紀空想科学小説」が発刊されました。この企画は SF 作家協会50周年とのタイアップで、創刊の辞として「科学はめざましく発達したにもかかわらず、それを踏まえた新しい SF が子どもに向けてあまり書かれていませんでした」[8]と書かれています。21世紀という言葉はもはや未来を象徴する言葉ではないのですが、これをタイトルにあえて使っているということ

5 『日本経済新聞』1997年 2 月 9 日「国内 SF、氷河期の様相：未来予見の目欠け、袋小路」ほか、赤木後述書（注 7 ）では「70年代のフィリップ・K・ディックでほぼ終わり、90年代、SF はどんどん [存続が] 難しくなっていきました。」(p. 109) と断じている。

6 『2001年宇宙の旅』(2001 : A Space Odyssey) アーサー・C・クラーク原作、スタンリー・キューブリック監督の1970年の SF 映画・小説。

7 赤木かん子著『子どもに本を買ってあげる前に読む本：現代子どもの本事情』ポプラ社　2008. 12　p. 111

8 日本 SF 作家クラブのホームページ、岩崎書店 子ども向け書き下ろし SF シリーズ「21世紀 空想科学小説」刊行に際して http://sfwj50. jp/news/2013/06/iwasakishoten-21seiki-kuusoukagaku-series. html

と、SF という言葉を使わず「空想科学小説」という言葉を使っているというあたりも原点回帰の意図を深く感じさせます。

おわりに

どうして SF がこのように廃れてしまったのかについて、いろいろな分析がなされています。

一つには、そもそも全集という企画が売れなくなっているという実態があります。音楽でも CD というパッケージ商品ではなく、曲単位で売るのが当たり前になっている昨今、全集を揃えて本棚に並べるというのは、時代遅れと受け止められるのでしょう。

もともと子ども向けに書かれた SF というのが、それほどは多くないため、大人向けのものを子ども向けに抄訳したものが多く、それがよろしくないという考え方があります[9]。しかし子どもは好奇心旺盛でちょっと背伸びして大人の世界に憧れを抱く存在ですから、子どもは子どもらしく子ども向けに書かれたものだけ読んでいなさい、というのはいかがなものでしょうか。

サイエンス・フィクションと言いながら、レーザー光線で何でも解決してしまうというのは、荒唐無稽、非科学的だと揶揄する向きもあるようです。ファンタジー愛好家に喧嘩を売るつもりはないのですが、ファンタジーが魔法で何でも片付けてしまうのも五十歩百歩でしょう。

また、同じくファンタジーと比べると、SF はゲームや他のメディアへの展開の親和性が欠けていて[10]、日頃接する機会が少ないジャンルになっているのではないか、という感もあります。改めて映画に眼を向けてみると、ファンタジー映画に負けず劣らず、SF 映画は今でも作られています。もっとも、SF 映画にしてもファンタジー映画にしても、ストーリーの面白さや登場人物の心理描写などの文学性は二の次で、ゲームやアミューズメント・パークめいたものばかりになって、記憶に留まるものが少なくなりました。

SF が大人でもなく子どもでもない人たちの社交界になっていて、子どもには近寄り難い世界という印象が定着してしまった感もあり、これは日本独特の現象かもしれません。

そして、21世紀がまだ未来であったころ、そこに希望が花咲く世界を夢見たのに、いざたどり着いてみると、その先の22世紀につなげるような次の夢を思い付かない、という時代であることが最大の要因のように思えます。

まだまだいろいろな分析が可能だとは思いますが、このまま読み物のジャンルとして絶滅することのないよう、次の世代にも読み手と書き手が引き継がれていくことを願ってやみません。

この11月に平凡社から、『少年少女昭和 SF 美術館』[11]が刊行されます。２年前に出された『少年少女昭和ミステリー美術館』という、江戸川乱歩の「怪人二十面相」などの表紙を集めた本の姉妹編ということです。今日はほとんど本のビジュアルを御紹介することができませんでしたが、この本には詳しく掲載されるようで、その刊行が今から楽しみです。

（にしお　はつき
国際子ども図書館資料情報課長）

9 『昭和少年 SF 大図鑑』p. 110（参考文献参照）

10 大手ネット書店サイトでの『ゲームシナリオのためのファンタジー事典』と『同 SF 事典』のレヴューは、前者に対しては総じて好意的なのに対し、後者には毀誉褒貶あい半ばしている。

11 大橋博之 編著『少年少女昭和 SF 美術館：表紙でみるジュヴナイル SF の世界』平凡社　2013. 11　＜請求記号　YZ-910-オオ＞

参考文献

堀江あき子 編 『昭和少年 SF 大図鑑： 昭和20～40年代僕らの未来予想図』 河出書房新社 2009.7
＜請求記号 YZ902－ホリ＞

増山久明 編著 『NHK 少年ドラマシリーズのすべて：1972-1983』
＜請求記号 KD617-G297＞（本館）

ジュブナイル SF 叢書リスト
http://www.garamon.jp.org/archive/

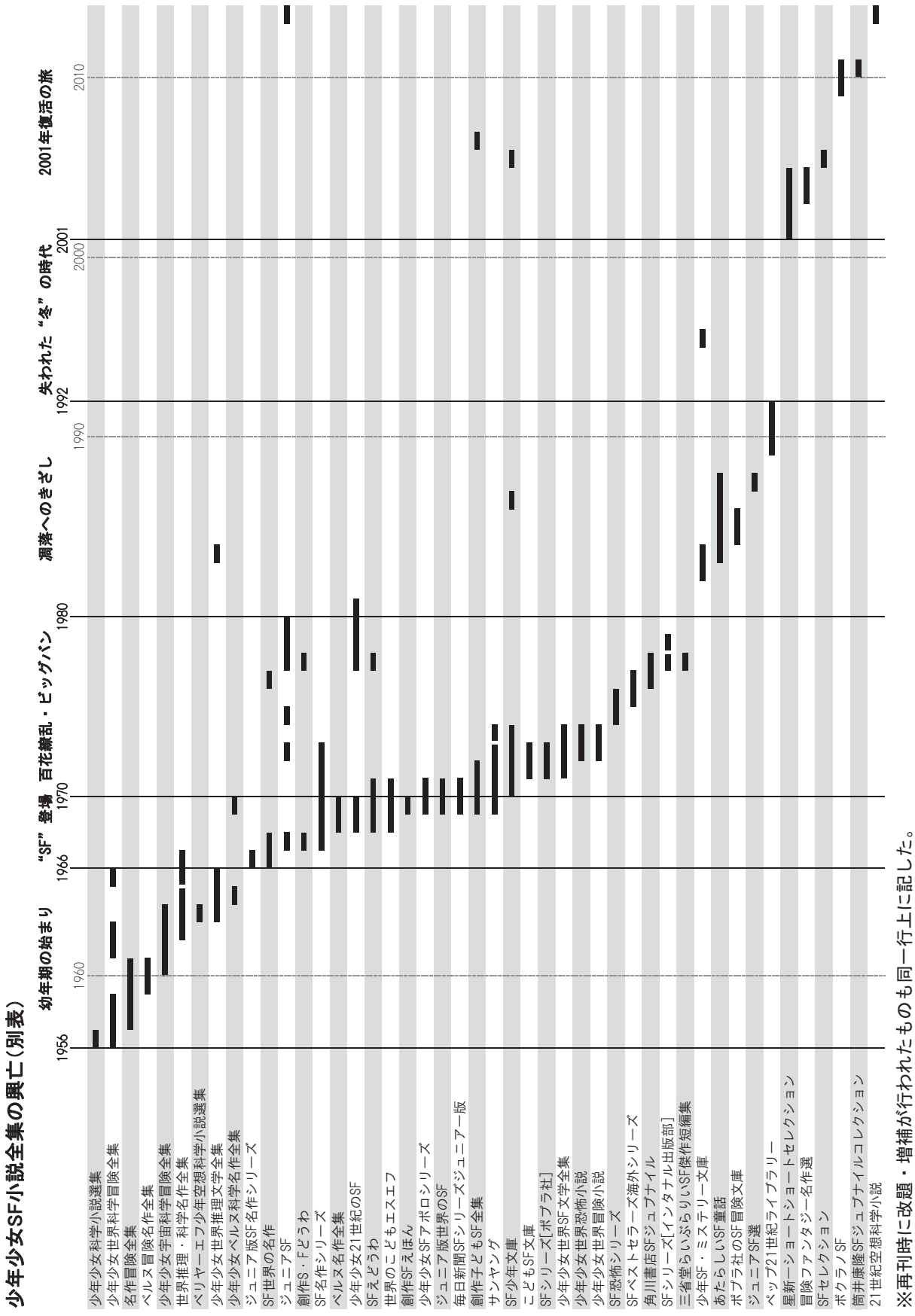
ジュニア版 SF& ミステリー全集刊行リスト
http://homepage1.nifty.com/maiden/jsm/jam00.htm

少年少女空想科学館
http://www.asahi-net.or.jp/~hh8m-iok/boygirl00.htm

翻訳作品集成
http://ameqlist.com/

サンヤングシリーズ全37巻リスト
http://www.geocities.jp/ishikawasei1/YOUNG.html

まんだらけ買取情報 ジュブナイル叢書
http://www.mandarake.co.jp/information/buy/juvenile/



※再刊時に改題・増補が行われたものも同一行上に記した。

「少年少女 SF 小説全集の興亡」紹介資料リスト

（本館）→国立国会図書館東京本館で所蔵
館内限定→「国立国会図書館デジタルコレクション」（館内及び図書館向け送信参加館限定公開）

No.		シリーズ情報（　シリーズ名　/　全巻数　/　出版社　/　刊行年　/　備考　）				
		書名	著者名	出版事項	請求記号	デジタル化
1		少年少女科学小説選集　/　22　/　銀河書房・石泉社　/　1955–1956　/				
2		少年少女世界科学冒険全集　/　35　/　講談社　/　1956–1958　/				
3		名作冒険全集　/　45　/　偕成社　/　1957–1960　/				
4		ベルヌ冒険名作選集　/　12　/　岩崎書店　/　1959–1960　/				
5		少年少女宇宙科学冒険全集　/　24　/　岩崎書店　/　1960–1963　/				
6		少年少女世界科学名作全集　/　20　/　講談社　/　1961–1962　/　少年少女世界科学冒険全集の抜粋版				
7		世界推理・科学名作全集　/　20　/　偕成社　/　1962–1964　/				
8		ベリヤーエフ少年空想科学小説選集　/　6　/　岩崎書店　/　1963–1963　/				
9		少年少女世界推理文学全集　/　20　/　あかね書房　/　/				
	[1]	モルグ街の怪事件ほか	アラン・ポオ 著　久米元一 訳 後藤一之 等絵	あかね書房 1963	児909– Sy9578–[1]	館内限定
	[2]	シャーロックホームズの冒険	コナン・ドイル 著　白木茂 訳　横尾忠則 絵	あかね書房 1963	児909– Sy9578–[2]	館内限定
	[3]	赤い家の秘密	ミルン 作　神宮輝夫 訳　三輪滋 絵	あかね書房 1963	Y7–33–[3]	館内限定
	[4]	アルセーヌ・ルパンの冒険・奇厳城・水晶のせんの秘密	ルブラン 作　那須辰造 訳　和田誠 絵	あかね書房 1963	Y7–33–[4]	館内限定
	[5]	ふしぎな足音	チェスタートン 著　前川康男 訳 原田維夫 絵	あかね書房 1963	児909– Sy9578–[5]	館内限定
	[6]	魔女のかくれ家・二つの腕輪	ディクスン・カー 作　内田庶 訳　三輪滋 絵	あかね書房 1964	Y7–33–[6]	館内限定
	[7]	ABC 怪事件・恐怖の旅客機	クリスティー 著　塩谷太郎 訳　駒崎晶子 絵	あかね書房 1963	児909– Sy9578–[7]	館内限定
	[8]	エジプト十字架の秘密・十四のピストルのなぞ	クイーン 著　亀山竜樹 訳　横尾忠則 絵	あかね書房 1964	児909– Sy9578–[8]	館内限定
	[9]	恐怖の黒いカーテン・アリスが消えた	アイリッシュ 著　福島正実 訳　原田維夫 絵	あかね書房 1963	児909– Sy9578–[9]	館内限定
	[10]	スパイの秘密	モーム 作　高橋豊 訳　駒崎晶子 絵	あかね書房 1964	Y7–33–[10]	館内限定
	[11]	のろわれた沼の秘密	ホイットニー 著　白木茂 訳　三輪しげる 絵	あかね書房 1964	Y7–33–[11]	館内限定
	[12]	マギル卿さいごの旅・チェーンの秘密	クロフツ 著　内田庶 訳　沢田重隆 絵	あかね書房 1965	Y7–33–[12]	館内限定
	[13]	エジプト王ののろい・スコッチテリアのなぞ	ヴァン・ダイン 著　伊藤富造 訳	あかね書房 1964	Y7–33–[13]	館内限定
	[14]	あかつきの怪人	チャータリス 原作　福島正実 訳　灘本唯人 絵	あかね書房 1964	Y7–33–[14]	館内限定
	[15]	X 線カメラのなぞ	ガードナー 原作　亀山竜樹 訳　山下勇三 絵	あかね書房 1965	Y7–33–[15]	館内限定
	[16]	非常階段・シンデレラとギャング	ウールリッチ 原作　常盤新平 訳　木村輝年 絵	あかね書房 1965	Y7–33–[16]	館内限定
	[17]	名探偵シャーロックホームズ	ドイル 原作　白木茂 訳　つだこう 絵	あかね書房 1965	Y7–33–[17]	館内限定
	[18]	ジキル博士とハイド氏・自殺クラブ	スティブンソン 著　飯島淳秀 訳　伊坂芳太郎 絵	あかね書房 1965	Y7–33–[18]	館内限定
	[19]	人工知能の怪	シオドマク 作　内田庶 訳　真鍋博 絵	あかね書房 1965	Y7–33–[19]	館内限定
	[20]	暗黒星雲	アイザック・アシモフ 著　福島正実 訳 真鍋博 絵	あかね書房 1965	Y7–33–[20]	館内限定
10		少年少女ベルヌ科学名作全集　/　12　/　学研　/　1964–1964　/				
11		世界科学・探偵小説全集　/　24　/　偕成社　/　1964–1966　/　世界推理・科学名作全集の増補改題				
12		世界の科学名作　/　15　/　講談社　/　1965–1965　/　少年少女世界科学名作全集の再構成版				
13		ジュニア版 SF 名作シリーズ　/　1　/　秋田書店　/　1966　/				
14		SF 世界の名作　/　26　/　岩崎書店　/　1966–1967　/				
15		ジュニア SF　/　10　/　盛光社　/　1967–1967　/　国内作家				

16		創作 S・F どうわ　/　9　/　盛光社　/　1967–1967　/　国内作家				
17		SF 名作シリーズ　/　28　/　偕成社　/　1967–1972　/				
18		ベルヌ名作全集　/　15　/　偕成社　/　1968–1969　/				
19		少年少女21世紀の SF　/　10　/　金の星社　/　1968–1969　/				
20		SF えどうわ　/　20　/　岩崎書店　/　1968–1970　/				
21		世界のこどもエスエフ　/　16　/　偕成社　/　1968–1970　/				
22		少年少女ベルヌ科学名作（再刊）　/　12　/　学研　/　1969–1969　/				
23		創作 SF えほん　/　12　/　盛光社　/　1969–1969　/				
24		少年少女 SF アポロシリーズ　/　8　/　岩崎書店　/　1969–1970　/				
25		ジュニア版世界の SF　/　20　/　集英社　/　1969–1970　/				
26		毎日新聞 SF シリーズジュニアー版　/　16　/　毎日新聞社　/　1969–1970　/				
27		創作子ども SF 全集　/　20　/　国土社　/　1969–1971　/				
28		サンヤング　/　37　/　朝日ソノラマ　/　1969–1972　/				
29		SF 少年文庫　/　30　/　岩崎書店　/　1970–1973　/				
30		こども SF 文庫　/　5　/　フレーベル館　/　1971–1972　/				
31		SF シリーズ　/　10　/　ポプラ社　/　1971–1972　/				
32		少年少女世界 SF 文学全集　/　20　/　あかね書房　/　1971–1973　/				
33		SF ベストセラーズ　/　11　/　鶴書房・盛光社　/　1972–1972　/　盛光社ジュニア SF の増補版				
34		少年少女世界恐怖小説　/　10　/　朝日ソノラマ　/　/				
	[1]	黒ねこ	E. A. ポー 原作　久米穣 訳　生頼範義 絵	朝日ソノラマ 1972	Y7–3234	
	[2]	吸血鬼ドラキュラ	ブラム・ストーカー 原作　石上三登志 訳　柳柊二 絵	朝日ソノラマ 1972	Y7–3235	
	[3]	恐るべき魔女	A. メリット 原作　団精二 訳　金森達 絵	朝日ソノラマ 1972	Y7–3236	
	[4]	透明人間	H. G. ウェルズ 原作　南山宏 訳　斎藤寿夫 絵	朝日ソノラマ 1972	Y7–3325	
	[5]	フランケンシュタイン	マダム・シェリー 原作　矢野浩三郎 訳　柳柊二 絵	朝日ソノラマ 1972	Y7–3324	
	[6]	女吸血鬼カーミラ	レ・ファニュ 原作　中尾明 訳　岩田浩昌 絵	朝日ソノラマ 1972	Y7–3404	
	[7]	なぞの幽霊屋敷	S. ジャクソン 原作　仁賀克雄 訳　生頼範義 絵	朝日ソノラマ 1972	Y7–3405	
	[8]	恐怖の黒魔団	D. ホイトリイ 原作　間羊太郎 訳　柳柊二 絵	朝日ソノラマ 1972	Y7–3485	
	[9]	ジキル博士とハイド氏	スチブンソン・R. L. 作　各務三郎 訳	朝日ソノラマ 1973	Y7–3519	
	[10]	狼男の怪	ガイ・エンドア 原作　北村良三 訳　武部本一郎 絵	朝日ソノラマ 1973	Y7–3524	
35		少年少女世界冒険小説　/　10　/　朝日ソノラマ　/　/				
	[1]	ソロモン王の宝窟	ライダー・ハガード 作　各務三郎 訳　生頼範義 絵	朝日ソノラマ 1973	Y7–3845	
	[2]	南氷洋 SOS	ハモンド・イネス 作　石上三登志 訳　生頼範義 絵	朝日ソノラマ 1973	Y7–3846	
	[3]	39階段のなぞ	ジョン・バカン 原作　中尾明 訳　斎藤寿夫 絵	朝日ソノラマ 1973	Y7–3881	
	[4]	最後の恐竜世界	コナン・ドイル 原作　南山宏 訳　柳柊二 絵	朝日ソノラマ 1973	Y7–3882	
	[5]	超人ドック・サベージ	ケネス・ロブソン 原作　北沢史朗 訳	朝日ソノラマ 1973	Y7–3920	
	[6]	異次元の新世界	ジェリー・ソール 原作　仁賀克雄 訳	朝日ソノラマ 1973	Y7–3921	
	[7]	密林の王者ターザン	エドガー・ライス・バローズ 原作　安竜二郎 訳　生頼範義 絵	朝日ソノラマ 1974	Y7–4070	
	[8]	冒険王コナン	ロバート・E. ハワード 原作　団精二 訳　南村喬之 絵	朝日ソノラマ 1974	Y7–4017	
	[9]	蜃気楼の怪物	A. メリット 原作　鏡明 訳　柳柊二 著	朝日ソノラマ 1974	Y7–4071	
	[10]	80日間世界一周	ジュール・ヴェルヌ 原作　北村良三 訳　中村英夫 絵	朝日ソノラマ 1974	Y7–4139	

36		少年少女傑作小説 / 10 / 朝日ソノラマ / 1973–1973 /				
37		SF バックス / 3 / すばる書房・盛光社 / 1974–1974 /				
38		SF 恐怖シリーズ / 6 / 秋田書店 / 1974–1975 /				
39		SF ベストセラーズ海外シリーズ / 8 / 鶴書房 / 1975–1976? /				
40		SF こども図書館 / 26 / 岩崎書店 / 1976–1976 / SF 世界の名作の新装改題版				
41		角川文庫 SF ジュブナイル / 20 / 角川書店 / /				
	[1]	イルカの島	アーサー・C. クラーク 著 高橋泰邦 訳	角川書店 1976	Y82–4133 (本館)	
	[2]	冥王星の謎 (宇宙船スーパーノヴァ号の冒険；1)	アンガス・マクヴィカー 著 滝沢比佐子 訳.	角川書店 1976	Y82–4128 (本館)	
	[3]	謎の冷凍人間 (宇宙船スーパーノヴァ号の冒険；2)	アンガス・マクヴィカー 著 中上守 訳	角川書店 1976	Y82–4722 (本館)	
	[4]	宇宙の呼び声	ロバート・A. ハインライン 著 福島正実 訳	角川書店 1976	Y82–4134 (本館)	
	[5]	宇宙怪獣ラモックス	ロバート・A. ハインライン 著 福島正実 訳	角川書店 1976	Y82–4468 (本館)	
	[6]	タイタンの反乱	アラン・E. ナース 著 中上守 訳	角川書店 1976	Y82–4268 (本館)	
	[7]	第十番惑星	ベリャーエフ 著 袋一平 訳	角川書店 1976	Y82–4267 (本館)	
	[8]	タイムトンネルの冒険	レスター・デル・リー 著 白木茂 訳	角川書店 1976	Y82–4269 (本館)	
	[9]	冷たい壁	イヴェット・M. ロワゾー 著 長島良三 訳	角川書店 1976	Y82–4488 (本館)	
	[10]	キング・コング	エドガー・ウォーレス，メリアン・C. クーパー 著 各務三郎 訳	角川書店 1976	Y82–4641 (本館)	
	[11]	天狼星の侵略 (宇宙監視員ラッキースター；1)	アイザック・アジモフ 著 中尾明 訳	角川書店 1976	KS151–23 (本館)	
	[12]	小惑星の海賊（宇宙監視員ラッキースター；2)	アイザック・アジモフ [著] 中尾明 訳	角川書店 1977	KS151–32 (本館)	
	[13]	タイムスリップ	ブルース・スチュアート，J. &R. ボズウェル 著 亀山龍樹 訳	角川書店 1977	KS171–115 (本館)	
	[14]	謎のロボット星	ポウル・カポン 著 亀山龍樹 訳	角川書店 1977	KS153–105 (本館)	
	[15]	惑星ドーンの少年	ジーン，ジェフ・サットン 著 滝沢比佐子 訳	角川書店 1977	KS171–123 (本館)	
	[16]	月面基地 SOS	レイモンド・F・ジョーンズ 著 久保田幸子 訳	角川書店 1977	KS161–26 (本館)	
	[17]	ネス湖の怪物	フレッド・ホイル，ジェフリイ・ホイル 著 関口幸男 訳	角川書店 1977	KS158–87 (本館)	
	[18]	深海の恐竜	フレデリック・ポール，ジャック・ウィリアムスン 著 久米穣 訳	角川書店 1978	KS167–51 (本館)	
	[19]	未来少年コナン	アレグザンダー・ケイ [著] 内田庶 訳	角川書店 1978	KS162–53 (本館)	
	[20]	星の彼方のアトランティス	クリスチャン・グルニエ 著 蒲田耕二 訳	角川書店 1978	KS157–42 (本館)	
42	[1]	なかよしえどうわ / 20 / 岩崎書店 / / SF えどうわの新装版				
		時間よとまれ！	ウエルズ 作 福島正実 文 井上洋介 絵	岩崎書店 1977	Y7–5807	
	[2]	宇平くんの大発明	北川幸比古 作 田島征三 絵	岩崎書店 1977	Y7–5812	
	[3]	バック・カップ島のひみつ	ベルヌ 作 香山美子 文 伊坂芳太良 絵	岩崎書店 1977	Y7–5803	
	[4]	宇宙ねこのぼうけん	トッド 作 白木茂 文 おのきがく 絵	岩崎書店 1977	Y7–5802	
	[5]	火星人がせめてきた	ウエルズ 作 中尾明 文 野田牧史 絵	岩崎書店 1977	Y7–5808	
	[6]	ミッキーくんの宇宙旅行	ブラウン 原作 亀山竜樹 文 長新太 絵	岩崎書店 1977	Y7–5821	
	[7]	ミリ人間のぼうけん	ヤン・ラリー 作 馬上義太郎 文 小磯三千代 絵	岩崎書店 1977	Y7–5805	
	[8]	ハンス月へいく	ポー 作 藤原一生 文 やなせたかし 絵	岩崎書店 1977	Y7–5806	
	[9]	ロボット自動車サリイ	アシモフ 作 小尾芙佐 文 横内襄 絵	岩崎書店 1977	Y7–5804	
	[10]	木の上のちっちゃな宇宙船	和田登 作 北島新平 絵	岩崎書店 1977	Y7–5814	
	[11]	てんぐのめんの宇宙人	白木茂 作 馬場のぼる 絵	岩崎書店 1977	Y7–5809	

	[12]	宇宙海ぞくパプ船長	亀山竜樹 作　西村達馬 絵	岩崎書店 1977	Y7-5815	
	[13]	なぞのせん水かん	ベルヌ 作　神戸淳吉 文　司修 絵	岩崎書店 1977	Y7-5818	
	[14]	おしいれタイムマシン	福島正実 作　小川礼子 絵	岩崎書店 1977	Y7-5811	
	[15]	ジムの金星旅行	イーラム 作　塩谷太郎 文　杉山卓 絵	岩崎書店 1977	Y7-5819	
	[16]	宇宙人スサノオ	内田庶 作　山中冬児 絵	岩崎書店 1977	Y7-5820	
	[17]	ぽんこつロボット	古田足日 作　田畑精一 絵	岩崎書店 1977	Y7-5810	
	[18]	そこにいたスペア星人	香山美子 作　金子三蔵 絵	岩崎書店 1977	Y7-5813	
	[19]	宇宙ねこの火星たんけん	トッド 作　白木茂 文　おのきがく 絵	岩崎書店 1977	Y7-5817	
	[20]	こどもセールスマン1号	北川幸比古 作　田島征三 絵	岩崎書店 1977	Y7-5816	
43	[1]	すばるのファンタジー　/　4　/　すばる書房　/　　/				
		あしたのあさは星の上	石森章太郎 著	すばる書房 1977	Y7-5998	
	[2]	さようならアイスマン	福島正実，福田庄助 作	すばる書房 1977	Y8-N11-J91	
	[3]	かがみのむこうの国	今江祥智　文　長新太　絵	すばる書房	所蔵なし	
	[4]	かいじゅうゴミイ	筒井康隆，馬場のぼる 作	すばる書房 1977	Y8-N09-J70	
44		SF ベストセラーズ　/　26　/　鶴書房　/　1977?-1979　/　鶴書房・盛光社版にすばる書房・盛光堂 SF バックス他を加えた増補版				
45		SF シリーズ　/　4　/　インタナル出版　/　1977-1977　/				
46		三省堂らいぶらりい SF 傑作短編集　/　16　/　三省堂　/　1977-1977　/				
47		少年少女21世紀の SF（新装版）　/　10　/　金の星社　/　1977-1980　/				
48		SF シリーズ　/　4　/　すばる書房　/　1978-1978　/				
49		少年 SF・ミステリー文庫　/　20　/　国土社　/　1982-1983　/　SF とミステリーを交互に刊行				
50		あたらしい SF 童話　/　20　/　岩崎書店　/　1983-1987　/				
51		ポプラ社の SF 冒険文庫　/　10　/　ポプラ社　/　1984-1985　/				
52		SF ロマン文庫　/　30　/　岩崎書店　/　1986-1986　/　SF 少年文庫の新装版				
53		ジュニア SF 選　/　6　/　草土文化　/　1987-1987　/				
54	[1]	ペップ21世紀ライブラリー　/　9　/　ペップ出版　/　　/				
		宿題のない国緑町3丁目	横田順弥 作　勝川克志 絵	ペップ出版 1989	Y8-8292	
	[2]	ガールフレンドはおかっぱ妖怪	中尾明　作　いがらしゆみこ　絵	ペップ出版 1989	所蔵なし	
	[3]	ざぶとん太郎空をゆく！	かんべむさし 作　芳井一味 絵	ペップ出版 1989	Y8-7728	
	[4]	ラグー宇宙からやってきたともだち	森下一仁 作　高橋葉介 絵	ペップ出版 1990	Y8-7908	
	[5]	魔女ジパングをゆく	浜田けい子 作　こぐれけんじろう 絵	ペップ出版 1990	Y8-8106	
	[6]	ものおき小屋の恐竜	豊田有恒 作　米田裕 絵	ペップ出版 1990	Y8-8105	
	[7]	よーすけとはな	光瀬竜 作　高梁まもる 絵	ペップ出版 1990	Y8-8585	
	[8]	時空大明神さま	内田庶 作　山口正義 絵	ペップ出版 1990	Y8-7858	
	[9]	地球は青い宝石	堀晃 作　長谷川正治 絵	ペップ出版 1991	Y8-8269	
55	[1]	海外 SF ミステリー傑作選　/　20　/　国土社　/　　/　少年 SF・ミステリー文庫の新装版				
		地球の狂った日	A. ベリャーエフ 著　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2155	
	[2]	宇宙船スカイラーク	E. E. スミス 原作　内田庶 訳	国土社 1995	Y9-2156	
	[3]	宇宙の侵略者	J. ウィリアムスン 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-1257	
	[4]	ペルシダ王国の恐怖	E. R. バローズ 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2158	
	[5]	合成人間「２２Ｘ」	J. ソール 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2159	
	[6]	絶対０度のなぞ	E. S. ガードナー 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2160	
	[7]	液体インベーダー	R. M. ファーリィ 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2161	
	[8]	タイムカメラの秘密	T. H. シャーレッド 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2162	
	[9]	未来からきた暗殺者	P. ヒース 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2163	
	[10]	宇宙大激震	M. ラインスター 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2164	
	[11]	冷凍死体のなぞ	P. ワイリー 原作　内田庶 訳	国土社 1995	Y9-2165	
	[12]	裏窓の目撃者	W. アイリッシュ 原作　内田庶 訳	国土社 1995	Y9-2166	
	[13]	暴力のまち	D. ハメット 原作　内田庶 訳	国土社 1995	Y9-2167	
	[14]	のろわれた山荘	P. マガー 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2168	
	[15]	ハエが夜をねらう！	J. ブリュース 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2169	
	[16]	殺しのメロディー	A. クリスティー 原作　内田庶 訳	国土社 1995	Y9-2170	
	[17]	死者からの声	R. ハギンズ 原作　内田庶 訳	国土社 1995	Y9-2171	
	[18]	にせ札を追え！	R. チャンドラー 原作　福島正実 訳	国土社 1995	Y9-2172	

55	[19]	ひきさかれた過去	H. ペンティコースト 原作　内田庶 訳	国土社 1995	Y9-2173	
	[20]	クリスマス殺人事件	N. ブレイク 原作　内田庶 訳	国土社 1995	Y9-2174	
56	[1]	星新一ショートショートセレクション　/　15　/　理論社　/　　/				
		宇宙のネロ	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2001	Y8-N02-H74	
	[2]	ねらわれた星	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2001	Y8-N01-H633	
	[3]	ねむりウサギ	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2002	Y8-N02-H95	
	[4]	奇妙な旅行	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2002	Y8-N02-H230	
	[5]	番号をどうぞ	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2002	Y8-N02-H314	
	[6]	頭の大きなロボット	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2002	Y8-N02-H552	
	[7]	未来人の家	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2002	Y8-N02-H663	
	[8]	夜の山道で	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2002	Y8-N03-H29	
	[9]	さもないと	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2003	Y8-N03-H159	
	[10]	重要な任務	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2003	Y8-N03-H317	
	[11]	ピーターパンの島	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2003	Y8-N03-H645	
	[12]	盗賊会社	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2003	Y8-N03-H812	
	[13]	クリスマスイブの出来事	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2003	Y8-N04-H37	
	[14]	ボタン星からの贈り物	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2004	Y8-N04-H234	
	[15]	宇宙の男たち	星新一 作　和田誠 絵	理論社 2004	Y8-N04-H445	
57	[1]	冒険ファンタジー名作選　/　20　/　岩崎書店　/　　/				
		ロスト・ワールド	コナン・ドイル 原作　久米穣 訳　竹本泉 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H343	
	[2]	火星のプリンセス	エドガー・R. バローズ 原作　亀山龍樹 訳　山本貴嗣 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H344	
	[3]	27世紀の発明王	ヒューゴー・ガーンズバック 原作　福島正実 訳　大塚あきら 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H345	
	[4]	いきている首	アレクサンドル・ベリヤーエフ 原作　馬上義太郎 訳　琴月綾 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H346	
	[5]	ぬすまれたタイムマシン	レイ・カミングス 原作　南山宏 訳　御米椎 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H347	
	[6]	ついらくした月	ロバート・C. シェリフ 原作　白木茂 訳　竹本泉 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H348	
	[7]	黒い宇宙船	マレイ・ラインスター 原作　野田昌宏 訳　赤石沢貴士 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H349	
	[8]	キャプテンフューチャーの冒険	エドモンド・ハミルトン 原作　福島正実 訳　秋恭摩 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H350	
	[9]	次元パトロール	サム・マーウィン・ジュニア 原作　中上守 訳　山田卓司 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H351	
	[10]	うそつきロボット	アイザック・アシモフ 原作　小尾芙佐 訳　山田卓司 絵	岩崎書店 2003	Y9-N03-H352	
	[11]	地底探検	ジュール・ベルヌ 原作　久米元一 訳　琴月綾 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H342	
	[12]	月世界最初の人間	ハーバート・G. ウェルズ 原作　塩谷太郎 訳　今井修司 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H343	
	[13]	宇宙のスカイラーク号	エドワード・E. スミス 原作　亀山龍樹 訳　赤石沢貴士 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H344	
	[14]	超能力部隊	ロバート・A. ハインライン 原作　矢野徹 訳　琴月綾 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H345	
	[15]	逃げたロボット	レスター・デル・レイ 原作　中尾明 訳　御米椎 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H346	
	[16]	栄光の宇宙パイロット	ゲオルギー・グレーウィッチ 原作　袋一平 訳　赤石沢貴士 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H347	
	[17]	合成怪物の逆しゅう	レイモンド・F. ジョーンズ 原作　半田倹一 訳　山田卓司 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H348	
	[18]	星からきた探偵	ハル・クレメント 原作　内田庶 訳　山田卓司 絵	岩崎書店 2004	Y9-H04-H349	
	[19]	光る雪の恐怖	リチャード・ホールデン 原作　内田庶 訳　福井典子 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H350	
	[20]	恐竜 1 億年	リチャード・マースティン 原作　福島正実 訳　福井典子 絵	岩崎書店 2004	Y9-N04-H351	

58	[1]	SF 名作コレクション / 20 / 岩崎書店 / / SF 少年文庫の抜粋版				
		アーサー王とあった男	マーク・トウェーン 原作　亀山龍樹 訳	岩崎書店 2005	Y9-N05-H375	
	[2]	タイムマシン	H. G. ウェルズ 原作　塩谷太郎 訳	岩崎書店 2005	Y9-N05-H376	
	[3]	わすれられた惑星	マレイ・ラインスター 原作　矢野徹 訳	岩崎書店 2005	Y9-N05-H377	
	[4]	宇宙怪獣ラモックス	ロバート・ハインライン 原作　福島正実 訳	岩崎書店 2005	Y9-N05-H378	
	[5]	なぞの第九惑星	ドナルド・ウォルハイム 原作　白木茂 訳	岩崎書店 2005	Y9-N05-H379	
	[6]	宇宙のサバイバル戦争	トム・ゴドウィン 原作　中上守 訳	岩崎書店 2005	Y9-N05-H380	
	[7]	夢みる宇宙人	ジョン・D. マクドナルド 原作　常盤新平 訳	岩崎書店 2005	Y9-N05-H381	
	[8]	作戦 NACL	光瀬龍 作	岩崎書店 2005	Y9-N05-H1033	
	[9]	百万の太陽	福島正実 作	岩崎書店 2005	Y9-N05-H1034	
	[10]	時間と空間の冒険：世界の SF 短編集	福島正実　編	岩崎書店 2005	Y9-N05-H382	
	[11]	宇宙飛行士ビッグスの冒険	ネルソン・ボンド 作　亀山龍樹 訳	岩崎書店 2006	Y9-N06-H402	
	[12]	木星のラッキースター	ポール・フレンチ 作　土居耕 訳	岩崎書店 2006	Y9-N06-H403	
	[13]	宇宙の密航少年	R. M. イーラム 作　白木茂 訳	岩崎書店 2006	Y9-N06-H404	
	[14]	凍った宇宙	パトリック・ムーア 作　福島正実 訳	岩崎書店 2006	Y9-N06-H405	
	[15]	宇宙の勝利者	ゴードン・ディクスン 作　中上守 訳	岩崎書店 2006	Y9-N06-H406	
	[16]	タイムカプセルの秘密	ポール・アンダースン 作　内田庶 訳	岩崎書店 2006	Y9-N06-H407	
	[17]	惑星オカピスに輝く聖火	ミルトン・レッサー 作　矢野徹 訳	岩崎書店 2006	Y9-N06-H408	
	[18]	迷宮世界	福島正実 作	岩崎書店 2006	Y8-N06-H1034	
	[19]	アルファ C の反乱	R. シルヴァーバーグ 原作　中尾明 訳	岩崎書店 2006	Y9-N06-H409	
	[20]	超世界への旅：日本の SF 短編集	福島正実　編	岩崎書店 2006	Y8-N06-H1035	
59	[1]	SF セレクション / 赤木かん子 編 / 7 / ポプラ社 / /				
		時空の旅	星新一，アーサー・C. クラーク 他著	ポプラ社 2005	Y9-N05-H139	
	[2]	ロボット vs. 人類	カレル・チャペック，アイザック・アシモフ 他著	ポプラ社 2005	Y9-N05-H140	
	[3]	宇宙の孤独	手塚治虫，フレドリック・ブラウン 他著	ポプラ社 2005	Y9-N05-H141	
	[4]	科学者たちの陰謀	福島正実，大海赫 他著	ポプラ社 2005	Y9-N05-H142	
	[5]	地球最後の日	那須正幹，赤川次郎 他著	ポプラ社 2005	Y9-N05-H143	
	[6]	変身願望メタモルフォーゼ	志村貴子，菅浩江 他著	ポプラ社 2005	Y9-N05-H144	
	[7]	未来世界へようこそ	小松左京，カート・ボネガット 他著	ポプラ社 2005	Y9-N05-H145	
60	[1]	創作子ども SF 全集（復刻版） / 20 / ブッキング / / 国土社1969-71刊全20巻の復刻盤				
		孤島ひとりぼっち	矢野徹 文　梶鮎太 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[2]	砂のあした	小沢正 著　井上洋介 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[3]	宇宙バス	香山美子 著 小林与志 著	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[4]	犬の学校	佐野美津男 著　中村宏 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[5]	日本子ども遊撃隊	北川幸比古 著　田島征三 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[6]	消えた五人の小学生	大石真 著　山藤章二 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[7]	少年エスパー戦隊	豊田有恒 著　藤沢友一 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[8]	宇宙にかける橋	福島正実 著　石田武雄 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[9]	あの炎をくぐれ	光瀬竜 著　石田武雄 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[10]	おかしの男	杉山径一 著　小林与志 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[11]	フィルムは生きていた	谷真介 著　赤坂三好 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[12]	宇宙ヨット旅行	瀬川昌男 著　伊藤展安 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[13]	遠くまでゆく日	三田村信行 著　菊地薫 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[14]	ハチュウ類人間	立花広紀 著　木村正志 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[15]	プラスチックの木	香山美子 著　杉浦範茂 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[16]	ぼくのまっかな丸木舟	久保村恵 著　中村宏 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[17]	だけどぼくは海をみた	佐野美津男 著　中村宏 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[18]	コンピューター人間	桜井信夫 著　斎藤博之 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[19]	帰ってきたゼロ戦	砂田弘 著　田代三善 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	
	[20]	シュリー号の宇宙漂流記	今日泊亜蘭 著　斎藤博之 絵	ブッキング 2006	所蔵なし	

61	[1]	ボクラノ SF　/　5　/　福音館書店　/　　/				
		海竜めざめる	ジョン・ウインダム 著　星新一 訳　長新太 画	福音館書店 2009	Y9-N09-J137	
	[2]	秒読み：筒井康隆コレクション	筒井康隆 著　加藤伸吉 画	福音館書店 2009	Y8-N09-J317	
	[3]	闘牛場：フレデリック・ブラウン・コレクション	フレドリック・ブラウン 著　星新一 訳　島田虎之介 画	福音館書店 2009	Y9-N09-J138	
	[4]	すぺるむさぴえんすの冒険：小松左京コレクション	小松左京 著　杉山実 画	福音館書店 2009	Y8-N09-J1281	
	[5]	どろんころんど	北野勇作 作　鈴木志保 画	福音館書店 2010	Y8-N09-J780	
62	[1]	筒井康隆 SF ジュブナイルセレクション　/　5　/　金の星社　/　　/				
		ミラーマンの時間	筒井康隆 著	金の星社 2010	Y8-N10-J241	
	[2]	細菌人間	筒井康隆 著	金の星社 2010	Y8-N10-J295	
	[3]	地球はおおさわぎ	筒井康隆 著	金の星社 2010	Y8-N10-J296	
	[4]	デラックス狂詩曲	筒井康隆 著	金の星社 2010	Y8-N10-J316	
	[5]	W 世界の少年	筒井康隆 著	金の星社 2010	Y8-N10-J317	
63	[1]	ジュニア SF（復刻版）　/　10　/　ジュンク堂書店　/　　/　盛光社 1 967刊全10巻の復刻版				
		新世界遊撃隊	矢野徹　著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
	[2]	夕ばえ作戦	光瀬龍 著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
	[3]	黒の放射線	中尾明　著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
	[4]	リュイテン太陽	福島正実　著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
	[5]	時をかける少女	筒井康隆　著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
	[6]	なぞの転校生	眉村卓　著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
	[7]	時間砲計画	豊田有恒 著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
63	[8]	すばらしき超能力時代	北川幸比古 著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
	[9]	人類のあけぼの号	内田庶 著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
	[10]	見えないものの影	小松左京　著	ジュンク堂書店 2013	所蔵なし	
64	[1]	21世紀空想科学小説　/　9　/　岩崎書店　/　　/				
		かめくんのこと	北野勇作 作　森川弘子 絵	岩崎書店 2013	Y8-N13-L583	
	[2]	何かが来た	東野司 作　佐竹美保 絵	岩崎書店 2013	Y8-N13-L584	
	[3]	小惑星2162DS の謎	林譲治 作　YOUCHAN 絵	岩崎書店 2013	Y8-N13-L673	
	[4]	クサヨミ	藤田雅矢 作　中川悠京 絵	岩崎書店 2013	Y8-N13-L672	
	[5]	衛星軌道2万マイル	藤崎慎吾 作　田川秀樹 絵	岩崎書店 2013	Y8-N13-L822	
	[6]	妖怪スタジアム	梶尾真治 作　海野螢 絵	岩崎書店 2013	Y8-N13-L823	
	[7]	洞窟で待っていた	松崎有理 作　横山えいじ 絵	岩崎書店 2013	Y8-N13-L882	
	[8]	夏葉と宇宙へ3週間	山本弘 作　すまき俊悟 絵	岩崎書店 2013	Y8-N14-L16	
	[9]	ドラゴン株式会社	新城カズマ 作　アントンシク 絵	岩崎書店 2013	Y8-N13-L965	

※シリーズ名のみ挙げた全集の各巻詳細は『少年少女昭和 SF 美術館』を参照のこと

結び

川端　有子

２日間にわたりまして、長時間の講義を受けてくださいまして、ありがとうございました。今年は、「英米児童文学をめぐる時代と環境」ということで、少しはみ出した作品もあったのですが、聞いていただきました。

歴史小説のところでは、本間先生のお話は、今は大きな歴史を捉え直すというような物語から、小さな物語、小さな歴史の物語へと変遷が起こっているようだ、というお話、それから私たちが歴史と捉えていないような近代の物語、第一次世界大戦や第二次世界大戦も、歴史小説の範疇に入ってきたのだというお話でした。そうしますと、戦勝国であるイギリスと敗戦国である日本とでは、おのずからその歴史小説の書き方というのも、過去の振り返り方も違ってくるのではないか、というような気がします。

日本でも歴史小説というのは、子ども向けには非常にたくさん良いものがあります。今西祐行、勝尾金弥など、地味ではありますが、大変優れた作品がたくさんあるので、そういうものを子どもたちに手に取って欲しいなと非常に強く思いました。事実、勝尾金弥の最初の作品である『井戸掘吉左衛門』というのは、フィールドワークをし、地元の歴史を調べる中学生たちが登場してきて、あの本を読んで、私の弟は歴史を目指すようになったというようなこともありまして、いい本だったなと思います。

それから、イギリスの歴史小説というのは非常に物語性が豊かでして、それを大切にしているのがイギリスなのだ、ということがよく分かります。それは、２番目にありました内藤先生のお話のように、場所の中に、風景の中に、そしてクライメイト（climate）の中に物語を見出すという姿勢が強い、そういうことも描く、ということにも見られます。例えば話にもありましたマーティン・ピピンの物語、あの作者が歩いたサセックスのロングディスタンス・フットパス（long distance footpath）を、私も実際に一部歩いてみたのですが、本当に土地の中から物語が生まれてきたのだなということを実感した覚えがあります。

そうして見ると、果たしてそんな物語が日本にもあるだろうかというような疑問に捉われることがあります。しかし、３月11日の地震の後、民俗学者の方々が、これでまた日本の故郷が一つ失われた、物語が失われたのではないかというようなことをおっしゃっていて、その時、私は東北をその地域、風土から研究する民俗学「東北学」の先生たちがいらっしゃるということを知り、東北というのは本当に物語の宝庫で、それが失われていくということに危機感を募らせている、という話を聞きました。そのような物語もまたクローズアップされるべきであるというふうに考えます。

また、ローズマリ・サトクリフ（Rosemary Sutcliff）という作家が本間先生のお話に出てきました。ローズマリ・サトクリフは、イギリスの歴史小説の巨匠なのですが、彼女の作品の中には、男同士の友情というのが非常によく描かれています。ところで、皆さんは「腐女子」、「腐女子読み」、というのを御存じでしょうか。どのようなものにもボーイズラブを読み込んでしまうという、そういう読み方のことを俗に言う言葉です。サトクリフの描く男の友情を日本人の中学生、高校生の女の子たちがボーイズラブとして読んで喜んでいる、という話を聞きまして、何とプロダクティブ（productive）な読み方なのだろうかと思いました。これもまた読者の自由というものだと思いますし、そういう読み方は大歓迎だなと、私は思っています。

水間先生のお話の中では、アメリカを主に「LGBT 児童文学」というテーマを扱われました。話の中で、年表と比べてその出版年を見た時にはっきりと分かったのは、アメリカでは、社会運

動がその年のうちに児童文学に反映されるということですね。つまり、社会運動というものの中に、児童書出版というのがもう含まれているということなのです。で、これは、なかなか日本ではないことなのではないかと思いました。けれども、逆に言いますとアメリカの児童文学はそういう時事ネタといいますか、今問題になっている、今話題になっているというテーマに、ぱっと飛び付くという傾向がありまして、それはあっという間に時代遅れとなってしまうこともあるわけです。

水間先生が紹介された作品のリストの中で、私が読んでいるものは少ないのですが、それでもこれは斬新で面白いと思ったのは、F・リア・ブロックの『ウィーツィ・バット』ぐらいで、あとは取り上げたこと自体の話題性は凄いのですが、物語の中身や構成としては非常に平凡だなという感想を抱いたことがあります。ここには、時事的な、今問題になっているテーマを取り上げると売れる、という状況、それからアメリカのように国語の教科書というのが決まっていない場合、学校で取り上げられ、学校の推薦図書になるということが非常に売り上げにつながり、作家もそれを常に意識している、ということがあり、そのような背景があるせいかと思います。

アメリカの児童文学は割合メッセージ性が強く、どちらかというとイギリスの児童文学の方が、物語性が強いというような傾向があるように、私には思われました。

私自身の講義ですが、四つの作品を、実は歴史小説ではない四つの作品を歴史小説として読んでみるというような試みだったと、今になって思っております。また、４冊の本は、それぞれの地方の風土との深い関わりがありました。それで、こじつけますと、それこそ腐女子読みになってしまうのですが、『小公女』のセーラのお父さんと、それからセーラのお父さんのお友達、つまりセーラを引き取るキャリスフォード氏ですが、同じパブリックスクールを出た大親友だったという設定です。そこのところにホモソーシャルな関係を見出すというような批評もないわけではありません。このような古い作品を、今の読者はどう受け止めるか、そのとき何が私たちにできるかということは、よく考えてみたいことだと思います。

それから、先ほど西尾課長がお話しになりました、SF に未来はあるのかということですが、今、歴史小説と SF を合体したようなスチームパンク（steampunk）というジャンルが、子どものものでは見たことがないのですが、大人向けの本の世界では結構あります。19世紀を舞台にしながら SF 小説になっている、というような作品です。早川書房の『アレクシア女史、倫敦で吸血鬼と戦う：英国パラソル奇譚』（*Soulless*）から始まる4冊のシリーズが非常に面白くて、こういうジャンルに子ども向きのものが出てきても面白いなと思っています。また、ウェルズの『宇宙戦争』（*The War of the Worlds*，1898）と、それから『タイムマシン』（*The Time Machine*，1895）が、実は本当にあったのだ、という詐欺を働いた人たちの19世紀の話を、スペイン人が書いている『時の地図』（*El mapa del tiempo*，2008）、『宙の地図』（*El mapa del cielo*，2012）というようなスチームパンクも出ており、このように、諸ジャンルがいろいろと関わり合うことによって、また新しい作品というのが出てきます。そして、大人のところで広まっていけば、そのうち、また子ども向きにも出てくるのではないか、そんな感じがしております。

こんなことでまとめになるかどうか分からないのですが、皆さんの討論の一つのきっかけとしていただければと思い、ここで締めくくらせていただきます。

（かわばた　ありこ　日本女子大学家政学部
児童学科教授、国立国会図書館客員調査員）

講師略歴（五十音順、敬称略）※

川端　有子（かわばた　ありこ）

関西学院大学大学院博士課程満期退学、英国ローハンプトン大学にて PhD（児童文学）を取得。愛知県立大学外国語学部を経て、現在は日本女子大学家政学部児童学科教授。日本イギリス児童文学会会長、国立国会図書館客員調査員（平成24年度～）。

著　書　『少女小説から世界が見える：ペリーヌはなぜ英語が話せたか』、『児童文学の教科書』

編著書　『「もの」から読み解く世界児童文学事典』（共編著）、『赤毛のアン　スクラップブック』（編著・訳）

訳　書　『本を読む少女たち：ジョー、アン、メアリーの世界』、『絵本の絵を読む』（共訳）

内藤　貴子（ないとう　たかこ）

白百合女子大学大学院・児童文学専攻博士課程単位取得退学。同大学児童文化研究センター専任研究助手を経て、現在は昭和女子大学・東京女子大学・和洋女子大学ほかで非常勤講師を務めながら、日本女子大学大学院・人間発達学専攻博士課程後期でイギリス児童文学における自然表象について研究。

著　書　「コンデンスミルクの魔法の力――M・モーパーゴの物語技法としての〈食〉」（『子どもの本と〈食〉　物語の新しい食べ方』（共著））

訳　書　『めいたんていネート　いそがしいクリスマス』（共訳）

論　文　「川の少年とは誰か？――*River Boy* における“figment”と自然表象」（『Tinker Bell　英語圏児童文学研究』57号）等

本間　裕子（ほんま　ひろこ）

青山学院大学大学院修士課程修了。青山学院大学ほかで非常勤講師を務める。

著　書　『英語圏諸国の児童文学 II』（共著）

編著書　『「もの」から読み解く世界児童文学事典』（共編著）

訳　書　『アネイリンの歌：ケルトの戦の物語』、「女騎士アランナ・シリーズ」、『賞をとった子どもの本：70の賞とその歴史』（共訳）

論　文　「古代ギリシアを描く女性たち―ペロポネソス戦争三様―」（『英文学思潮』85巻　青山学院大学英文学部会 編）等

水間　千恵（みずま　ちえ）

名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士課程修了。博士（文学）。財団法人大阪国際児童文学館勤務を経て、現在は川口短期大学こども学科准教授。

著　書　『女になった海賊と大人にならない子どもたち―ロビンソン変形譚のゆくえ』（日本児童文学学会奨励賞受賞）

編著書　『「場所」から読み解く世界児童文学事典』（共編著）、『「もの」から読み解く世界児童文学事典』（共編著）、『世界児童文学百科現代編』（共編著）

訳　書　『真夜中の子ネコ』、『ケニー＆ドラゴン：伝説の竜退治』

※講師肩書は講座実施当時のもの。

British and American Children's Literature in Historical and Regional Contexts

Transcript of the ILCL Lecture Series on Children's Literature, 2013

Contents

Foreword ····· Takehiko Sato ····· 1

Introductory Notes ····· 3

Introduction ····· Ariko Kawabata ····· 5

A History of British Historical Fictions ····· Hiroko Homma ····· 8

Children, Land and Climate in Children's Literature ·· Takako Naito ····· 23

Sexual Minorities in Children's Literature ····· Chie Mizuma ····· 50

History and Gender: *Little Lord Fauntleroy* and *A Little Princess* by Burnett, and *Sans Famille* and *En Famille* by Malot ····· Ariko Kawabata ····· 71

Reference Books -- Rise and Fall of the SF Complete Collections for Children
Hatsuki Nishio ····· 91

Conclusion ····· Ariko Kawabata ····· 105

About the Speakers ····· 107

平成25年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録
「英米児童文学をめぐる時代と環境」

平成 26 年 10 月 15 日　発行

編集・発行　国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話　03-3827-2053　FAX　03-3827-2043
印刷　株式会社　丸井工文社
〒107-0062　東京都港区南青山7-1-5

ＩＳＢＮ　９７８－４－８７５８２－７６６－５

本誌に掲載された記事を全文又は長文にわたり抜粋して転載する場合は、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。

本誌の PDF 版を国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/）で御覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。

リサイクル適性Ⓑ
この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。